
魔法少女リリカルなのはStrikerS 紅き瞳の暗黒の力...されど心は希望の光...

フリオニール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 紅き瞳の暗黒の力…
されど心は希望の光…

【Nコード】

N3761M

【作者名】

フリオニール

【あらすじ】

ごくごく平凡な一市民の男性、東雲 佑輔（しのめ ゆうすけ）（25（笑））…ある日、仕事が終わりに、ファイナルファンタジーをするかガンダムを見るか迷いながら公園を帰っていると、なにか異様な気配を感じる…そこで彼が見たものとは！！

S・T・Sの世界を舞台に今！彼の熱血と魂ツッコミが咆哮する！！彼の生き様をその目でしかと！見届けよ！！（バカ）……………

……………シリアスと恋愛も……………あるよ？多分……………

はじめに

作者「さあ！はじまりましたあああああ！……！！！！魔法少女リリカルなのはStrikerS 紅き瞳の暗黒の力…されど心は希望の光…がつー！！（＾o＾）」

ティアナ「テンション高いわね……………」

スバル「イエイー！！」

ティアナ「ってアンタもかい……………（汗）」

作者「いいじゃんYO！はじめくらい！飛ばしもYO〜！」

ティアナ「……………ごめん…そのノリはウザイ…」

作者「（；）！！……………しくしく…（泣）」

スバル「ひどいよティア！作者泣いてるじゃん！」

ティアナ「いや…そんなこと言われても？」

作者「はあああ…やる気なくした……………もう書かない…（泣）」

ティアナ「まだ始まってもないのに！？」

スバル「あゝあ…イジけちゃった…（汗）」

作者「……………よし！決めた！」

ティアナ「なにを？」

作者「作者にたてつくティアナ嬢はそりやあもっ！！ここでは書けないような、あゝんなことやこゝんな！《ガチャー！》……………あの…ティアナ様……………すみません…謝りますから…クロスミラージュを…降ろして…お願い…（泣）」

ティアナ「分かればいいのよ（怒）」

スバル「ティア…怖い…（泣）」

ティアナ「で？具体的にはどう展開するの？この話」

作者「知らん！！」

スバル「ハッキリ言っただ！？」

ティアナ「……………アンタね…どうすんのよ…一応^{はじめに}ってタイトルあるんだし…」

作者「だつてさ……………一応ギャグ思考で行くようにはするけどシリアスも盛り込みたいしなあ……………漠然と構想はできてるけど内容が…書けるかな？初投稿だし？」

スバル「そういえば作者って小説書いたことって……………（汗）」

作者「ないな！エッヘン！！」

ティアナ「威張るな！！どうすんのよ！！」

作者「まあなんとかなるよ〜」 てなわけで読者の皆さんには見苦しい所が多々あるとはありますがアドバイス等頂けるとありがたいです それじゃ執筆に戻るからあとヨロシク！」

タツタツ…

スバル「……………」

ティアナ「…………… 自分で綺麗にまとめた… つもり…？ あれ…」

スバル「じゃないの… かな…？ アハ… アハハ…」

ティアナ「えっと…………… こんな感じで… 話が進むとは思いますが… 皆さんどうかよろしくお願いします」

スバル「よろしくお願いします！！」

佑輔「…………… 俺の出番は…？ 今回… 無し…？」

第一話・時空の彼方からこんにちは（前書き）

さあ！記念すべき第一話！未熟ですが読んでやってください！

第一話：時空の彼方からこんにちわ

地球時間にしてA M 3：00……

佑輔「はあ……やっと帰れる……あんのアホ社長……いつも仕事を倍に
しやがって……いつか地獄見せてやろうか。」

ぶつぶつ言いながら歩いているのは主人公になるであろう青年、東
雲 佑輔（25）である。

ちなみに独身であれば彼女もいない……

佑輔「やかましいわ!!（泣）……… って……あれ……俺、誰にしや
べってるんだっけ?……… いかんいかん……遂に疲れもピークに達した
か?こんなときは……帰ってガンダムでも見るか、ファイナルファン
タジーでもするのが一番!」

なんともとても25歳の発想とは信じがたいストレス発散方法であ
る。

佑輔「ちなみに好きなガンダムは ガンダム!ファイナルファンタ
ジーでいうなれば4だな!」

どうでもええわ!んな情報!……… つか……自分で暴露すな……（泣）

佑輔「さて……明日から休みだし ゆっくり遊べるぞ……… てなわけで

…少しでも時間短縮のため……………近道!!」

ガサガサ!

茂みの中に潜り公園に入る…これが彼が帰るための近道なのだが……

佑輔「……………いつ来ても…真夜中の公園って…不気味だよな」
(泣)……………幽霊なんか出やしないだろうな……………ん?」

ふと公園に設置されているブランコ…その近くにある砂場が目に入
った……

佑輔「……………もう…あれから8年…か……………明^{あきら}…未菜^{みな}……」

明と未菜……………その二人は彼の兄弟である……………いや…だった…
今はもうこの世にはいない……………彼の家族は死んでしまったのだ…
…強盗によって……………そして彼自身も襲われた…

キイ…キイ…

ブランコに座りながらタバコに火をつける……………

佑輔「すう……………はああ……………俺だけ……………生き残って…
ずっと独り……………なんだよな……………全く…神様もとんだお節介だよな…
…ハハッ…しかし…不可解なこともあるよな…なぜ……」

犯人まで死んだ? 変死体になってまで

そう…彼を襲った犯人もその場で死んでいた……………
警察も原因もわからず俺が犯人を殺したという説も上がったが証拠

もなく… 佑輔自身にも記憶がなかった… 背中を刺され気を失っていたから……

佑輔「……………んがあああ!!」

彼は悩んでもわからない答えに雄叫びを上げた。

佑輔「悩んでもわからんもんはわからん!!! 事件はあれで解決したんだ! 俺は俺らしく生きる!!」

そうだろ… 親父…

彼は父親に教わった生きる上で大切な事を思い出していた……が!

ブン!ゴガ!!

佑輔「あべし!?!」

佑輔の頭に本(国語辞典)が投げつけられた! 佑輔に1000のダメージ!

近所の住人(怖いお兄さん)「夜中にうるっせえんだよ!!! 何時だと思ってやがるああ!!」(怒)「

佑輔「ひいひい!! すいませんすいません!!!」(泣)「

更に怖いお兄さんの顔を見てしまい精神ダメージ50!

…… なんと情けない姿であった…

佑輔「あゝ酷いめにあった…（泣）…さて…帰るか…ってなんだ…ありゃ…？」

目の前にはなにやらわからんものが……そう…まるで空間に穴があるような感じ……ファイナルファンタジーでいうと…デジモン？

佑輔「……うん！何も見なかった！さあ帰^{グイーン}……
ってあれ……なんか…引っ張られてませんか？俺…」

その空間は佑輔を飲み込もうとしていた！

佑輔「ちょ！？マジ！！た…タンマアアア…！！（泣）」

佑輔は逃げだした！ 〃（；）

ブブ…！

しかし空間〓デジモンっぽいものからは逃げられない！！

佑輔「だああああ！！！！即死魔法なんていやああああ！！！！
（泣）」

近所の人（ヤ・ク・ザ）「だからうるせえつつてんだるおおお！！
撃ち殺されたいんかわりやああああ……あ……あ？」

佑輔「怖いお兄さんヘルプミ…！！盃も交わすからヘルプスミ…
！！！！（泣）」

近所のヤクザ（顔は渋いぞ）「いや、ヘルプミいな。」

佑輔「冷静なツツコミすな〜!!!!!!」

バックン……

ヤクザ（サングラスが似合うと思うがどう？）「あ……」

遂に佑輔はデジョンに食われてしまった……

ヤクザ（チンピラだからってバカにすんなよ）「あ………兄貴
~~~~!!!!!!……俺は今摩訶不思議体験しやしたああああ  
!!!!!!」

兄貴（マツチヨは正義ですたい）「夜中にやあああかましいんじ  
やあああ!!!!!!指つめるかわりやああああ!!!!（怒）」

………佑輔は消えた………この世界から………さらば佑輔！君の事  
は二日もすれば忘れるだろう!!!!

佑輔「死んでたまるかああああ!!!!クソ!!!!なんなんだこ  
りゃ!!!!」

佑輔はもがいていた……まるで宇宙空間のような世界を……

佑輔「まったく！なんかこうも少し味気ある場所になんねえのかな  
?………ん？」

『守つて………』

なにやら声が聞こえてきた……

佑輔「だ…誰だ！どこにいる！」

『守って……これから出会う…仲間…を…そして…新しい…家族を…』

佑輔「だ…からあ！誰だ！…どこにいるんだってば！いくら温厚なお兄さんもしまいにや怒るぞ！…だいたい！家族って誰？！」

『……貴方は……つ……の……み……の血……』

佑輔「おい！もつとハッキリ喋っ……な…なんだ！？光！？うわあああああ！……！！！」

そのまま俺は…まるで光の闇に飲み込まれたように思えた…  
…そう…それが…新たな世界…俺の冒険が始まったんだ…

第一話・時空の彼方からこんにちわ (後書き)

.....なのはキャラ.....出てこねえええ!!!!!!なに  
してんの自分!?!?!すいません...ホントにすいません... (泣)

第二話：今度はお空からこんにちわ　ロープの無いバンジーは危ないぞ（前

佑輔「さあ！ やつとここからリリカルな世界へと飛ぶぞ～～！！！」

リン？「わあ～～い……………ってなんで二話目になってやつとで  
すか……」

佑輔「作者に言え！！俺のせいじゃないわ！！」

リン？「でもやつとこれでリンの出番もです」

佑輔「それもそうだな！ さあ　魔法少女リリカルなのはStrike  
ers　紅き瞳の暗黒の力…されど心は希望の光…第二話！ 始まる  
ぜ～～！！！」

リン？「ちよつと！ 『始まります…』ですよ？ 台本通りやってく  
ださい！」

佑輔「いやだつて……大人しく言う俺って想像できる？」

リン？「……………ゾツとしますね……」

佑輔「だろ？」

第二話：今度はお空からこんにちわ　ロープの無いバンジーは危ないぞ

フェイト「こっちの空域は私たちで抑える、そっちは新人たちのフ  
ォローをお願い。」

グリフィス『了解！』

なのは「おんなじ空は久しぶりだね。」

フェイト（うん、なのは）

ここはエイリ山岳丘陵地区：機動六課はガジェットがレリックを狙  
いに暴走させた貨物列車を追っていた……  
貨物列車に新人フォワードメンバー：空は隊長であるなのは、そし  
てフェイトが抑えるべく出勤していた……

ゴオオオ！

なのは「……！」

フェイト「……！」

二人のすぐそばに航空型ガジェットが迫ってきた……

レイジングハート『アクセル・シューター』



シュバ！！ドドン！！！

バルディツシュ『ハーケンフォーム』  
フェイト「ハアアア！！」

ブウン！！ズガッ！！ドオン！！

二人は迎撃に入りガジェットをもろともせず撃墜していった……が  
！！！！

ビー！ビー！

ロングアーチに更なる警報がなった！

グリフィス「なんだ！！シャーリー！」

カタカタカタ！！

巧みにキーボードを操り原因を調べるシャーリー……すると……

シャーリー「こ、これは！？次元転移反応です！！なのはさん、フ  
ェイトさん！気をつけて！場所は二人の真上です！！」

なのは・フェイト「え！？」

二人が上を見上げると空間に穴が開き……なにかが落下してきだし  
た……

佑輔「……んっ……くう！！な……なにが起こ……って……どえ  
ええええええええ！！！！！！」

そう遂に來ました我らがアクション芸人佑輔が！！

佑輔「誰がリアクションって！！ツツコミ入れてる場合じゃねえ！！落〜ち〜て〜るううう！！！」

そう佑輔はあの空間から上空に飛ばされたのだ！んで飛べるはずもなく落ちている次第…

佑輔（あ〜そつか…デジョンってこういう殺し方するんだっただ〜）

佑輔は現実逃避しはじめた…しかし状況はかわりません！

佑輔「って死ぬのはいやじゃあああ！！！！（マジ泣）」

ガシ！！

佑輔「うきゅー！！」

なにかに腕を掴まれた…見上げると…

フェイト「大丈夫ですか！！」

佑輔「……………へ？」

フェイトに腕を掴まれ飛んでいるのだが…佑輔はまだ状況がわからず周りを見渡すと…

フェイト「あ…あの？」

佑輔「……………おああああああああア  
アアア……！」

フェイト「きゃっ！」

佑輔「飛んでる！！人が飛んでる！！っつか俺も飛んでる……！！  
……………掴んでるけど……！！……！」

ジタバタ……！

フェイト「ちょ！落ちついてください！落ちちゃいますよ！？」

佑輔「お……おっ……」

言われた通り落ちつこうとした……

佑輔（な……なにが起こってんだあ？さっぱりわからん……ん？）

フェイト「落ちつきましたか？今から貴方を安全な場所に移動させ  
ますから……」

佑輔「え……あ……えと……わかったが……後ろのアレは……なんか追いか  
けてきてない？俺達を……」

バルディッシュ『マスター！ガジェットです！』

フェイト「！？」

ピシュン！ピシュン！

後ろからついてきたガジェットが撃ってきた。

佑輔「うわわわわ！！なんか撃ってきやがったああー！！」

なのは「しまった！フェイトちゃん！今援護するよ！！！！レイジングハートー！！」

レイジングハート『アクセルシューター』

なのはの操る桃色の魔法弾が追いかけてきたガジェットを撃ちおとした…

フェイト（ありがとう、なのは。助かったよゴメン。）

なのは（ううん、大丈夫、早くその人を安全な場所に。）

フェイト（うん！）「あのすみません…びっくりしましたよね？」

佑輔「……………」

フェイト「あ…あの？」（やっぱりショック大きいかな…）

フェイトは佑輔はなににも喋らず呆然としていたのを心配していた…  
が…

佑輔「す…」

フェイト「す？」

佑輔「すつげえええ！！！なあ！今のなに！？まるでファンタジーだぞ！ハハッ！！！」

フェイト「え！？えつとお…あの…」

いきなりの反応にフェイトは戸惑いなかなか答えなかった…それもそのはず…ショックを受けたかと心配していたのにまるで少年のような好奇心旺盛のような瞳をしていたからだ…

さて…佑輔が少年のようにハイテンションになっているころ…ロングアーチでは…

はやて「遅くなってゴメン！」

アルト「八神部隊長」

シャーリー「おかえりなさい」

はやて「状況は？」

グリフィス「今のところ順調です、ただ……」

八神「ただ？」

グリフィスはその先は言わずあるモニターをさした…そこには…フェイトに掴まり大ハシャギしている佑輔の姿が映っていた…ちなみにこの時フェイトは必死で大ハシャギする佑輔を説得しながらフラフラと飛んでいた…

八神「……………あゝもしもしフェイトちゃん？」

フェイト「あ……はやて……えっと……あはは……」

はやて『……なにしてはるん?』

呆れながらはやては問い……フェイトは苦笑いしながら答えはじめた。

フェイト「えと実は次元転移反応がで……そしたらこの人が落ちてきて……って……きゃ!!ちょ!!そんなに動か!落ちちゃ……!!あああ!!……」

佑輔「うおお!!!!すげええ!!!!俺感動!!!!SFバンザ〜  
〜イ!!!!」

佑輔は未だになのはの戦う姿に感動していた……つか今の状況絶対忘れてるよ、このダメ主人公……

はやて『あ〜もしもし〜その人、聞こえますか〜?』

はやては今度は佑輔に問いかけた。

佑輔「んあ??」

佑輔は声がした方向に振り向くと空間に映し出されたはやてと目が合った……

佑輔「………心霊写真?」

ズコ!!

ロングアーチのメンバーはズッコけた!!（はやてのイライラ度9

0パーセントに!!)

はやて『なんでやねん!! だいたい写真やあらへんやん!!』

佑輔「あ…それもそうか…つか…なにこれ？」

フェイト「えつとね簡単にいうと通信だよ。」

フェイトは親切に答えた…つかこの人も順応してきたようだ…  
佑輔のペースに…(笑)

佑輔「通信!!これが!?!うおお…これは未来なのか…未来へ来たのか俺…!!」

もはや全てが新鮮な情報に佑輔のハイテンションは止まらない…

はやて『あ…あ…あのな…話を聞いて…(佑輔)「スゲー!!」やっぱりSFは男の夢だ…!!」…!!』

はやてのイライラ度…MAX!!!!

ブチ!

フェイト「え…えと…はやて…?」

恐る恐るはやてに話しかけるフェイト…その時!! 悲劇は起きた!!

はやて『今ウチらは大事な任務の真っ最中なんや…!!!! 黙って大人しくしとれえええええ…!!!!!!!!!!』

キイイイン！！！

佑輔「うひゃあ！！！！」

いきなりの大声にびっくりし佑輔は両手で耳を塞いだ。

フェイト「え？」

はやて『あ……』

佑輔「んあ？」

なのは「ちよっ……！！フェイトちゃん！！」

もう一度言おう……佑輔は『両手！！』で耳を塞いだのだ。つまり……

佑輔「おおああああああああ！！！！」

ヒュ………ズガァァン！！！！

列車に落ちた……

フェイト「……………」

フェイトは呆然とはやてと目を合わせた……

はやて『……………今の……やっぱり……ウチのせい……？』

次回に続く！！



第二話…今度はお空からこんにちわ　ロープの無いバンジーは危ないぞ　（後

リン？「……………」

佑輔「……………あの…リン？…おいミニマムサイズ？」

リン？「なんで…」

佑輔「へ？」

リン？「なんで私の出番がないですかああ~~~~~!???」  
泣）「

佑輔「あ…アハハ…なんでだろうな…」

スバル「そつだよ！私たちもいるのに全然描写すらないし！（泣）」

エリオ「……………僕たち…一応…フォワード部隊…ですよ？（泣）」

キャロ「うん…。（泣）」

佑輔「……………え〜と…ん？ティア？……………って…なに  
してんの…お前さん…」

カチャ…カチャ…

ティア「いや…作者にちよつと……………弾をぶち込みに…」

佑輔「うおおおい！！！待て〜〜〜〜！作者死んだら中途半端になるからああああ！！！！」

なのは「でも私もセリフ…あんまりなかったよね……っていうか…アクセルシューターしかやってないし……」

リン？「なのはさんはいいいじゃないですか…ちゃんと出番あるだけ…くすん…」

フェイト「……え〜と…大丈夫だよ！きつと次回はみんな出番…が…」

みんな（佑輔以外）「ジイイイイ…」

フェイト「……えつと…ゴメンなさい……」

はやて「あゝあ、これはヒロインはフェイトちゃんに決まりかな〜  
……ウチなんか絶対…ギャグキャラや……しかも雷が落ちる…  
あんな…大叫びしてもうたし…しくしく…」

みんな（佑輔以外）「いいなあ〜〜〜フェイトちゃん（さん）はあ  
〜〜〜しくしく…」

佑輔「……そもそもさ……これ…恋愛要素…成り立つのか？」

フェイト「……無理じゃない？」

終われ！！！！

第三話・目覚めし闇……………つかそんな技卑怯だろおお！……！（前書き）

リン？「今回は…今回こそは出番を！！」

佑輔「…………アハハ…それじゃ…始まるぞ…」

第三話：目覚めし闇……………　　つかそんな技卑怯だろおお！！！！！！

キヤロは列車の天井の上で迷っていた……………　どうすればいいのか……………  
今目の前でエリオ君が新型ガジェットと戦っている……………　なのに自分は  
なにもできない……………　自分の力が……………　怖いと……………　誰か……………　エリオ君を助  
けて……………

そんな時だった！！救世主もしくは！天下の雰囲気ブチ壊し男が飛  
来したのは！！

佑輔「うおおああああああ！！！！！！（泣）」

ヒュー……………　ズガアアン！！！！！！

キヤロ「……………　え？」（今……………　なにが起こったの？なにか  
が……………　落ちて……………　きた？）

そう……………　目の前をなにかが通りすぎて列車内に落下したのだ！！！！  
キヤロは恐る恐る列車内を見た……………

佑輔「ん……………　くう……………　！イツテえええ……………　尻から落ちたああ……………  
……………　（泣）」

キヤロは戸惑っていた……………　あの人は誰？見た所民間人っぽいけど……………　何  
故ここに？why？というような感じで……………　そして恐る恐る声をかけ  
てみた……………

キヤロ「あ……………　あの……………　大丈夫ですか？」

佑輔「アタタタ…尻は全ての急所…はっ！やべえ！俺、尻まつぷたつに割れてん」AN！！」

キャラ「……………あの…／／／／お尻は…元々二つに…割れて…ます…／／／／／」

キャラは顔を赤らめながら言った…理由は…まあ…乙女ですから…

佑輔「あ…そっか」

さも納得しながら反応した佑輔……………つか…セクハラじゃん……………最悪だよこの主人公…しかもこのやり取り…どこかで見たよ…………

エリオ「んうゝゝ！！あ！あの！！すみません！ここは危険です！に…逃げてください！！」

佑輔「へ？」

声のした方に振り向くと、少年が自分の2倍はあるであろうロボットと槍っぱいのでつばぜり合いをしているではないか！

佑輔「な……………な……………なんじゃあこりゃああああ！！！！」

佑輔は驚きそして……

佑輔（ウネウネして気持悪っ！！）

と激しく思った…

エリオ「あのっ……！早っ……く……っわああ……！」

バキィ！！！！

エリオが大型ガジェットに吹き飛ばされたが……

佑輔「うおっと……！」

幸運なことに佑輔がいた方向に吹き飛ばされたおかげで壁への衝突は防がれた……

エリオ「あ……ありがとうございます……」

佑輔「いや……っ！」

佑輔はエリオを見て思った……

佑輔（あ……明………！いや………姿形は全く違う………けど背丈は………同じくらい………そして………美奈………）

佑輔はキャロを見上げ妹の姿が重なった………無論キャロも姿形は違う………けどやはり年齢的には………同じに見えた………

佑輔「………坊主………名前は……？」

エリオ「え？………エ………エリオ・モンテリアル………です………」

エリオは何故急に名前を聞かれるのかわからなかった………しかし………佑輔の表情を見て一つだけわかった………

エリオ（凄く悲しそうな瞳だ…）

佑輔「エリオ…か……ならエリオ……お前は…逃げろ……コイツは俺が引き付ける……」

エリオ「な！？無茶です！！丸腰なのに！！」

佑輔「黙って年上の言う事を聞け！！」

エリオ「！？」

急に怒鳴られ驚いた。しかし……

エリオ「それは…できません！！」

佑輔「！？」

エリオは佑輔の前に出てストラダを構え、そしてガジェットに向かっていった。

エリオ「民間人を守るのは！僕達の使命なんです！！ここで逃げだすわけには…いかない！！」

佑輔「…っ……」

佑輔は愕然とした…なんて勇気のある子だ……自分より年下なのに…こんな子供なのに……なのに自分はどうだ…引き付けるとか言いつつ……足が震えてるじゃないか！！

佑輔（くっ！なにやってんだ！俺は！！！動け！！！動けよ！！俺の足！！！！またあの時と同じになっ  
ていいのか！！！クッソー！！！！）

エリオ「うわあああ！」

佑輔「！？」

キヤロ「エリオ君！？」

二人の視線がガジェットに向いた時、エリオはガジェットに捕まっていた。

ギリギリ…

エリオ「う…あああ！」

ガジェットはエリオを締め付けていく…

佑輔「く！てんめええ！！！！エリオを離せ！！！！！！！！！！」

佑輔はエリオを助けようとガジェットに向かっていった…

佑輔「この！！離せって！言っ  
てんだっろ！」

ドカ！バキッ！

佑輔は素手でガジェットに殴りかかっていた…相手は固いロボットだ…敵うはずもない事は百も承知だった…だが…なにもせずにはいられなかった…助けたかった…まだ若すぎる…小さな命を…



佑輔（けど！それでも！）

その様子を見ていたキャラは思っていた…あの雪が降る日…初めて…フェイトと出会ったことを…

キャラ『私は…今度は…何処に行けばいいんでしょう…？』

キャラはフェイトに尋ねた…それは自分が今まで…力が強すぎて…村を追放され…竜召喚のコントロールができず…どこの部隊からも忌み嫌われ…部隊から部隊へとたらい回しになっていたからだ……

フェイト『それは…君が何処に行きたくて何をしたいかによるよ…』

優しくマフラーをキャラに巻きながらフェイトは答えた…

フェイト『キャラは…何処へ行つて…なにがしたい…？』

優しく微笑みながら言ってくれた…その時繋いでいた手は…とても暖かく…優しかった……

キャラ（考えた事もなかった…私の前にはいつも…私が行っちゃいけない場所があつて…私がやっちゃいけない事ばかりだったから…）

バキイ！！！！！！

佑輔「ぐああああ！！」

佑輔は遂にガジェットのアームのアップパーをまともに喰らい列車の

天井の上まで吹っ飛ばされた……

ドタ!!

佑輔「ガハ！」

キャラ「!?」

キャラはすぐ佑輔に駆け寄ろうとしたが…

バキバキバキ!!

キャラ「ああ！」

ガジェットが天井を突き破ってでてきた…そのアームには気を失ったエリオがいた……

キャラ「ああ！」

佑輔「う…く…エ…エリ…オ…ちっ…くしゅっ…！」（く…体が…いてえ…動かねえ…!）

そしてガジェットはエリオを…

ブーン!!

列車の外へ投げ飛ばした…

佑輔「!?」

キャロ「!？」

キャロの中でフラッシュバックした…エリオとの出会いから…今までを…その時…キャロの魔力が溢れだした…

キャロ「エリオくっくん!!!!!!」

叫びながらエリオを追うように飛び降りた!

佑輔「なっ…!？」

ドクン…

そして……佑輔にも…変化が起きはじめていた……

ロングアーチ…

ルキノ「ライトニング4…飛び降り!?そんな降下中にリカバリ…なんて!？」

はやて「いや、あれでええ!」

シャーリー「え?……あ!そうか!!」

山岳上空…

なのは「そう!発生源から離れればAMFも弱くなる…使えるよ!フルパフォーマンスの魔法が!!」

なのはは落ちた二人を追いながら言った。

キャラ（守りたい…優しい人…私に笑いかけてくれる人達を！自分の力で…守りたい！！）

ガシ！！

キャラは降下しながらもエリオの手を掴み…そして！

ケリユケイオン『ドライブイグニッション』

ケリユケイオンが光出した瞬間…ピンク色の魔力がエリオとキャラを包み、落下速度が落ちた…そしてエリオを優しく抱きしめた…

キャラ「フリード…今まで不自由な思いさせてゴメンね…ちゃんと制御するから…！」

よってきたフリードに決意の瞳を輝かせ言った……………ちなみにエリオも…気がついたみたいで…今の状況がわかって顔が赤くなっていた…

キャラ「いくよ…竜魂・召喚…！」

大きな魔法陣が現れ中から大きなフリードが現れた。

ロングアーチ…

グリフィス「凄い…これが…」

はやて「そう…キャラの竜召喚、その力の一端や。」

スバル「あれが…」

ティアナ「チビ竜のほんとうのすが…」

ドオオオオン！！！！！！

ティアナが言い終わる直前、どこから爆音がなり響いた。

ティアナ「な…なに！？」

スバル「ティア！リン曹長！あれ！！」

リン？「え？」

スバルが指をさしたのは新型ガジェットのある方向…

ティアナ「な…なに…あれ…煙…？」

リン？「……………違います！黒い炎です！」

スバル「え！ええっ！？なにか薬品でも爆発したの…！？」

エリオ「キャロ！あれ！」

キャロ「え…さっきの…お兄…さん…？」

佑輔「……………」

佑輔はいつの間にか立ち上がっていた……………黒い炎に身を纏いながら……………時間は少し遡る……………

キャラ「エリオくくくん！」

キャラがエリオを追いかけ飛び降りたとき…

ドクン…

佑輔「なっ…!？」

ドクン…ドクン…

佑輔「あ…ああ…っ…く…あ…」

飛び降りた……目の前で…二人が…落ち…タ…

ドクン…ドクン…ドクン…

佑輔の脳裏にあの日…家族が死んだ風景が浮かぶ…

ドクン…ドクン…ドクン…ドクン…

なにかが脈うつ…なにかが爆発する…そんな感覚を覚えていた…

佑輔（また…なにも…できない…また…マタ……マモレナイ…）

パライイン!!

佑輔の中でなにかが割れた…

佑輔「うおああああああああああ!…!…!…」

叫び上げた瞬間爆音と共に自身の体から闇の炎を吹き出し体に纏いつていた…そして現在に至る……

フェイト「あれは！？さっきの人！」

なのは「一体…なにあれ！」

ロングアーチでは…

はやて「な…なんやあれ！！あんな魔法…見たことない！！一体なにが起こつとるんや！？」

シャーリー「これは…嘘でしょ…」

はやて「シャーリー！どないしたんや！」

シャーリー「魔力反応が…出てません！！」

フェイト「！？」

なのは『あれ、魔力じゃないの！？』

はやて「なんや、フェイクなんか？いや…フェイクにしたって魔力反応はでる…じゃあ…あれは…？」

シャーリー「別のエネルギー反応？…エネルギーそのものは…不明！…計測値は…測定不能！！！？？？」

はやて「なんやて！！…な…なんなんや一体！？」

もはや驚愕しかロングアーチにはなかった…

そして列車の上では…

佑輔「……………」

佑輔はガジェットと対峙していた…そして顔を上げた瞬間…なのは達は見た…彼の瞳を…まるで血に染まったかのような…真っ赤に瞳を…

なのは達『!?!』

エリオ「さっきまでと…様子が…違う」

キャロ「う…うん…」

フリード「グルルル…」

エリオとキャロは彼の放つ尋常じゃない殺気に恐怖し…フリードは警戒していた…

佑輔「……………闇ヨ…」

佑輔が腕をあげ、そう呟いた瞬間、一本の黒い剣がでてきた…その剣もまた闇の炎をだしていた…そして…ガジェットに向かって歩き出した…

次第に距離は縮まり…ガジェットの間合いに入った…その瞬間全てのアームで攻撃してきた…が…



ズバババッ！ドゴォン！！！！

佑輔「……………」

佑輔は無言で一瞬の内で斬り捨てた…

リン？「なっ！？」

ティアナ「嘘…！」

スバル「ちょ！なに今の！！全然太刀筋見えなかったよ！？」

フェイト「私にも…見えなかった…」

そう前者二人はおるか…スピードに自身があるフェイトにすら見切れなかった…

チャキ…ブン！

佑輔が剣を横に振った瞬間…いくつもの闇のエネルギーの球体が現れた……

なのは「な…なにあれ…アクセルシューターなの？」

ガジェット「！？」

ガジェットはAMFを張った…が…

佑輔「……………闇ヲ…喰イツクセ……………」

そう言った瞬間……………

ドガガガガガ！……！！！！

闇の球体はガジェットに真っ直線に向かいAMFごとガジェットのボディを貫きまくった……………

なのは「なっ！？」

フェイト「嘘！？」

二人は驚いた…しかしはやては…

はやて『そつか…魔力やないんや…AMFは無意味…ちゅうことが…』

落ち着きを取り戻し冷静に分析していた…

ジジジ……ガシャアーン！！

ガジェットは機能停止し倒れた……

佑輔「……………」

そして佑輔は……黙って周りを見渡した…その時…エリオたちが目に入った…

エリオ「！？」

キャロ「！？」

彼の瞳に見られた二人はドキツとした…まさか自分たちも襲われるのかと…

フェイトはその様子を見た瞬間…

バルディツシュ『ソニックムーブ』

シュン！

佑輔の所へ降りた…なのはもまた空から佑輔に向かってレイジングハートを構えた…

フェイト「……………」（なのは…もし襲ってきたら…）

なのは「……………」（うん…あんまり攻撃はしたくないし、敵うかどうか怪しいけど…全力で迎え撃つしか…）

佑輔「……………」

佑輔は二人に視線を向けた…

フェイト「！？」（なんて…悲しい眼…）

なのは（それとも…怒り…？）

はやて（いや…おそらく…全部なんか…？）

三人は佑輔の瞳を見た瞬間そう感じとった…

佑輔「……………」

フェイト「あの…二人を助けてくれてありがとうございます…ございます…ですが…出来れば…武器を捨ててくれませんか…？」

恐る恐るフェイトが佑輔に言ったのだが目を閉じた瞬間……………

バタツ！！

佑輔は倒れた…それと同時に闇の炎も消えた…

フェイト「え！？？ちよ大丈夫ですか？」

フェイトが駆け寄る…そしたら…

佑輔「ぐうう……………ムニヤムニヤ…カレーおかわり…」

ズッコオオ！！

みんなコケた…ロングアーチもだ…

フェイト「……………」

なのは「……………寝てる？」

はやて『あんっただけ緊張させといてか！？』

やはり佑輔はどこまでも佑輔だった…

なのは「とりあえず保護するね？はやてちゃん」

はやて『うん…頼むわ…ほんま人騒がせな…』

呆れながら二人は言った……

リン？「こちらもレリック回収完了です」

こうして列車での作戦は終わった…

とある施設…そこには先程までの映像やなのは達が映し出されていた…

スカリエッティ「それにしてもこの案件はやはり素晴らしい…私の研究にとって興味深い素材がそろっている…中には…生きて動いているプロジェクトFの残滓…そして…」

カタカタカタ…

キーボードを操作して佑輔の映像を出す…

スカリエッティ「魔力に属さない、とてつもない闇の力…か…クク…まだ自分では制御しきれていないと見受けれる、これが一番興味深い…是非とも手に入れて…研究したい所だ……それにあの瞳…とてつもない激情を秘めた瞳…ククク…あの笑顔の裏にはなにが隠されているのかなあ…」

妖しく笑い…そして次なる作戦を練るべく…姿を…消した…

続く……

第三話・目覚めし闇……………つかそんな技卑怯だろおお！……………！（後書き）

リン？「……………」

ティア「……………」

スバル「……………」

佑輔「……………あの…みなさん…？」

ティア「……………なにこれ……………」

佑輔「え？？」

スバル「……………なんか…強すぎだし……………」

佑輔「……………？」

ティア「あたしたち…見せ場ないじゃん……………」

佑輔「……………？」

エリオ「あ…あの…みなさんもちゃんと出番が…………？」

スバル「今回…エリオたちが目立ったよね……………」

エリオ「う……………」

ティアナ「私たち…モブ扱いになるんじゃない…………？」

佑輔「いや？それはないかと？」

リン？「……………ていうか…佑輔さん…卑怯です…なんですか？A  
MF無効つて？いきなり最強ですか？LV・MAXですか？」

佑輔「いや？あれはちよつとネタバラしするとFF4の暗黒騎士の  
あんこくつて技なんだよ？だからその？魔力じゃないからでして？」

三人「……………卑怯者…」

佑輔「……………ごめんなさい……………??」

スバル「ところでキャラは？」

エリオ「えつと…それが…？」

キャラ>舞台の隅つこで顔を真っ赤にしてる…<

佑輔「なんで真っ赤にしてるんだ？」

エリオ「忘れたんですか??ほら、佑輔さんが電車に落ちたとき…」

ティアナ「ああ…あれね」

佑輔「??」

キャラ「言っちゃった…お…お…尻…ってキャラ…はっ  
／／／／」

ボタン！

エリオ「うわぁ！キャロ〜！」

佑輔「……………??」

三人「……………セクハラ…」

佑輔「いやだって！台本にあったんだよ！俺のせいじゃ…」

ガシ！

佑輔「え…？」

フェイト「……………よく私の娘に…セクハラをしたわね…」

佑輔「あ…あの…ちよつと…」

フェイト「少し…頭…冷やそうか…」

佑輔「ちよ！まてええ！それはお前のキャラじゃな…」

フェイト「……………さようなら…名前も知らない…主人公さん…」

ドガガガガガ！

佑輔「あぎゃあああああああ！」

三人「……………???南〜無〜」





第四話・朝の目覚めはホットコーヒーでお願いします。(ミルクも可)(前書き

佑輔「……………」

リン? 「返事がない…ただの屍のようだ…です。」

スバル「まあ…前回が前回だからねえ」

リン? 「まあ、そんなわけで始まります! !」

第四話：朝の目覚めはホットコーヒーでお願いします。（ミルクも可）

夢を見ていた…

家族と一緒にの夢を…

幸せだった…

けど…覚めなきゃいけない…

所詮…夢なのだから…

過去の幻影でしかないのだから…

佑輔「う…う…ん……………ここ…ここ…は…？」

シャル「あら？目が覚めた？」

頭がまだぼんやりしたまま声がした方向へ向くと、白衣を着た美人のお姉さんがいた…

佑輔「……………あんたは……………誰だ…？」

シャル「私はシャル。この機動六課の医療班を担当しているの。」

「

佑輔「機動……………六課…？」（機動六課ってなんだ？……………ああだめだ…まだ頭がぼんやりする…）

シャル「うゝん、まだ目が覚めきつてないのかしら？もしかして起きてくださーい。」

佑輔（そついや…なんで寝てるんだっけ…確か……………空から落ちて……………空飛んでる金髪ツインテールの人に助けられたと思ったら…なんか狸っぽい女の子が…心靈写真の中から大声で叫ばれたせいでまた落ちて……………んで……………）

シャル「あの……………、もしも……………」

佑輔（ロボットと戦っていた…エリオと…女の子……………っ！？）

シャル「うゝん…どうしましょう…」

ガバ！…！ガシ！…！

シャル「キャッ！？」

シャルが思考錯誤していたら急に佑輔が飛び起きてシャルの両肩を掴んだ。

佑輔「おい！なんで俺生きてんだ！？エリオと女の子は無事なのか！？あのウネウネロボットはどうなったんだ！？」

ガクガクガク！…！

シャル「あわわわわ！！落ち、落ち、落ちついて……………！！！？みんな無事だからああああ！！？」

5分後……

シャマル「はあ……はあ……」

佑輔「えと……すまん……取り乱して……」（そっか……あの二人無事だったか……よかった）

佑輔はそれを聞いてホッとした……

シャマル「い……いえ……とりあえず落ち着いてくれてなにより……ん……コホン……ここは機動六課の隊舎。簡単にいうと貴方は保護されたの。」

佑輔「???保護???機動六課???」

佑輔はよく飲み込めていなかった。

シャマル「貴方……次元転移してきたの。わかる?」

佑輔「へ?次元……〇介?」コケッ!

シャマルはコケた……

シャマル「違う違う……ル〇ンの次〇じゃなくて次元転移!つまり貴方は別の世界からここへ来たの!」

佑輔「あ……そういうこと………はい……?別の世界?」

シャマル「貴方……魔法って信じる?」

佑輔「ま…魔法…？……………（考え中）……………  
そういえば……………空…飛んでた…な…現実だったのか…」

シャル「そう、それが魔法なの。でも話を聞いてびっくりしたわ。  
まさか任務の真つ最中に貴方が現れたなんて。」

佑輔「あ…アハハ…」

佑輔は苦笑いしていた…自分自身もびっくりだったからだ…

シャル「しかも貴方、結構有名よ？魔法見て大騒ぎして、はやて  
ちゃんに雷を落とさせた能天気な男の子だって。」

佑輔「ハハハ…お恥ずかしい限……………いやまて…男の子…？」

シャル「？？どうしたの??」

佑輔「……………あの…これでも…25歳…なんだが……………」

シャル「……………Really？」

佑輔「YES。」

シャル「ええええ！？いや…確か…に…静かにしてれば見えなく  
もない…気が…でも…好奇心旺盛の少年みたいに反応してたって…」

佑輔「あ…アハハ…すいません…そういう性分なんで…」

佑輔はちよつと精神にダメージを受けた（笑）

シャル「まあその話しはおいといて。貴方の事を色々聞きたいんだけど、ここじゃないんだからはやてちゃ…八神部隊長と会ってお話してもらってもいいかしら？」

佑輔「八神部隊長？」（……………あの狸っぽい娘かな？）

などと失礼な事を考えた後…佑輔は了解した。

部隊長室…

ピピッ！ピピッ！

はやて「はい、どうぞ。」

はやてが返事するとシャルと佑輔が入ってきた。

はやて「お、目が覚めたみたいやな。体大丈夫か？」

佑輔「あ、ああ。あんたが部隊長さんか？」（か…関西弁…ファンタジーに…関西弁…）

はやて「そうやよ。ウチは八神はやて、よろしゅうな。」

佑輔「東雲佑輔だ。助けてくれて感謝する。」

二人は近寄り握手を交した。

佑輔「……………ん？」

佑輔はふとなにか気配を感じた。

シャル「どうかしました？」

佑輔「いや…なんだろ…あんたたち以外に気配が…？」

佑輔は気配がする方向に向いたら…なにか…小さい……というか…  
…小さすぎる女の子の見た。

佑輔「？人形…？」

リン？「な！誰が人形ですか！？失礼ですねえ！」

佑輔「うわあ！しゃ…喋ったああ！！よ…妖精か…なんかか？」

はやて「アハハ！リンを見て妖精っていうことはやっぱり佑輔君  
はこの世界の人間やないんやな。」

驚く佑輔を見ながらはやてとシャルは笑い。佑輔はリンを見て  
また感動していた。

佑輔「へえ…こんなにちっちゃくて可愛い女の子もいるんだな  
ああ…」（さすがファンタジーだなあ…もうなんでもアリだなあ…）

リン？「へ？／／／／／」

佑輔の何気ない一言にリンは顔を赤くした。

リン？（は…初めて男性から可愛い女の子って言われました…／  
／／／／／）

そつ…リンは可愛いおチビちゃんとか、なんとかは言われ続けて



きたが可愛い女の子と言われたのは初めてだった…しかも男性からだ。

佑輔「なんか顔が赤くなってるないか？」

リン？「へ！？そ…そんな事はないですよ！！／／／／／」

キラン…

はやての目が怪しく光った…

はやて「おやおや…リンにも春が来たんか？」

リン「ななななに言ってるですか！？そんな事ありません！有り得ません！？／／／／」

佑輔「??」（春？）

リンが必死になって否定している最中、佑輔はよくわかっていなかった。

はやて「まあからかうのこれくらいにして、本題に入るか？」

リン？「むう…」

はやて「と言いたいんやけどもう少し待ってくれへんか？今、他のみんなが向かってるからそろってからってことでええ？」

佑輔「ああ、OKだ。」

佑輔は快く了解した。

ちなみに…みんながくる間リインははやとシャルにからかわれ続けていた…そして10分後…

なのは「お待たせ、彼、目が覚めたって？」

なのはをはじめとしフォワード部隊が入ってきた。

はやて「お、きたきた。」

佑輔「ん？あ！エリオ！？よかった！ホントに無事だったんだな…」

佑輔はエリオとキャラロを見つけた途端に近寄った。

エリオ「は…はい！その節はどうも。」

佑輔「それに君も…えっと…」

キャラロ「あ…えとキャラロです。キャラ・ル・ルシエと言います。」

佑輔「キャラロか…よかったなあ…」

キャラロ「あ…ありがとうございます。」

はやて「佑輔君。悪いんやけどそろそろ本題…」

佑輔「あ、ああすまん…じゃなかった…すみません。」

はやて「ああ…さつきから気になつとつたんやけど…無理して敬語にせんでええよ。普通に話してくれたらええから」

佑輔「そいつは助かる　話せる部隊長さんでよかった。」

はやて「じゃあまず、自己紹介からしてくれへんか？」

佑輔「ああ、え〜と、東雲佑輔、25歳だ。」

ピシッ!!

佑輔が歳を言つた瞬間空気が固まつた…

みんな（シャルマル以外）『ええええええ!!!!25歳〜!!!!』

佑輔「……………泣いていいか…？」

佑輔は部屋の隅っこで体育座りで落ち込みだした。

フェイト「ご…ごめんなさい！でも…あんな…好奇心旺盛な…くらいだからてつきり…私たちと同じ年くらいかと…」

ティアナ「でも…黙っていれば見えなくてもいい…ような…」

スバル「私もてつきりなのはさん達と同じ19なのかと…」

みんなシャルマルと同じ反応でした。（笑）

佑輔「どうせ俺は精神的にガキですよ…ちくしょう…だから彼女もできねえし…未だに独身街道まっしぐらですよ…」

リン（…………彼女…いないですか……………って！なに喜んでますか私！？）

はやて「アハハ、じゃあ次いこ…佑輔君は…どうやってこの世界に来たん？」

佑輔「それはな……………」

佑輔はこれまでの経緯を話した…

なのは「謎の異空間に…謎の女性の声…か…」

フェイト「それに新しい仲間…家族を守って欲しい…ね…」

ヴィータ「うーん…さっぱりわかんねえぞ…シグナムわかるか？」

シグナム「いや…私にもな…」

スバル「もしかして女神様だったり？」

ティアナ「アンタね…いきなり女神はないでしょ…それにもし女神なら武器も持たさずに異世界へ放り込んだりしないでしょ。」

スバル「え？でも佑輔さん凄い力で新型ガジェット倒したじゃん。」

佑輔「……………は？」

佑輔はキョトンとした…今あの子はなんて言っただ？俺が…倒した？

佑輔「ちょ…ちょっとまって…なんの話した？」

スバル「え？だから佑輔さんが新型ガジェットを倒したって…」

佑輔「……………俺は知らんぞ。そもそも新型ガジェットってなに？」

みんな『……………え？』

みんなもキョトンとした。

はやて「ゆ…佑輔…なにも覚えてへんの？！」

佑輔「??????」

フェイト「これ…その時の映像なんだけど…」

フェイトは空間に新型ガジェットを倒す佑輔の映像を出した。

佑輔「……………え…………マジ？なにこの黒い炎は？」

はやて「う…ん…無意識の内に覚醒した…ちゅうことなんか？」

佑輔「しかし…俺にはそんな記憶……………っ！？これは！？」

佑輔は映像を見てなにかに反応した…

なのは「どうしたの？なにか思い出せたの？」

佑輔「この…ウネウネロボットのやられかた……………似てる……」

ティアナ（ウネウネロボット…？）「似てるってなにが？」

佑輔「8年前に…俺と家族を襲った強盗犯の死に方と…似てるんだ……」

シヤマル「強盗犯？」

佑輔の顔が怒りのような…悲しみのような…そんな表情になっていた…はやてはそんな表情をみて…

はやて（あの瞳…赤くはないけど…あの時フェイトちゃんと対峙した時のあの瞳と同じや……）

それはなのかもフェイトも…キャロもエリオも気付いた……

佑輔「……………」

はやて（恐らくは…その犯人も…佑輔が…そして…佑輔の家族は…もう…）

はやて「……………」佑輔…無理に言わんでええよ…ウチらもこれ以上は詮索はせえへんから……」

佑輔「……………ああ……………すまん…ありがとう……」

はやて「じゃあその力は今はええわ。どうやら自分の意思で使ってるわけやないし…んゝ問題は佑輔君のこれからやな……」

佑輔「？」

はやて「言い方悪いかも知れへんかもしれんけどその力は危険なんや。自分でコントロールしてないんやら尚更や。そんなん野放しにはできへんねん。」

フェイト「確かに…もしこれがなにかの拍子にまた発動したら…」

佑輔「……………誰かを傷つける…か…」

はやて「せやから…どうや！ウチらの仲間にならへん？」

佑輔「へ？」

はやての提案に佑輔は間抜けた顔になった。

はやて「なんや？そんな顔して…？まさか…逮捕されるかと思った？」

佑輔「いや！普通はそうだろ！！」

はやて「ま…普通はな。けどそんな佑輔はいややろ？ウチかていややわ。なんもわからんのに捕まるんも捕まえるんも。」

佑輔「しかし！もしかたその力が暴走でもしたら！」

はやて「そんなときはウチらが止めてみせる！……………」（それに…放っておけんのや…）

佑輔は悩んだ…本当に自分はいいのだろうか…と…

佑輔「少し…時間をくれないか…？」

佑輔は心苦しく言った…

はやて「……………そやな…いきなりやつたら戸惑うんも無理はないわな…ええよ」

佑輔「すまん…助かる」

はやて「じゃあ今回は解散や！それぞれの仕事に戻ってえな。あと佑輔君はちよつと残ってくれへん？」

佑輔「？わかった。」

そうしてそれぞれ解散していき部屋には佑輔とはやてだけになった…

佑輔「で…なんなんだ？」

はやて「……………あんな…さつきは…詮索せんって…言ったんやけどな…その…佑輔君の家族は……………ああゴメン！なんでもないわ。部屋…案内す…」

佑輔「……………死んだよ……………俺を除いてな…」

はやてが言い終わる前に佑輔は答えた…

はやて「……………そっ…か…ゴ…ゴメンな…無理に聞いて…でもなんで…答えてくれたんや…？」



佑輔「あんたが…ずっと気にしていたみたいだったからな……」

はやて「……………ばれてたか……」

佑輔「まあな…それにもう8年もたってるからな…けど……」

はやて「けど?」

佑輔「未だに…後悔は…消えない……………仇を自分でとっていたのは意外だったか……………それでも…未だに…消えないんだ……」

はやて「……………ウチもな…昔…大切な家族を亡くしたんや…だからかな…佑輔君を見てると昔の自分に似とるんよ…だから放っておけなかった……」

はやてはリインフォースの事を思っていた…あの…雪の日の別れの時を…

佑輔「……………そうか…ありがとう…はやて。」

はやて「…もうひとつ…聞いてええ?」

佑輔「?なんだ?」

はやて「……………佑輔君…泣いてへんやろ…我慢…してるやろ……」

佑輔「!?!」

佑輔は驚いた…何故はやてには自分が我慢してる事がわかったのか……………

はやて「やつぱりな…ウチも…同じやった…大切な家族が亡くなつて…でも自分は…強くならなかんって…守るものの為に…そう想って…でもな…親友がな…泣かせてくれた…泣くのを許してくれたんや…だから…」

はやては佑輔を優しく抱きしめた…

佑輔「なっ!？」

はやて「今はウチだけや…ええんよ…今は思いきり泣いて…ウチは迷惑なんかやないから…」

佑輔は…なにかが込みあげてくるのがわかった…止めたくても止めれない…なにかが…

佑輔「うっ…く…うあああああああ!…!…!…」

10分後

佑輔「……すまん…みつともないところを見せたな…」

はやて「かまへんよ…でも…スッキリしたやろ?」

はやては笑顔で聞いてくる。

佑輔「ああ。サンキュー。しっかし…まさか簡単に見抜くとはなあ…はやて…きつといいお母さんになれるぞ。」

はやて「そっか」

佑輔「ああ、保証するさ　なんなら俺がお嫁にもらいたいかな」

などと佑輔は冗談で言ってみたが…

はやて「なにいうてんねん。まだ会ったばかりやで」

はやてには通じなかった…

佑輔「なっはははは！そりやそうだ　会ったばかりで付き合うんじや苦労はないわな　んじゃありがとな」

そういつて佑輔は部屋を出た……………そして…

はやて「……………／／／／／／／／／／いきなり…不意打ちは…卑怯やろ…バカ…／／／／／／／／…ウチもリインの事からかえんな…／／／／」

はやては顔を真っ赤に…って…通じてたんかい！

佑輔「.....しまった.....部

屋.....どこか聞くの.....忘れた.....」

続く



佑輔「はい？俺…なんかしましたっけ？」

シャル「あら、お忘れですか？目覚めた時私の肩を掴んで……あんなに激しかったのに…ポツ／＼／＼」

佑輔「へ？え？」（俺…肩を揺らしただけ…だよな？）

ガシ！ガシ！

佑輔「はっ！このパターンは！」

はやて「詳しい話し…聞かせてもらおうか…」

リン？「あっちの部屋で…じつくりと…です」

ズルズル…ボタン！

佑輔「え？ちよっ…なにこの部屋？え！！なにそれ！なにに使うんだ！！うわ！ちよっ！やめ！あああああ！！！！そこは~~~~~！！！！！！！！そこだけは…うぎゃああああああああああ！！！！」

スバル「……………なにが起きてるの…？」

フェイト「……………きつと想像つかない地獄…でしょうね…」

なのは「で、シャルさん？真相は？」

シャル「いい肩こりマッサージになりました」

ティアナ「……………哀れね…佑輔……………少しだけ同情  
してあげるわ…」

佑輔『ああああああ！！！！そこには入れないでえええええ！！！！  
！！！！』

四人『南〜無〜』

第五話：『佑輔！機動六課内奮闘記！』試験勉強ってなんか掃除したくなくね？

佑輔「生まれてきてすいません…生まれてきてすいません…生まれ  
てきてすいません…」

リン「……………やり過ぎましたね…」

はやて「アハハ…佑輔…ごめんってば…」

リン・はやて「それでたははじまります」「」



第五話：『佑輔！機動六課内奮闘記！』試験勉強ってなんか掃除したくなくねっ

機動六課隊舎：AM05：15

さて…昨日の提案から1日たちました…前回年柄もなく大泣きしてしまった（しかもはやての胸の中で）佑輔は一体どういう答えをだすのでしょうか…まあそれはさておき…

エリオ「ふわ…あ……………」

機動六課の朝は早い。エリオもまだ眠気が抜けきらないのか少しあくびがでていた…

キャロ「エリオ君、おはよ。」

エリオ「あ、キャロ、おはよう。」

二人は朝の挨拶をしながら早朝トレーニングに向かうため表口へでようとした。うん、朝の挨拶をするのは基本ですね。とてもいい子たちです。そしてロビーまで着くと…

キャロ「あれ？」

エリオ「どうかした？キャロ？」

キャロ「あれ…なんだろ…」

キャラが指さした方向になにかキラキラした巨大なものがあった…

エリオ「なにかの宝石かな？」

気になった二人は近寄ってみました。そして……二人は衝撃的なものを見てしまつとうあ！！

キャラ「……………きゃっ!？」

エリオ「んなあ!？」

キラキラキラキラキラ…

ラーラーラー…

佑輔（氷漬け）「……………（泣）」

なんと佑輔が氷漬けになってました。しかもまるで『自分は天使だよ』と言わんばかりの表情とポーズになっていたのです。

キャラ「一体…なにが…あ…看板が…」

『作品名：愚か者の墮天使。』

製作者：リインフォース？（怒）』

エリオ「……………」

キャラ「……………」

二人（一体なにをしたんですか！？佑輔さん！？）

キヤロ「エリオ君！ 佑輔さんが！」

佑輔がなにやら一人に口パクでなにかを伝えようとしてます……

エリオ「なにになに？」「最後に…大きな…チョコレート…パフェを…食べたかった…」？」

「……二コッ……ガクッ……」

チーン

二人「いいんですか！？それが最後の望みでえ！！！佑輔さああああああん！！！！！！！！！！」

佑輔（俺はみんなの心の中で生きてるよ…）

キラッ…

青空に佑輔の笑顔が写りました…。さらば佑輔！また会う日まで！！！！

ティアナ「もう……朝からなに騒いで……………って……なにこれええええ  
！！！！！」

スバル「うわああ……！……！……！佑輔さんがあああ……！！！」

10分後:

佑輔「ガタガタガタ…あ…あ…危うく死ぬところだった……………」

ティアナ「一体なにしたんですか…貴方は…」

佑輔「いや…それが……………」

話は昨夜に遡る…

佑輔（うーん…一体どうしたものやら…）「バクバクバクバクバク  
！！」

リン？「……………」

佑輔（けど提案受けて軍みたいになるのもな〜〜）「バクバクバク  
バクバク！」

リン？「……………よく食べますね…」（スバルといい勝負です…）

リン？は呆れながら佑輔の食いつぶりを見ていた。さてなぜ二人  
が一緒に食べているかというと…佑輔が一人で食べているのを見か  
け自分も一緒に食べていいかと聞こうとしたら…

佑輔『ようリン！飯か？なら一緒に食べようぜ』

と、逆に誘われてしまったからである。

リン？「ところで…佑輔はどうするですか？はやてちゃんの提案  
…」



／／／／／

ジタバタ！

佑輔「わ！こら暴れるな！危ないって！」

リン？「いいから離してください…」

ズルッ！

キャッ！？

佑輔「あぶねえ！！！！！」

ガッタン！！！！

リン？は足を滑らせテーブルから落ちそうになった…しかし間髪、佑輔が手を両手をクッションがわりにしたおかげで助かったのだ…

佑輔「せ…セーフ…」

リン？「あ…ありがとうございます…／／／／／」（一応浮けるんですけどね…役得です）

佑輔「あ……………」

リン？「？どうしました？？」

佑輔は思わずある一点を見てしまった…それは…



エリオ「アハハ……それは……って……ひい!？」

エリオは話を聞いて苦笑していたが隣を見て思わず悲鳴をあげた。  
「スバル、ティアナ、キャラが殺気をにじみ出していたからだ。」

エリオ「あ……あの……佑輔さん……逃げたほうが……」

佑輔「へ？」

エリオに声をかけられるが時既に遅し。

スバル「ラリアットボンバー!!!」

バキツ!!

佑輔「ゲフウ!？」

ティアナ「ジャーマンスープレックス!!!」

ドゴォ!!!!

佑輔「ノウテン!??」

キャラ「チョークスリーパー!!!!」

ギリギリギリギリ!!

佑輔「ノォ!ンノォオオオオ!??!?!?」



ボタン！！！！

KO！

スバル「全く！！なに考えてんですか！！」

ティアナ「いつそのことトドメを刺そうかしら。」

キャロ「女の敵です！行きましょ！エリオ君！」

エリオ「え？え！？」

そう言つて四人は訓練に行つてしまつた…

佑輔「……………手加減なし…かよ…（泣）よつと…  
イテテ…医務室…いくか…」

体を起こしてフラフラと医務室へ向かつた…

コンコン！

佑輔「先生、シャマル先生、治療してくれ」

シン……………

佑輔「留守…か…仕方ねえ…部屋へ…つて…部屋がわからないんだ  
つた…しまったなあ…ああ…ダメ…もう…限…界…」

ボタン！！！！

そのまま佑輔は気絶してしまった…そこに…

フェイト「あれ？……佑輔さん！？どうしたんですか、その怪我！  
って気を失ってる…とにかく部屋で治療しないと…」

フェイトは佑輔を部屋へ連れて行った…

フェイト「よいっしょ……酷いわね…まずは上着を…」

部屋へ連れてきたフェイトは佑輔をベッドの上に横にして上着を全部脱がせた…

フェイト「！？」

フェイトは絶句した…佑輔の背中にはおよそ一般人には縁がないであろう大きな切傷があった…

フェイト「今できた傷じゃない………大分昔から…あ…」

その時フェイトは佑輔が強盗に襲われたという話を思いだした…

フェイト（そっか…これがその時の………きっとこの傷と共に彼の  
心にも消えない傷が…でも…）

フェイトはこの傷に疑問を持った…なぜなら…どう見ても明らかに  
心臓を貫いているであろう傷だ…なのになぜ彼は生きているのだろ  
うか…

フエイト（借りにあの力を発動してもそのまま絶命してもおかしくない……）

フエイトは手当をしながら考え込んでいた…そして手当が終わりし  
ばらくして…

佑輔「う…う…ありや…ここどこ…？」

フエイト「あ…気がついた？」

佑輔「え？ああ…え」と

佑輔は名前をまだ知らずどう喋ったらいいかわからなかった…

フエイト「あ、そういえば名乗ってませんでしたね。私はフエイト・  
テストロツサ・ハラオウンです。」

佑輔「あ、これはご丁寧に俺の名前は…って知ってるか…  
ん？この包帯？フエイトさんが？」

フエイト「ふふ、フエイトでいいですよ。佑輔さんのほうが年上な  
んですから。」

佑輔「だったら佑輔でいい。あと敬語もなしな。固っ苦しいの苦手  
でな。というわけで…」

佑輔は笑いながら手を出してそう言った。

フエイト「うん。じゃあよろしく佑輔。」

フェイトも手を出しお互いに握手した。

フェイト「ところで…なんであんな所で気絶してたの？」

佑輔「…………… かいつまんで話すと昨夜から氷漬けにされ放置、解かれたと思ったら女の子につかわしくないプロレス技をかけられたから…しかも三人から…」

フェイト「…………… どんな展開ですかそれは…」

フェイトは意味不明な展開に苦笑していた。

佑輔「いや…まあ…その…全面的にスケベな俺が悪いんですけどね…うん…」

フェイト「???」

フェイトはよくわからなかった。

フェイト「あのさ…もう一つ聞いていい…？」

佑輔「ん？なんだ？」（なんか最近聞かれてはっかだな俺…）

フェイト「その背中の傷なんだけど…」

佑輔「あら…見ちゃったかあ…ハハッ…気持悪いだろ…？」

佑輔はあまり気にしてないような口ぶりで喋った…

フェイト「え、いや、そんな事は…ただ………」

佑輔「……………?」

フェイト「……………」

フェイトはそのまま黙ってしまった…これ以上は聞いてはいけな  
気がしたから…そんな様子に佑輔はなにか思いついた。

ポン!

佑輔はフェイトの頭に手を乗せて…

フェイト「へ?! / / / /」

わしゃわしゃわしゃわしゃ!!

無造作に頭を撫でた。

フェイト「うわわわわわ! ? な、なにを?」

佑輔「あのな、俺に遠慮は無用なんだよ。実際フェイトは命を助け  
てもらった恩人なんだからさ。言いたいことがあるならハッキリ言  
ってくれていいんだぞ?」

佑輔はニツと笑いながら言った。

フェイト「は、はあ…」

フェイトはキョトンとしながら佑輔を見た。

フェイト（この人の笑顔、なんだか暖かくてホッとする。例えるなら…そう…）

夏の太陽の下に咲くヒマワリ

佑輔「？どした？」

フェイトがジーツと自分を見ながらボーッとしていたのを心配した。

フェイト「いえ！なんでも！」

フェイトは慌てて答え意を決して聞いた。

フェイト「じゃ…じゃあ聞くね。その…背中…の傷…心臓を貫いてるよね…？」

佑輔「ん？ああ、なんで俺が生きてんのかって事か。」

コクコク。

フェイトは首を縦にふりながら聞いていた。

佑輔「それは心臓が右にあるからだ。」

フェイト「……へ？」

キョトンとした…今彼はなんと言った？心臓が右？

佑輔「いやあ…俺も医者に初めて聞いた時はびっくりしたんだ。でもそのおかげで命拾いしたただけだな。」

フエイト「そ…そうなんだ。」（とことん謎の人だ…でも…悪い人じゃないんだよね…）

ザザッ

『東雲佑輔さん、東雲佑輔さん、部隊長室まで来てください。繰り返しします…』

急に館内アナウンスが佑輔を呼びだした。

佑輔「？なんか呼んでるな…よし！手当あんがとさん。またなんかお礼するわ。」

フエイト「気にしないでいいよ。でもあまり無茶しないでね。」

佑輔「了解。んじゃ……………」

佑輔は行こうとしたがそのまま止まってしまった…

フエイト「？？どうかした？」

佑輔「……………部隊長室…どこだっけ（泣）」

フエイト「……………」

佑輔はフエイトに案内してもらったことにした。

部隊長室…

フエイト「はやて、佑輔を連れてきたよ。」

はやて「なんや、迷子になっとったんか？」

佑輔「……25に…迷子つて…きついなあ…（泣）」

はやて「アハハ、………で…答えは決まった？」

佑輔「………いや、まだ迷ってる段階なんだが…」

佑輔は申し訳なく言った…

はやて「やつぱり…力が怖い…？」

佑輔「ま、ぶっちゃけそうなる………」

フエイト「佑輔……」

佑輔「けど…逃げたってどうしようもないわな…よし！決めた！やつぱ世話になるわ。昨日の借りもあるしな。」

佑輔は先日はやてに慰めてもらいある程度吹っきていた。なにより悩むのは自分の性分じゃない。なので意を決して決めた。

フエイト「昨日の借り？」

佑輔「うえ！？ああ、いや、なんでもないぞ！？」（言えるもんか！はやてに抱かれて大泣きしたなんて！）

佑輔は昨日の一件が恥ずかしすぎてごまかしていた。



はやて「にやり…実はなフェイトちゃん佑輔は昨日私のむ…」

佑輔「うわあああ！！！！言つなああああ！！！！！！」

はやて「んじゃ、佑輔、ようこそ機動六課へ！！歓迎するで」

佑輔「ああ。よろしく頼む。」

はやて「さて、まずは…リン、いい加減隠れずに佑輔に言わなあかん事あるやろ？」

そう言つて隠れているリンを捕まえて佑輔の前に出した。

佑輔「リン…」

リン？「……………あの…その…」

リン？は佑輔に目を合わせられずなかなか謝罪できなかった…が…

佑輔「すまん！リン！」

リン？「へ？」

先に謝られてしまった。でも、なぜ？助けてくれたのに氷漬けにし

てしまつて謝るべきは自分なのに。

佑輔「不可抗力とはいえ、お前に恥ずかしい思いをさせた。ほんつとつにすまなかつた！」

佑輔は頭を下げた。

リン？「そ…そんな私こそ、助けてくれたのに氷漬けにして…ごめん…ごめんなさ…いですう！」

リン？は泣きながら謝りだした。

佑輔「リン…」

佑輔は頭を撫でながら…

佑輔「いいんだ、あんなことされて怒るのが普通なんだ。だから…な…もう泣くな。な。」

そんな二人のやりとりを…

フェイト（なんかこの二人…）

はやて（まるで兄妹みたいやな）

微笑ましく見守っていた。

それから10分後…佑輔は技術室へと連れていかれた。

シャーリー「あ、フェイトさん……………あ その人ですね。例の

人は。」

フェイト「うん。東雲佑輔さんだよ。」

シャーリー「シャリオ・フィニーノです　シャーリーって呼んでください」

佑輔「ああ、東雲佑輔だ。俺も佑輔でいいぜ」

二人は互いに握手した。

佑輔「で…ここで俺はなにを？」

佑輔はここに連れてこられた意味がわからなかった。

フェイト「それはね、ここで佑輔のデバイスを作ってもらっただけど…」

佑輔「デバイス？」

シャーリー「まあ簡単に言うと魔法を使うための武器…いわゆるパトナーですね。」

フェイト「でも佑輔には魔力がないんだよね？」

フェイトは疑問になっていた。

シャーリー「はい。シャルさんからデータをもらいましたが、リンカーコアはないみたいです。でもその代わり闇の力ですか？そのエネルギーの塊があるんですよ。これを見てください。」

そう言つてデータを画面に出すと…

フエイト「なにこれ？体の中に…なにかリンカーコアより大きい…  
…結晶体？」

シャーリー「はい。私はこれを『クリスタル』と呼ぶようにしています。」

佑輔「『クリスタル』…」（ひょつとしてジョブチェンジでもするのかな？）

シャーリー「で、このクリスタルのエネルギー値がぶつちやけ…  
…隊長たちの倍どころか…計測不能だったりするんですよね…  
……………」

フエイト「ええ！？そんなのあつたら体が耐えられないんじゃない？」

佑輔「でもなんともないぞ？」

シャーリー「そこが不思議なんですよね…本当に人間なんですか？」

佑輔「……………泣いていいか…？（泣）」

シャーリーの疑いの眼差しに佑輔は涙が出そうだった…

シャーリー「冗談ですよ、魔力じゃないんでデバイスではないんですけど、そのエネルギーを媒体とした武器…まあ質量兵器に近くなっちゃいますけど作る事はできるんです。」

フェイト「でもそれだと暴走の可能性が…」

シャーリー「それは大丈夫です。シャマルさんが言うにはリミッターをかければ暴走する確率がグンと低くなるみたいです。」

佑輔「リミッター？ようは抑制みたいな感じが…」

フェイト「うん。そっかそれなら…」

シャーリー「まあリミッターをかけてパワーダウンしても、余りあるパワーですから問題にはならないと思いますよ。で…どんなのがいいかなと思って本人の意見を聞こうかと思って…」

佑輔「なるほど…でもデバイスってのがどんなのかわからないから使い方も全然わからないぞ？」

フェイト「あ…そっか…デバイスっていうのはこれなんだ。」

そう言つて手の平にあるバルディッシュを見せた。

佑輔「これが…デバイス？これが武器なのか？」

フェイト「これはまだセットアップしてない状態なんだ。だから…バルディッシュ、セットアップ。」

バルディッシュ『了解。』

フェイトは佑輔の目の前で変身した。

佑輔「……………」

シャーリー「？佑輔さん？」

フェイト「あ……」（このパターンは……）

フェイトの予感は的中した……

佑輔「すっげー……………！！！！！！」

シャーリー「きゃ！？びつくりしたあ！？」

佑輔「へえー好きなように変身するのかあ……あ……つまり俺がどんな武器を使い、変身したいかって聞きたいわけだ？」

シャーリー「はい」

佑輔「だったら俺いい案があるんだ」

果たして佑輔の案とは一体？次回に続く！

第五話：『佑輔！機動六課内奮闘記！』試験勉強ってなんか掃除したくなくね？

なのは「……………」

ヴィータ「……………」

シグナム「……………まともだな……………最初意外は……………」

なのは「ですね……………」

ヴィータ「そっぴり作者悩んでたぞ？」

なのは「なにが？」

ヴィータ「全然本編が進みやしねえって……………」

なのは「やっぱり初心者だからねえ……………」

シグナム「佑輔のデバイス（もどき）も決まったらしいぞ……………」

なのは「へえ悩みに悩んでたけど決まったんだ……………」

シグナム「ああ……………次回はその話になるらしい……………」

ヴィータ「ところで……………アレはなに……………」

佑輔「生まれてきてすいません生まれてきてすいません生まれてきてすいません生まれてきてすいません生まれてきてすいません……………」

三人「……………」  
「ご愁傷様」



佑輔「ふう〜〜〜…」

はやて「佑輔さん！本番始まりますよ〜って…またタバコですか…」

キヤロ「タバコは体に悪いですよ？」

佑輔「いいの〜俺の体の80%はタバコで出来ています」

スバル「えええ！？戦闘機人ならぬタバコ機人ですか！？」

ティアナ「あのね…信じてどうすんのよ…」

スカリエツティ（監督）「みなさん本番始まります！」

佑輔「ういす！それじゃ〜」

みんな「第六話始まります！」

佑輔「……………てなわけ！！」

佑輔がシャーリーとフェイトに案を話し終えた。

シャーリー「なるほど……………なかなか面白そうですね！」

佑輔「だろ？」

フェイト「いわゆる万能型白兵戦用かあ…でもこの背中の兵装…ちよつと変わってるね……………まるで板みたいだけど？」

フェイトは佑輔の案のデータのシルエットを見ながら疑問になった。

佑輔「おいおい、これが一番注目兵装なんだぞ？」

フェイト「そうなの？」

シャーリー「そうですね。これは誘導自立兵装、運用方としてはなのはさんのアクセルシューターに似てますね。ただ…ちよつと火力不足ではありませんか？」

佑輔「ま、そこはしゃあないさ。コイツに求めるのはあくまで相手を無力化すること。殺す気は全くないからな。」

フェイト（へえ…ちゃんと相手の事も考えてるんだ…）

佑輔は昔の事もあり命のやり取りは大嫌いだった…だからこそ、こ

の相棒になるであろう武器にはあくまでも無力化する事を求めている。その考えにフェイトは感心した。

シャーリー「でも佑輔さん、こんな兵装よく考えつきましたね？」

佑輔「いや、正確には俺の世界でやってた映画のアニメのやつなんだ。」

フェイト「あ、確か昔なのはとはやてと一緒に見てたのに似てるかも…確か…」

佑輔「そう、ガンダムさ。フェイトたちの世代じゃやってはなかったかな。」

フェイト「確か見てたのは…SEEDってやつだったかな？そこからは知らないけど…」

佑輔「SEEDは俺も見たが……世代の差を感じるなあ……」

シャーリー「じゃあこの方針で決まりですね。ただこの、ハイパーバズーカは駄目ですね…完全な質量兵器ですから。その分スペースが余りますがどうします？」

佑輔「そっか、ならバズーカは無しで行こう。余ったスペースはさつき話したミノフスキークラフトを着けてくれ。空もある程度飛べたらいいからな。なにうまくこなすさ。」

シャーリー「了解です。あ、そうそうこの子の名前は…」

佑輔「ガンダムだ。人々に心の光を見せる機体だ…」

フェイト「心の光…？」

佑輔「俺の力が闇だろうが暗黒だろうが、心だけは光でありたいんだ。ガンダムはきつと応えてくれる気がしてな。」

フェイト「うん、きつと応えてくれるよ。」

佑輔「サンキュー、フェイト、シャーリー。よし！頑張ってみるかあ！」

ぐううう…

勢いよく言ったところで佑輔の腹が鳴った…

佑輔「……………腹…へったな……………」

フェイト「クスクス」

シャーリー「なるほど…聞いた通り面白い人ですね」

こうして目処がたった所で佑輔は食堂へ向かった。

佑輔「おりよ？おい！エリオー！キャロー！」

エリオ「あ、佑輔さん。」

キャロ「……………」

ティアナ「……………ふん……………」

スバル「……………」

エリオは返事してくれたがキャラ口とティアナとスバルは軽く会釈しただけだった…

佑輔「…………… エリオ…俺、嫌われた？（泣）」

エリオ「アハ…ハハ……………」

エリオは苦笑いしかできなかった…

そんな気まずいまま食事する事になったが…何故か男二人と、女の子三人に別れてしまった…

佑輔「……………」（お…重い…）

エリオ「……………」（空気が…重い…）

佑輔「…………… 隣の家に塀ができたってね、へえ……………」

ゴオオオオ！

余計寒い空気が流れた…

エリオ（佑輔さん！それは逆効果です！（泣））

佑輔「…ああ…アハハ…いないほうがいいみたいだな……………」

いたたまれず席を立ち食堂から立ち去った…

シュボ…

庭に出てタバコに火をつけ…景色を眺めていた…

佑輔「はあ………どうしたもんかなあ…（泣）」

なのは「タバコは体に悪いよ？」

佑輔「うわ！びっくりしたあ！」

佑輔は急に顔を覗き込んだのはにびっくりした。

なのは「はやてちゃん達から聞いたよ？正式に機動六課に入ってくれるって。」

佑輔「耳がはいねえ…。でも前途多難だぞ…。（泣）」

なのは「アハハ スバル達のことでしょ？」

なのはは早朝訓練の時スバル達の様子が変だと思い、事情を聞いた事を伝えた。

佑輔「確かに俺が悪いけど、あの北極のような目で見られたらなあ  
（泣）はあ…どうにかして誤解を解かないとなあ…」

なのは「私に任せて いい方法があるから」

佑輔「へ？」

そして午後の訓練…

ティアナ「……………あの…なのはさん？」

なのは「なになかな？ティアナ？」

ティアナ「……………どうしてこの人まで居るんですか？」

そう…何故か佑輔までいた。

なのは「一緒に訓練するからだよ　佑輔さんも機動六課に参加してくれる事になったから。」

スバル「えええええ！？」

キャラ「ほ…ホントですか！？」

佑輔「ああ…まあ…そういう訳なんだけど…あのぉ…俺まだデバイスありませんよ…？」

ティアナ「そうですねー！！しかも、今までこういう訓練した事すらないって話しじゃないですか！」

佑輔「……………」　（やっぱり足でまといだな……）

なのは「でも佑輔さんには隠された力があるし、みんなと打ち解けるいい機会だと思わない？」

スバル「打ち解ける…って言っても…」

キヤロ「……………」

女性陣は未だに疑いの眼差しを佑輔に向けていた…

佑輔「ハハ…ハハハ……………」

苦笑いしかできない佑輔…

エリオ「僕は…賛成です！」

ティアナ「ちょ！エリオ！？」

エリオ「佑輔は悪い人じゃありませんよ！あの時だつて必死に僕とキヤロを守ろうとしたんですよ！僕は佑輔さんを信じます！」

エリオの言葉に佑輔は感動し、なのは感心した。

なのは「ま、とにかくこれから一緒にやっていく仲間なんだから、お互いにフォローしあわなきゃね。それじゃシュートイベーションをやるよ！制限時間は前と同じ5分間！」

佑輔「シュート…イベーション？」

エリオ「シュートイベーションっていうのは…」



エリオから一通り教わり、納得した。

佑輔「要は逃げ切るか、なのはに一発入れればいいのか…」

ティアナ「こうなったら仕方ないわね…佑輔さん！貴方なにもできないんだからどこかに隠れててよ！」

スバル「ちよっ…ティア、そういう言い方は…」

佑輔「いや…ティアナのいうとおりだ…正直今の俺じゃみんなの足を引っ張ってしまうのは明白だ…悔しいがな…」

キャラ「佑輔さん…」

佑輔「心配すんなキャラ…なんとか逃げ切ってみせるさ。」

佑輔は笑顔でキャラに言った。

キャラ「は…はい…」

キャラは返事はしたものの、やはりどこかまだわだかまりがあった…

ティアナ「それじゃ…佑輔さんは逃げまわる事に集中！私たちはなのはさんに一発入れるわよ！」

全員「おう！」

なのは「それじゃ…」

なのは魔力の弾を10発出した。そしてレイジングハートを振り上げ…

なのは「GO!」

杖を振り下ろし魔力弾を放った!

ティアナ「よし!散開!」

シュバ!…!

みんな散開したが佑輔は取り残された…

佑輔「え!?みんな早っ!」

みんなの速さに驚いていた。

ティアナ「バカ!!早く逃げなさい!」

佑輔「へ?」

ヒュン!ヒュン!

佑輔「うおお!」

魔力弾が佑輔に向かって急接近してきた!

スバル「佑輔さん!距離をとって!」

佑輔「距離か！よし！距離イイイ~~~~~！！！！！！」

ダダダダダ！

とてつもないスピードで逃げ出した！

キャロ「早っ！！」

エリオ「凄いスピード……」

スバル「あっというまに離れちゃった……」

ティアナ「……やるわね……はっ！！！感心してる場合じゃない！陣形を展開して！！」

なのは「凄いね……私の魔力弾から一気に距離を取れるなんて……」

レイジングハート『恐らくは彼の力がこの間解放されたからでは？』

なのは「かも知れないね………！？」

スバル「たああああ！！！！」

スバルがウイングロードを作りなのはに拳を入れようとしたがかわされてしまった………

そのころ佑輔はビルの中に入って息を整えていた。

佑輔「ぜえ…ぜえ…こりゃとんでもないぜ…さて…みんなは……  
……」

佑輔はみんなが戦っているのが見えた…

佑輔「すつげえな……これが魔法の訓練か…ん？スバルがやられ  
そう…あ…ティアナが弾を撃ち落とした…スゲー…これで弾が…あ  
れ一個足りな…！？」

佑輔はある事に気付いた…ティアナが撃ち落とした一発を引いたら  
9個ないといけないのに8個しか見当たらないのだ…

佑輔「残りはどこに…！？」

ティアナ「はあ…はあ…フェイクシルエットも大分やられた…後  
がもう…あれ…なのはさんの弾が一個足りな……」

ヒュン！

その時消えていた一発が自分に迫ってきていた事にティアナが気付  
いたが反応が遅れてしまった。



ティアナ「え？」

佑輔「いくぞおお！！！！！！」

そういつと佑輔はティアナを棒術のように振り回した！

ティアナ「いくつて…きゃああああ！！！！！！」

佑輔「狙いはつけるな！撃ちまくれええ！！！！！！」

ティアナ「ああもう！！！！！！」

ダララララ！！！！ドオン！ドオンドオンドオン！

襲っていた魔力弾はすべて消え去った。

佑輔「はあはあ…助かった…」

ティアナ「む…無茶苦茶…よ…アンタ…でも助かったわ…目が回ったけど…」

なのは「……………これは予想できなかったわ……………」

レイジングハート『私もです…あんな無茶苦茶な突破は見たことありません。』

二人はあっけにとられていた…

ティアナ「でもなんでアンタきたのよ…」

佑輔「仲間がやられそうなのを黙ってられなかったんだ。」

ティアナ「……………」

佑輔「さて、これから乗り切るにや…あの人の想像できない事を…  
……………ん？……………にやり　なあティアナ……………」

ティアナ「??？」

佑輔はなにか思い着いたらしくティアナに耳打ちした

ティアナ「だ…大丈夫なの？それで？」

佑輔「やってみなきゃわからんだろ？」

ティアナ「そうね…うん！やってみる！」

佑輔「頼むぜ！それと！俺を呼ぶ時は佑輔で頼むぜ！仲間なんだからな！」

ティアナ「……………仕方ないわね……………OK！佑輔！」

そう言つて佑輔はある場所へ走り出した。

ティアナ（みんな！今から言う通りにお願い！スバルは囃としてなのはさんを拡乱して！キャロはエリオにブーストとをかけて二人ともタイミングを待って！隙は私と佑輔でつくる！）

スバル「了解！」（ん？佑輔？）

キャロ（呼び捨てでしたよね？）

エリオ（うん。）

なのは「さて、みんな逃げる作戦になったかな？……上！？」

スバル「うおおお！！」

スバルが拳を振り下ろすがなのは避けてそのままスバルを狙った。だがスバルはヒット＆アウェイで離れたのだ。

なのは（スバルは囷？ん？あれは…佑輔さん？）

なのはは佑輔がなにかコソコソしながら近づいてくるのに気付き…

なのは「隙ありだよ！佑輔さん！！」

魔力弾を放ち佑輔に当てた…が…

サアアアア…

佑輔は消えた…そうティアナのシルエットだったのだ！

なのは「シルエット！？じゃあ本物は！？」

佑輔「隙アリやああああああ！！！！！！！！」

佑輔はビルの屋上から飛びなのはに拳を振り落とした、しかし佑輔の拳はなのはのバリアに防がれた…

バチバチバチ！



佑輔「くんぬおお~~~~~!!!!!!」

なのは「裏をかくのはいいいけど…それじゃ決定打にはならないよ!」

バチン!

バリアをはったまま佑輔を弾きとばした…しかしなのは見た…佑輔が落下している時に笑っていたのを…

佑輔「エリオ……………やれええええ!!!!」

なのは「!?!」

キャラ「エリオ君!」

エリオ「ストラダー!」

ドゴオン!

エリオは全魔力を込めてなのはに向かって突撃した。

エリオ「ううあああああ!!!!!!」

ドガアアン!

なのはと衝突したとき爆発が起きた…

ティアナ「!?!」

スバル「エリオ!!」

キャラ「エリオ君!!」

スタ!

エリオが爆発から出てきて地面に着地した…そして煙が晴れ…なのは平然と立っていた…が…

レイジングハート『ミッションコンプリート』

なのは「うん。ミッションコンプリート。よくやったね。」

エリオ「ほ…ほんとうに!?!」

なのは「うん。バリアを貫いてちゃんとジャケットまで通ったよ。」

スバル「やったあ!」

ティアナ「ふう…」

それぞれ歓喜の声をあげていたが…

キャラ「あれ? 佐輔さんは?」

なのは「え? あれ?」

エリオ「いません…ね?」

スバル「も…もしかして…今の爆発に…?」

ティアナ「嘘…でしょ…佑輔！どこ！どこにいるの！出てきなさいよ！！！」

ティアナが泣きそうになりながら叫んだら…

ガラガラガラガラ…

その時ガレキの下から佑輔が出てきて座り込んで…タバコに火を付けた…

佑輔「ふう…死ぬかと思った…」

エリオ「佑輔さん！！」

みんなが佑輔にかけよってきた…

佑輔「よ…上手くいったな…」

なのは「うん。お見事だったよ」

スバル「佑輔さん、よく思いつきましたね？」

佑輔「へへ」

なのは「でも…佑輔さん無茶だよ？あんな高さから落ちるんだから」

佑輔「あんたの裏をかくにやこうするしかなかったんで…って…ティアナ？」



スカリエッティ「やあ、佑輔君どうだい？これから一杯」

佑輔「お　いいねえ」

はやて「こらあ！佑輔！また2日酔いになるやろ！今日は禁止！監督もいい加減帰らんと子供が心配しますよ！！」

スカリエッティ「ハハハ、こりゃ今日は諦めたほうがいいね」

佑輔「いや、全く」

リン「なんですか…このあり得ない…シーン…（泣）」

キャラ設定！

やっとこさ主人公の設定が決まりました！

しのめ  
東雲 佑輔

25歳

デバイス（もどき）  
ガンダム

ガンダムのMSを着る感じただし顔は出てます…

武装

ビームサーベル  
ビームライフル  
シールド  
シールドビーム砲  
ダミー弾

フィン・ファンネル

追加装備としてミノフスキークラフト搭載

闇の力状態（暴走：真紅の瞳）

魔力じゃないためAMFは貫通する。

武装

暗黒の剣

技

ダークデトネイタ -

ダークバースト

魔力と違いAMFは無効…

東雲流剣術の技！

奥義、疾空斬！

懷に飛び込み斬撃を与える。

奥義、風爆斬！

居合いの構えからの斬撃で剣圧を飛ばしまるでかまいたちの如く相手に斬撃を与える…

奥義、斬光閃！

疾空斬のバリエーション、相手の懷に飛び込み…重い斬撃を打ち込み、装甲・バリアごと相手を吹き飛ばすホームラン技！

秘剣中の秘剣、龍桜千刃斬！！

相手の懷に神速のスピードで飛び込み、そのまま相手を連斬する神速奥義…

普段はGパンにティーシャツ…上着はジャケットを着ている…

髪が長く黒く背中の中半分まであり普段はくくっている…女性もびっくりサラサラヘアである…がわざとボサボサ感をだしている…

タバコも吸う（お気に入りはマイルド○ブン）

後々追加するかも知れません。



第七話：機動戦士 ガンダム！なのはVS佑輔！！…いい加減本編進ませ

佑輔「エンジョイテクノライフツ！！（泣）」

チュドーン！！！！

みなさん、こんにちわ。ティアナ・ランスターです。今奇妙な叫び声を上げてなのはさんにぶつとばされたのは一応主人公の東雲 佑輔。次元転移してあれやこれやで機動六課に入りましたが、未だにデバイスがない彼は訓練といっても逃げるか囷になるかしかでできていません。けど…

ガラガラ！

佑輔「まだまだあ！！！！！！うりやあああああ！！！！！！」

また熱くなって無謀なのはさんに突っ込んで……

チュドーン！！！！

佑輔「50・80喜んでえ！！！！（泣）」

また吹っ飛ばされましたね…つか…学習してよ…

なのは「こらっ！佑輔さん！そんな無茶したらダメって何回言えばわかるのー！！」

いや、全くその通りです…なのはさん…

佑輔「……………せめて…一太刀…」

スバル「いや、剣すらないし。」

スバルに突っ込まれるようじゃ最早救いようもないと思います。あの時私を助けてくれた勇ましさはどこへ？（ティアナ・ランスターの日記より…）

……………

佑輔はティアナとスバルに肩を貸してもらいながら医務室へ向かっていた…

佑輔「アイテテテ……………」

スバル「大丈夫？」

佑輔「いやはや…申し訳ない…」

ティアナ「アンタね、いくらなんでも無茶でしょうが…というか…生身であれだけ吹っ飛ばされてよくその程度で済んでるわよね…」

佑輔「そりゃ……………カルシウムとってるから？」

エリオ「そういう問題っていうか…なんで疑問系ですか…？」

前話の訓練をきっかけに佑輔はみんなと打ち解けあい、今では談笑する仲にまでなっていた…キャロともスムーズに話しができるよう

にエリオとは更に仲良くなれた。

キャロ「でも佑輔さん、まだデバイスはできないんですか？」

佑輔「うーん、予定では今日できるって聞いたんだがなあ…」

などと言ってる間に医務室に到着した。

佑輔「シャル先生、治療してくれ」

シャル「……………またですか…」

シャルは呆れかえっていた…

シャル「あのね、ここは佑輔さん専用の医務室じゃないんですよ。いい加減怪我なしで訓練をこなせるようになってください！」

佑輔「いや！使い続ければいつかは俺専用の真っ赤な医務室になるはず！シャア専用ならぬ佑輔専用に！！」

シャル「なつてたまるかああ！！」

スパーン！！！！

佑輔「あべし！？」

シャルのスリッパアタック炸裂！！佑輔のHPに100のダメージ！

ティアナ「真っ赤…って…アンタの血で染まるって…？」

キャロ「それはホラーです!!?(泣)」

スバル「ていうか…シャアって…誰？」

エリオ「さあ…?」

そして治療が完了した…

シャマル「はい!おしまい!」

パン!

佑輔「痛て!もうちょっと…こう優しくしてくれ…」

シャマル「毎回来てたら遠慮もなくなります!」

佑輔「全く…学生の際は美人の医務室の先生には憧れるって言葉があつたが…今のじゃ全然ありやしねえなあ…」

スバル「じゃあどんな風に治療されたいの？」

佑輔「そりやお前…こうモツコリ的な意味でだな。」

エリオ・キャロ『モツコリ?』

佑輔「（エリオたちを見て）……………コホン…ま…普通に優しくしてく……………っ！？ニュータイプの如く…！」

バキヤア！！！！

佑輔が立ち上がった途端座っていた椅子が全壊した…

スバルたちは呆然とし、佑輔は冷や汗ダラダラと流しながらティアナを見た…そこには…

ティアナ「…佑輔専用って……………そういう意味……………ギロツ……………」

佑輔「ひいひい！！！！般若……………！！！！」

そこにはどつかで見た100tハンマーを振り下ろしたティアナが…

ティアナ「やっぱり…アンタは……………最低よ……………！！！！」

佑輔「うわああ！？ティアナ！冗談だからお許し……………！！！！」

ティアナ「待ちなさい！！！！修正してやる……………！！！！」

二人はそのまま走り去った。その傍らシャルはお茶をすすりながら…

シャル「若いっていいわね……………いえ…かたや25だったわね…最近…そうは見えなくなってきたわ…」

全員『そうですね…』

逃げ回っているうちに追いつめられてしまった。

ティアナ「フッフ…もう逃げられナイワヨ…」

佑輔「ちよつとまてえ！！更に怖さがパワーアップ！！（泣）  
つていうか、エリオたちの前だからちゃんと自重しただろ！！  
！」

ティアナ「ソウイウモンダイジャナイワヨ…」

佑輔「じゃあなんで怒ってるんだああ！！（泣）」

その瞬間ティアナの動きが止まった。

ティアナ「……………」

佑輔「……………」？

ティアナ「なんでだろ？」

ズコ！！

佑輔は盛大にコケた。

佑輔「わからずやっとなんかい！！！！」

ティアナ「ご…ごめんなさい…」

佑輔「はあ…まあいいや……………」

佑輔が立ち上がって歩こうとしたが…

ティアナ「……………」

ティアナはうつ向いたままだった。

佑輔「ほら！昼飯食いに行くぞ！」

佑輔はティアナの手を引つ張ってついった。

ティアナ「え！ちょ！／／／／」

佑輔「早くしねえと好きなメニューがなくなるぞ！」

ティアナ「……………怒ってないの？」

佑輔「いちいちんなことで腹立ってたら身がもたねえよ」

ティアナ（……………雰囲気は違うけど…兄さんに…似てるんだ……………

でも…この気持ちは……………ちょっと違うような……………）

ティアナはまだ自分の気持ちを理解していなかった…

佑輔（ホント…手のかかる妹みたいなもんだよね…）

佑輔はのんきにそんな事を思っていた。

そんなこんなでみんなと昼食中。

はやて「うちらも一緒にええか？」

なのは、フェイト、はやて、シャーリーがやってきた。

スバル「あ、はい」

佑輔「はんは、へふはひいは、ひんはほほうはんへ。」

全員「……………」

なのは「とりあえず…佑輔さん。なに言ってるかわからないから…」

なのはは苦笑しながら言った…

フェイト「まるでハムスターだね…」

佑輔「ん……………モグモグモグモグ…ゴックン！ぷは…珍しいなア  
ンタらが揃うなんて」

はやて「まあたまたまや。んで佑輔に話もあるしな。」

佑輔「俺に？」



佑輔はキョトンとしながら聞いていた。

シャーリー「遂に佑輔さんの武装が完成しました」

佑輔「マジで？」

シャーリー「はい。マジで」

佑輔「いよおっし！これで逃げまわるのは終わりだな」

なのは「というわけで、お昼の訓練は佑輔さんの武装の起動確認のために私と一対一の模擬戦ね。」

佑輔「OKO……………NANDESUTO？」

なのは「だから私と、一対一の模・擬・戦」

全員『……………』

佑輔「みんな…今までありがとう…俺ここでの生活忘れないから…

（泣）」

ザッ！！

なのは以外全員敬礼した。

なのは「ちよっと！どっという意味なの！？」

佑輔「だって！生身の俺を思い切り吹っ飛ばしてたじゃねえか！」

みんな、ウンウンと頷いていた。

はやて（そんな事しとったんや…）

フェイト（なのはってば…）

なのは「ちゃんと手加減してたよ〜？」

佑輔「……………じゃあ…つまり…今までの…？」

なのは「うん　まだ軽いほうだね」

佑輔「……………お家帰る〜〜！！！！（泣）」

フェイト「あわわわわ！落ち着いて〜！」

スバル「佑輔さん！今お家ないでしょ〜〜！！」

ジタバタジタバタ！

佑輔は取り乱して暴れだした。

佑輔「あんな瓦礫の下で死ぬのはいやじゃ〜〜！！！！（泣）どうせ死ぬなら美人の膝枕で死ぬ〜〜！！」

なのは「じゃあ私に勝ったら膝枕してあげる」

ピシ！

その瞬間！時が止まった！……………そして時は動き出す…

佑輔「全力で勝つ！！」

ズコ！！！！

なのは以外みんなコケた。

ただし…三人を除いて…

ティアナ「……………」

はやて「……………」

フェイト「……………」

佑輔「…あれ…？なに…この雰囲気…さっきも味わったような…」

三人『この…バカアア！！』

ドゴオン！！！！！！

佑輔「ドメスティック！？」

案の定三人からきつつい天誅を……………三人？

フェイト（あれ…？なんで私？）

増えてるし…

そして昼食も終わり、訓練場…

なのは「じゃあまずは…って…」

佑輔「……………問題ない……………」

なのは「いや、あるからね。ミイラ男になってるからね。」

佑輔「……………」

二人が離れた所にいるみんなを見て…

はやて・フェイト・ティアナ『すいませんでしたああ!』

三人は土下座した…そして佑輔は一旦治療してくるということ  
でインターミッション!

なのは「じゃあ佑輔さん、始めに…」

佑輔「ちょいまち。」

なのは「なに？」

佑輔はなにか考え込んでるように言った…

佑輔「あのさ、何人かには言ったような言わなかったような気がするが、みんな俺の事を佑輔さんだの佑輔君だのと呼ばずに呼び捨てでいいぞ？」

なのは「うん、じゃあ私はなのはでいいよ。年下だし。」

となのはを筆頭にみんな了解した。ただエリオとキャロは歳が離れているため遠慮したそう。

なのは「じゃあ改めて、はい。」

佑輔「……………これが…俺のデバイスかあ…………」

佑輔は受けとって、感動していた。

シャーリー「けど残念な事に、喋らないんですね。魔力がないし…やっぱりデバイスみたくＡＩが組めなくて」

佑輔「いや、構わんよ。喋ろうが喋らなろうと俺の大事な相棒だからな。」

シャーリー「そうですね。じゃあ、セットアップって言ってみてください！」

佑輔「おうさ！…すう……………チエエエンジ！……………ガンダアアアム！セットアアップ！！」

ズコ！

全員（なぜそこまで叫ぶ！？）

変身シーンは……無し！！！！

佑輔「ないの！？」

野郎のなんか見たくない。

佑輔「そうですか……」

セットアップが（強制的に）終了した佑輔の姿は ガンダムをそのまま着た感じになっていた……まあ顔の部分はないけど……

ティアナ「なんか……ロボットみたいね……」

エリオ「それに重そうだし……あれで素早くうごけるのかな？」

シャーリー「大丈夫だよ 見た目ほど全然重くないし、なによりサイコミュを使ってるから佑輔さ……佑輔のイメージどおり動くよ」

キャロ「サイコミュ？」

フェイト「サイコミュっていうのはね。いわゆる脳波感知システムらしいよ。」

シャーリー「それによって敵や弾をを脳波で感知して素早く対応するし、あの背中のフィン・ファンネルを動かす優れたシステムなん

だよ」

スバル「あの背中の武器だったんだ……てっきり私洗濯用板かと……」

ティアナ「……………アンタいくつよ……」

とそれぞれ感想を述べていた頃、佑輔は武装チェックしていた。

佑輔「ビームライフル、及びサーベル、動作に問題なし。サイコフレームにも異常なし。フィン・ファンネルの感度も良好！」

なのは「じゃあ、そろそろ始めようか。」

佑輔「おう。」

二人はある程度距離を開け、戦闘体勢に入った……

はやて「それでは……………はじめ!!」

はやての合図と共に二人は空に飛んだ。

ティアナ「うわ……ロケットみたい……」

そう、佑輔はブースターとミノフスキークラフトで空中に向かったのだ。

スバル・エリオ「か……かつこいい〜!」

二人は感動していた!

佑輔「先手必勝!!」

ドキユ!ドキユ!

ビームライフルをなのはに向けて撃ったがいとも簡単にかわされた。

なのは「狙いをしっかりつけないとダメだよ!レイジングハート!」

レイジングハート『アクセルシューター』

バシユバシユバシユバシユバシユ!!

数個の魔力弾を放った!

佑輔「ちっ!いきなり誘導弾か…」

佑輔はブースターを使ってあちこち飛びまくってかわしていった。

フェイト「へえ…結構軽快に飛べるんだねえ…」

はやて「それにまだまだ荒いけどセンスもええ…こりゃ…化けるかも…」

佑輔「く!このまま飛んでも……よし!」

ブウン!

ビームサーベルを出してシールドで防ぎながら魔力弾を斬り払っていった。



佑輔「これで全部……！？」

なのは「もらった……！」

ドキュドキュドキュドキュ……！！

佑輔に向けて魔力弾をストレートに撃ってきた！

エリオ「やられる……！」

シャーリー「ううん！大丈夫！」

佑輔「く！フィンファンネル！エフィールド……！」

シュバシュバ……！！

佑輔はフィンファンネルを5つ出して自身の周りをピラミッド場に配置しバリアを発生させた！

スバル「あれバリアだったんだ……？」

ティアナ（いや……たぶんバリアだけじゃない……）

なのは（そんな使い方もあるんだ……）

佑輔「あつぶんねえ………よし……行け……フィンファンネル……！！」

佑輔はフィンファンネルをなのはにむけて射出した。

ピシュン！ピシュンピシュンピシュン！

なのはの周りを飛びながらビームを撃っていく。

なのは「おっと！」

なのはも得意なマニューバーを駆使して避けて行く。

佑輔「……………！！……………！！……………！！」

佑輔はフィンファンネルを操りながらなのはにビームライフルの狙いを絞っていき…

佑輔「……………そこだー！！」

ドキュドキュドキュドキュ！

ドゴオン！

見事命中した。

キャロ「や…やりましたあー！！」

フェイト「ううん…まだ…」

煙が晴れるとバリアを張ったなのはが出てきた。

佑輔「やっぱりダメかあ…」

なのは「でも今のはなかなかよかったよ？じゃあ…これなら…どう

かな？」

レイジングハート『アクセルシューター』

なのはがまたアクセルシューターを放った。数はさっきより増えている。

佑輔「うわっ！マジかよ！！」

佑輔はブースターを全開にしてかわして行く！

佑輔「くー！うおー！ちよいさ！」

だが佑輔は気付かなかった…。なのはがさっきの佑輔がとった戦法だということに…

ティアナ（これは！？）「佑輔！！危ない！！」

佑輔「え？」

レイジングハート「デイベインバスター」

なのは「気付くのが遅いよ！シュート！！」

佑輔「しまった！ファンネルは…間に合わねえ！！」

ドゴオオオオン！！

エリオ「ああ！」

キャラ「佑輔さん！」

そのまま佑輔は地上に落下していったがなんとか着地した。

佑輔「く…う…効いたな…」

なのは（ここまでかな…？）

フェイト（でも佑輔、頑張ったよ…）

はやて（せやな…っ！？）

ぴぴぴぴー…

シャーリー「こ、これは！？」

フェイト「どうしたの？シャー…っ！？佑輔！！」

佑輔「……………」

佑輔はうつ向いたまま動かない…

シャーリー「佑輔のクリスタルが！前回程じゃないけどパワーが上がっていつてる！」

スバル「え？それって？どゆこと？」

エリオ「……………！？」

キャラ「もしかして！！」

ティアナ「闇の力が!!」

なのは「!? 佑輔!!」

佑輔「負けられねえ… 負けてたまるか…!」

顔をあげた佑輔の瞳は… 紅くなっていた…

はやて「なのはちゃん!」

フェイト「待つて! はやて… なにか様子が違う… 闇の炎がでてない…」

はやて「え?」

佑輔「まだまだだあ!!」

ドキユドキユドキユ!

佑輔はビームライフルをなのはに向かって、撃った!

なのは「く!」

なのははバリアを張ってなんとか防いだ。

なのは（さっきより鋭さも威力も上がってる!）

シャーリー「これは… 安定してる…?」

はやて「無意識にコントロールしてるんか…?」

佑輔はまた空中に浮き、なのはと距離を思いっきり離れた。

なのは「??」

はやて「な…なにする気や…」

佑輔「……………」(なのはに勝つにはこれしかない…一気に距離を詰めつつ…ありったけの武器を叩き込む…)

しばらく二人は対峙していた…そして見守っているみんなも緊張していた…

佑輔「すう…はあ……………」

ドン!!

佑輔はブースターを全開にしてなのはにビームライフルを連射しながら突っ込んでいった。

なのは「わっ!?!」

佑輔「うおお!!フィンファンネル!!」

フェイト「あのタイミングで!?まだ距離があるのに!?!」

佑輔はフィンファンネルを射出するも自分についてこさせるだけなのはには向かわせてはいない…そしてある程度近づいたら

佑輔「ダミー射出！」

なのはの周りにダミーバルーンをばらまいた…

なのは「え？え？なに？」

なのははよくわかっていた…しかし…

レイジングハート『！？マスター！このバルーンは！！』

佑輔「遅い！！いけ！フィンファンネル！！」

佑輔は距離をまた離しフィンファンネルをなのはとバルーンに狙いを向けさせて撃った！

その結果…

ドゴオン！！！！ガガガ！！

大爆発がおきた。だが佑輔はこれで終わらない！

ブウン！

ビームサーベルを構いえ爆炎の中へ突っ込んだ。

佑輔「うおおお！」

なのは「くう！やるなあ…って…えええ！？」

佑輔のサーベルが襲いかかる…と思ったが…





輔はそのなのはの胸を掴んでいた

なのは「え…えと…／／／／」

佑輔「……………／／／／／はっ！？す…すまん！」

佑輔は手を離し謝りだした。

なのは「し…仕方ないよ…今は事故だもん。／／／／それに…  
守ってくれたんでしょ…？」

そう佑輔は落ちる際なのはを地上に激突させないようなのはを自分の  
体の上へと体勢を変えたのだ。

佑輔「…お…女の子に怪我させる訳にやいかねえからな…／／／  
／／」

なのは「…そつか……………／／／／／」

二人は黙り込んでしまった…二人の顔は近かったからだ…いや…更  
に段々…近づいていき…そのまま……

フェイト「なのは…！！佑輔…！！」

二人「！？／／／／／」

声がした瞬間二人は離れた。

はやて「あ、おった！大丈夫か……………って…なんで正座なん…  
？」

なのは「え?! いやぁ! なんだろう? にやはは... / / / / /」

佑輔「なんで... だろうな... / / / / /」

はやて「???」

ティアナ「佑輔! 目大丈夫!？」

佑輔「は? 目?」

スバル「はい、鏡」

佑輔は鏡を見た...

佑輔「..... うおおお!?! 目が真っ赤だぁあ!?!」

スバル「気付いてなかったんだ...」

はやて「佑輔、なんともないんか?」

佑輔「うゝん、これといって... あ... ただちょっと... 気分が高揚してるような?」

シャーリー「それは多分、一種の軽い興奮状態なのかもしれませんね。」

佑輔「ふゝん。」

その時、佑輔の目の前でなにかが光だした!!

佑輔「うわ!？」

キャラ「な…なんですか!!？」

光が収まると…そこには小さいクリスタルが浮いており…佑輔の手に収まった…

佑輔「な…なんだこれ…？」

???『決して諦めぬ不屈の心…紅き瞳に宿る力となる…』

佑輔「だ…誰だ!！」

だが声はもう聞こえずクリスタルは輝いていた…

ティアナ「なにか聞こえたの？」

佑輔「え？」（俺だけにしか、聞こえなかった?）

佑輔は今聞こえた話を話す…

シャーリー「うゝん、もしかしてその小さなクリスタルを持っていると瞳が紅くなって力が増すのかな？」

佑輔「そうなのか？」

シャーリー「ま…調べなきゃわからないけどね？」

佑輔「そうか…」

謎を残したままこうして二人の模擬戦は終わりを告げた……

はやて「ちなみに…どっちが勝ったんや？」

なのは「え？ああ…えと…」

なのは「どう答えようかと思ったとき…」

佑輔「引き分け…だな…うん…二人で墜落したし」

フェイト「ふん。じゃあ膝枕もなし？」

なのは「あ…」

佑輔「ま…引き分けだからな…仕方ないさ ま、元々冗談だしな」

なのは「冗談…なんだ…」

なのはは一瞬悲しいそうな表情をした…誰も気付かないよう…

佑輔「そういうのは無理矢理じゃなくてホントに好きな男にしてやるもんだしな」

はやて「ほな、今日は解散にしようや」

はやての一声でみんな解散していった…そして佑輔も帰ろうとする  
と…

なのは「ねえ佑輔？」

佑輔「ん？」

なのは「今度は、ちゃんと私に勝ってね」

そういつてなのは帰っていった。

なのは（そしたら…あの続きも…ね　／／／／／）

どうやらなのはにも恋心を植え付けてしまったようだ…しかし当の  
本人は…

佑輔「……………いや…当分勝てねえだろ…」

次回に続く…

第八話：進展……………ってやつとかいい！？（前書き）

ヴァイス「…むう……………」

佑輔「うぬう……………」

リン？「…む……………」

スカリエッティ（監督）「……………むむむ……………」

フェイト「あの……………」（なに……………この雰囲気……………？）

全員（フェイト以外）『に……………らめっこしましょ……………！あつぷつぷ……………！』

リン「ぷつ……………アハハハハハ……………！」

ヴァイス「ぶわハハハハハハ…………………………！……………！」

スカリエッティ「あ……………はっはっは……………！……………！」

佑輔「うつしやあ……………！俺の勝ち……………！！今日の飲みはお前らの奢りだからなあ……………！」

フェイト「…………………………意味が……………わからない……………」（そもそもリンは未成年じゃ……………）

第八話：進展……………ってやつとかいい！？

今日の訓練はちょっと違っていた…個別スキルの特訓に入っただ…そして…

なのは「はい！じゃあみんなの訓練は終了了」。

なのはがそう告げたときみんなはバテバテだった…一人を除いて…

フェイト「じゃあ…佑輔、次は佑輔の番だよ。」

佑輔「了解だ。」

なのは「待たせてごめんね。」

なのはは佑輔に謝った。なぜなら佑輔だけまだ参加できなかったからだ。

ヴィータ「今日はアタシとフェイト隊長の二人を相手してもらっぞ。」

佑輔「……………は？相手って…まさか…模擬戦？二人同時に？」

フェイト「うん。」

佑輔「……………マジかよ……………！！！！待たされた拳げ句に地獄到来……………！！！！（泣）」

ヴィータ「ええい！わめくな！仕方ないだろ！お前の ガンダム…  
だっけ？の場合、兵装が特殊すぎるんだ！」

フェイト「ガンダムは近・中・遠、どれにでも対応できるオール  
ラウンダーだからね。だから、三人でそれぞれで教えるより、レベ  
ルをあげながら模擬戦をしたほうが効果的なんだよ。」

佑輔「要は実戦あるのみてことか？（泣）」

なのは「当たり前 それに私と互角に戦えたんだから大丈夫だよ」

なのはは素晴らしい笑顔で答えた。

佑輔（絶対嘘だ…アイツ絶対本気は出してねえ！）

佑輔の心の叫びも虚しく、模擬戦は開始された…

15分ぐらいたった頃…

フェイト「はああ！」

佑輔「くうう！！」

バチン！

フェイトが二刀で斬りかかってきたがビームサーベルとシールドで  
防いだ。しばらくつばぜり合いが続いた頃…

佑輔「！？上か！！！！フィンファンネル！！！」



ヴィータが上からくるのを察知してフィンファンネルを射出した。

ヴィータ「わわっ！と！」

佑輔「たりやー!!」

バチン!!

フェイトを弾いてビームライフルを構えるが…

フェイト「撃たせない!!」

フェイトがソニックフォームで距離を詰め…

ドガァ!!

佑輔を斬り払った。

佑輔「ぐああ!!つく!!」

ヴィータ「これで…終りだ!!」

ドゴォン!!

体勢を直すもつかの間…すぐさまヴィータの一撃をもらい地上に落下した…

なのは「はい!そこまで!!」

佑輔「アイツタタタ……ああ……くそ……負けたあ……」

ガンダムを解除してなんとか立ち上がった……

なのは「どうだった？二人とも。」

ヴィータ「まだ複数の相手には慣れてねえな。フェイトを相手にしてアタシにファンネルを撃ったのはいいが動きにキレがなかったな。」

フェイト「そうだね。意識をファンネルにも回してるぶんこっちにも集中できなかったみたいだよ。あと……射撃の狙いも甘かったかな。」

佑輔（……結構ボロクソに言われるな……くすん……）

なのは「うん。じゃあ当面佑輔の課題は複数相手にも対応できるようにならないとってとこだね。せっかくのフィンファンネルもただの飾りにならないようしっかりと使いこなさないと。」

佑輔「ういーっす……（泣）」

エリオ「でも接近戦の時の踏み込みはかなりのモノでしたよ?」

スバル「あ、私もそれ思った。射撃主体かと思ったからびっくりしたよ。」

フェイト「もしかしてなにかやってた?」

佑輔「昔剣術を少々な。」

と話している様子を遠くでモニターを見ていたとあるお方…

シグナム「ふむ…剣術をな……………よし…今度は私が全力で稽古をつけるか…フッフッフ…」

と、つぶやいていたそうなの。

ヴァイス「シグナム姉さん……………目がマジッすね……………」（旦那も災難だな…）

佑輔「……………っ!？」

佑輔は突然身震いした…

ヴィータ「どうした?」

佑輔「あ…いや…なんか…悪寒がな…気のせいかな…」

フェイト（多分…シグナムだね…）

そして何回か同じ事を繰り返し…

なのは「はい!じゃあ午前の訓練終了!」

なのはがそう言って集合をかけた。

「フォワード陣はあ……はあ……はあ……」

なのは「はい、お疲れ。個別スキルに入るとちょっとキツイでしょ？」

ティアナ「ちよつと……いうか……」

エリオ「かなり……」

もうみんなバテバテだった……佑輔に至っては……

佑輔「ポクポク……チーン……」

ミイラになっていた……

なのは「もう、まだ若いのにだらないなあ……」

佑輔「む……無茶……いうな……はあはあ……だいたい……フェイト……ヴ  
イータ……お前ら……途中から絶対楽しんでただろ……」

ヴィータ「そんな事……ないぞ……？ 決して佑輔をボコボコにしてストレス発散しようなんて思っていないぞ……？」

フェイト「うん、そのスケベな根性を叩き直す為という名目で日頃の鬱憤をはらそうだななんて思っていないよ?……ちょっとしか」

と言って目を反らした……

佐輔「おいしいおいしい！！めっちゃめっちゃ口に出してんじゃねえかああ

「！！！！そこまで素直に言つと腹立つ通り越してすがすがしいわ！  
！なに？俺の事嫌い！？そこまで嫌いですか！？泣くぞ！俺泣いち  
まうぞ！！！」

ティアナ（……………元気じゃん…）

こうして訓練が終わった…

お昼を食べるために食堂へ向かう最中、外回りに出かけようとする  
はやてたちと出くわした。

はやて「あ、みんなお疲れさんや」

フォワード陣『はい！』

みんな元気よく返事した。

佑輔「はやてたちはどっか行くのか？」

ヴィータ「もしかして外回り？」

リン？「はいです ヴィータちゃん。佑輔さん」

はやて「ちよう、ナカジマ三佐とお話ししてくるよ。」

スバル「あ…」

はやて「スバル、お父さんとお姉ちゃんになんか伝言とかあるか？」

佑輔（親父に…姉貴…？ふうん…）

佑輔はスバルの家族を想像したが…

佑輔（まさか…家族で……熱血一直線じゃないだろうか…）

などと失礼な事を考えていた…

はやて「あ、そや。佑輔も一緒にいかへん？」

佑輔「は？俺も？なんで？」

はやて「佑輔は外の事をあまり知らんやろ？だからちよつとええか  
なつて。」

佑輔「いや、これから昼飯…」

そう佑輔が言いかけたとき。

シャーリー「そういえば午後の訓練はシグナムさんが佑輔に全力で  
剣術の稽古をつけてやるって…」

佑輔「謹んでお供させていただきます！部隊長殿！」

ズコ！！！！

佑輔が即答したらみんなコケた。こうして佑輔は同行する事になっ  
た。

ちなみに…

シグナム「……………逃げたか……………まあいい…その分次の時はとこ  
とん殺らせてもらっぞ…フッフッフッフ…」

などと危険な事を言っていたとかいないとか…

ヴァイス（ホントに…旦那…気の毒な…）

車で移動中…

佑輔「そーいや、ナカジマ三佐…だっけか？　どういう人なんだ？」

はやて「ウチの尊敬する上官やよ。あ、お昼まだやったな。お弁当作つとるから食べてええよ。」

佑輔「マジでか！」

佑輔が意気揚々として弁当を開けたらサンドイッチが入っていた…  
…三人分…

佑輔「……なんできっちり三人分…まさか…」

リン？「最初から連れて行く気満々だったですよ」

はやて「そーいうことや」

佑輔「全く…抜かりのないやつ…」

はやて「迷惑やった？」

佑輔「いんや。おかげで助かったしな。んじやいただっきまゝす！」

リン？「いただきますです」

パクリ…

佑輔「うつめえ！！俺が作ったより全然うつめえよ！」

はやて「ふふ　ありがと　それにしても佑輔…料理できるん？」

はやては意外そうに聞いた。

佑輔「よくお袋に料理習ったし、一人暮らし長かったからな。節約のためにとよく作ってたよ。」

はやて「あ…………ごめん…」

佑輔「別にいいよ　気にすんな　あ、リン、口のまわりが…」

といってハンカチをだしリンの口を拭く。

リン？「んううう…」

はやて（なんかホンマに兄妹やなあ）

そうしてひとときしり食べたら…

佑輔「はやて、運転代わろうか？昼飯食ったほうがいいぞ。」

はやて「ええよ。佑輔、道わからんやろ？なんなら佑輔が食べさせてくれる？」

リン？（なんですと！？）





リン「え…あ…あ…ん…パク…えへへ、美味しいですう」

佑輔「はは…そりゃよかったな…」（一気に機嫌が直ったな…さすがはやて弁当…今度作り方を教えてもらおう…色々…役に立つかも…主に…あいつらが怒りだしたときに…）

佑輔は女性陣が怒った時用に習う気になった…だがそれはまた別のお話…

はやて「ほら、ウチにも。」

はやてはまた催促しだした…そして…

リン？「あ！私にもですう！！」

リン？も催促しだした。

佑輔「あ…はいはい。順番だ順番。」

こうしてプチ女の戦いが始まったが佑輔は…

佑輔（なんか最近…手のかかる妹が増えた気がする……）

と…乙女心のおの字も気付いていなかった。

そして…ナカジマ三佐のいる『陸士108部隊 隊舎』に到着した…そして、そこで佑輔に災厄が振りかかるとは…この時本人は気付いていなかった……

次回に続く！

第八話：進展……………ってやつとかいい！？（後書き）

スカリエッティ「は〜いカット〜！今日はここまで、お疲れ〜！」

佑輔「アイツテテテ…」

フェイト「だ…大丈夫？」

ヴィータ「えと…ごめんな？」

佑輔「あゝ大丈夫大丈夫…しかし…空中アクションはなかなか難しいなあ〜」

フェイト「確かにね。」

ヴィータ「ま、これからもこんな状態なんだから頑張ろうぜ。」

佑輔「そだな。」

スカリエッティ「やあ佑輔君…実はこんなチケットがあるんだが…一緒に行くかい？」

佑輔「ん？こ…これは…！な…なんという…モッコリチケット…お供させて…」（ドゴオン！）ぶべら…？」

フェイト「佑輔〜（怒）」

佑輔「ご…ごめん…なさい…」

スカリエツティ「はっはっは！ 佐輔はダメダメだなあ…（ドガァ！）  
アンリ！？」

チンク「……なにしていますか……お父さん……（怒）」

ヴィータ「容赦ないな…お前ら……」

第九話：進展その2！…………道に迷ったら迷子センターへ。（前書き）

佑輔「さて…なんだかんだでもう第九話か…」

はやて「そうやねえ…作者もよう頑張るわ…」

佑輔「ほんとに行き当たりばったりで書いてるみたいだしな…」

はやて「そや。あとがきで作者が読者のみんなにお願いがあるらしいわ。せやから最後まで是非読んでください。では！始まります！」

佑輔「俺の…セリフ…ほとんどいいやつた…（泣）」

第九話：進展その2！…………道に迷ったら迷子センターへ。

陸士部隊108部隊 隊舎…………さて…我らが歩くお笑い兵器こと…  
主人公は…………

佑輔「……………ここはどこだ…………？」

迷子になっていた…………

佑輔「いやいや、落ち着け…一応俺は25だぞ？そうそう迷子になりますかってえの…きつとはやて達がはぐれたんだな。うん。」

などと責任転嫁しようとしていた…………

佑輔「……………そんなわけねえわな…明らかに俺がはぐれたんだな…（泣）さて…どうしたもんか…………」

女性局員1「ねえねえ…あの人…なんか怪しくない？」

女性局員2「うん…すっごい怪しい…………」

ひそひそと女性局員たちは佑輔を不審人物と認識していた…無理もない…拳動不審に一人ボケをやっていたれば当たり前である…

佑輔「…やばいなあ…せめてはやてかりインが俺を見つけてくれるか…もしくは自力で見つけるしかないな…ま…さすがに迷子放送とかはないだろうけ……………」

ピンポンパンポン。

はやて『あゝあゝ迷子になつてゐる東雲 佑輔、東雲 佑輔、2  
5歳男性、入口まで戻つておいでゝ待つとるからな』

佑輔「言つてゐるそばからこれかアアアアアアア!?!?!」

女性局員1「あの人…迷子だつたんだ…クスクス…」

女性局員2「25歳なのに…恥ずかしい…クスクス」

佑輔「赤つ恥じだああ!!!(泣)」

………

ゲンヤ「ぶつはははは!!!」

佑輔「………」(イライラ)

ギンガ「クスクス…」

佑輔「………」(イライラ)

リン?「み…みなさん…そんなに笑つちゃ…可哀想……クスクス  
………」

そついうリン?も必死に笑いを堪えていた…

佑輔「笑うなあああああ！！！！（怒）」

無事に合流できた佑輔は部隊長室で笑われていた…

はやて「そうやで、あんまり笑うと佑輔に失礼やで」

佑輔「お前が一番の原因だろうがああああああ！？」

この時ゲンヤとギンガは佑輔をこう認識した。

二人『迷子の達人だ…』

と…

ゲンヤ「んで…まあ…この兄ちゃんがさっき言ってた…」

はやて「はい。東雲 佑輔です。ほら佑輔、自己紹介せな。」

佑輔「え？あ、東雲 佑輔だ…じゃなくて…です。」

ゲンヤ「ゲンヤ・ナカジマだ。娘が世話になってるな。」

そういつて手を差し出した。

佑輔「あ…いえ…俺…じゃなかった…自分のほうが足を引っ張ってるもんで…」

さすがに佑輔も年上には敬語に気をつけていた…（変だけど）そして手を出し、握手した。



ギンガ「それじゃあ、私も…はじめまして。ギンガ・ナカジマです。」

佑輔「東雲 佑輔です。よろしく…」

そして握手した…瞬間…

ピキイン!!

佑輔「!?!」

佑輔はギンガと握手した途端なにか違和感を感じたまま呆けていた…。

リン? 「?」

ギンガ「あの…どうかしました?」

佑輔「……………」

はやて「…………佑輔?」

佑輔「え!?!? ああ…え」と

我にかえった佑輔はなにか言い訳しようと考え……

佑輔「あゝ……………その…あれだ…」

ギンガ「?」

佑輔「コホン…」

佑輔は咳払いをして…

佑輔「ギンガさん、これも出会ったなにかの縁…よろしかったらこの後ディナーでもいかがですか…？二人っきりで…」（ギューピーン！）

誤魔化すために思いついたのは…ナンパだった…しかも…人生初の…珍しく男前の顔になって…

ギンガ「遠慮させていただきます」

これまた素晴らしい笑顔で断るギンガ…

佑輔「ああ…さいですか…」（ちよこつとだけ…本気だったんだがなあ…（泣））

ギンガ「ところで…後ろ…危ないですよ？」

佑輔「ほへ？」

ゴゴゴゴ…

後ろを向くと…

はやて「ようもまあ…上司の前で…ナンパできるなあ…」

リン？「……今度は……かき氷にしましょうか……」

佑輔「風神と雷神降臨………！？待てえ！！冗談だ………！！」

はやて「……………ほんまにか…？」

ドスの効いた声で聞くはやて「…この時ゲンヤは…」

ゲンヤ（あいつ…高町の嬢ちゃんといい勝負じゃねえか…？）

佑輔「もももちろんでございますですよ！！」

はやて「……………そうかあゝ、ならええんや。」

佑輔「ほ…助かった…」（しかし…慣れん事はするもんじゃないな…）

ゲンヤ「おゝい…そろそろ本題入らねえか？」

はやて「あ…そうでした…三人はちよつと席を外してもらうつてええ？」

佑輔「わかった。」

そして部隊長室を出て三人で歩きながら佑輔は考えていた…

佑輔（しかし…なんだったんだ…今の感覚は……あのGINGAとかいう娘……ホントに…人間なのか…？まるで…なんかこう…機械…的な感覚が…）

ギンガ「あの…」

佑輔「うひゃいー！な…なにかな？」

ギンガ（うひゃい？）

リイン？「もう！聞いてなかったんですか？これからギンガさんも捜査に外部協力してもらって話です！」

佑輔「あ、ああ…すまんすまん。そうなのか。よろしくな。」

一方…部隊長室。

ゲンヤ「レリックの件は了解した…んで…あの兄ちゃんだな…」

はやて「あ、はい？」

ゲンヤ「あいつ…感が鋭いかもな…」

ゲンヤは神妙な顔つきになっていた…そしてはやてもまた…

はやて「…恐らくは…ギンガが…戦闘機人やいうことを…直感的に…  
……………」

ゲンヤ「だな…さっきも聞いた…闇の力に…クリスタルか…ま、  
なんの事だがさっぱりわからねえが、お前さんの事だ…全く知らない

いまま部隊に置くつて訳でもあるめえ……」

はやて「はい……一応無限書庫にいる友人に調べてもらってる最中です……」

ゲンヤ「そうかい……話してみた感じ……悪い人間には見えねえから現段階ではなにも言うことはねえ……だが……もし、また暴走したら……上層部が黙ってるとも思えねえな……」

ゲンヤの言うことはもつともだった……ある意味佑輔は爆弾だ……それもとてつもなく危険な……実力もまだまだの上、リミッターをも掛けたとはいえ……それでも……クリスタルの力は部隊長たちより上なのだ……

ゲンヤ「なにか……特別な理由でもあるのか？」

はやて「……放っておけなくて……佑輔の過去は……なんか……ウチに似とるいうか……それに……その……」

ゲンヤ「……惚れたか？」

はやて「え！？／＼／＼／＼そんなわけっ！！」

ゲンヤは溜め息をつきながら……

ゲンヤ「お前なあ……さっきあれだけ嫉妬してりゃ……わかるぞ……」

はやて「……ほんま……師匠には適わないですよ……でも……まだわからないですよ……自分の気持ちが……」

ゲンヤ「そうかい……ま……俺から見るにもう答えは出てると思うが

ねえ……」

はやて「………って！！話し変わってますやん！」

ゲンヤ「ハハハハ！」

はやて「もう！師匠！」

佑輔「ぶえつくし！！！」

ギンガ「風邪……ですか？」

佑輔「いや………誰か噂してんのかな？」

こうして……外回りも終えたはやてたち一向はみんなで外食をしたが……その時佑輔がたらふく食べまくったせいでゲンヤの財布が冬になったのは……また別のお話……

ゲンヤ「ところでよ……」

はやて「はい？」

ゲンヤ「あいつ……本当に……25か？」

ギンガ「あ、私もそれ……気になってました……」

はやて「……信じがたいですけど……ほんまです……」

ゲンヤ「………」

ギンガ「ホントに私より……年上なんだ……」

次回に続く……！

第九話：進展その2！…………道に迷ったら迷子センターへ。（後書き）

佑輔「さて、いかがでしたでしょうか！！次回はホテルアグスタ編  
！！……………ついに白い魔王登場かあ……………ガタガタブルブル……………」

はやて「そんなに震えずに……………ほら！お願いがあるんやろ？」

佑輔「あ、え〜とですね……………なんだっけ？」

ズコ！！

はやて「忘れたんかい！！ほら……………テロップテロップ……………」

佑輔「あ、え〜と……………OPと……………EDのテーマを募集したいと作者が……………  
……………待て……………この作品にOPとED……………考えてもらうのか……………無謀だと思  
う……………」

はやて「正直……………ウチもや……………」

佑輔「しかも……………編が終わることにつて……………どれだけ調子いいんだよ  
……………」

はやて「まあ、一応ええんやない？やっとな今序盤終了って感じやし。  
……………」

佑輔「いいのかなあ……………んじや、読者の皆様！！どうかよろしくお願  
いします！！この序盤編のOPとED、もし合いそうなのがあれば  
感想に書いて頂けると幸いです！では！また次回でお会いしましょ  
う……………」



はやて「次回は佑輔が、おもしろ変身するからお楽しみに！」

佑輔「……………え…なにそれ…聞いてないぞ…なあ…」

はやて「お楽しみに！」

佑輔「うおおい！！！！シカトですか！！！！」

第十話：ホテルアゲスタ……………のっけから飛ばしますよ！の巻

夢を見ていた…

いつものとは違う……………まるで…自分の辿る…未来…

佑輔（……………あれ……………なんで…俺……………寝てるんだっけ……………ここ……………どこだ……………？）

周りを見ると海があり……………砂浜があるのが理解できた……………だが佑輔の周りの砂は…

佑輔（あれ……………なんか……………俺の周り……………赤く……………ね……………？なんでだ……………？）

そう……………佑輔は血だらけで倒れていた……………よく自分の体を見ると…

佑輔（あ……………そうか……………胸を……………貫かれたのか……………）

ドオオオン！！！！

佑輔（なんだ……………爆発……………？）

爆炎でよくわからないが空中でなにか巨大なモノが爆散しながら海

に落ちていくのが見えた……だが……佑輔本人には……それがなんだか理解できた……

佑輔（……ああ……そういや……ゆ……ごと……ラ……シ……を……破  
壊して……相談ちに……か……はは……俺……やれたんだ……これで……  
やっと……）

エリオ「いた！！！！佑輔さんがいました！！！」

なのは「どい！！」

キヤロ「あ、あつちに！！」

みんなが駆け寄ってくるが……そこで見たのは……血まみれで倒れたまま青空を見つめていた……一人の……戦士……

はやて「佑輔……！……ゆ……ゆうす……け……？」

なのは「う……嘘……そんな……」

ティアナ「な……なによ……これ……なんの……冗談よ……」

スバル「佑輔さん……が……」

「いや……いや……いやあ……ああ……ああ……！！！」

エリオ「佑輔さん！！！！しっかりしてください！！！」

はやて「佐輔……！ 佐輔……！ しつかりしい……！ はやく！ 医療班を……！ はやく……佐輔が……し……死んでまう……！」

佑輔（はやて…みんな…あれ…誰だ…あいつらは…ああ…そうか…あいつらは…はは…協力…してくれたのか…）

佑輔は見慣れない人間がいたがまるで知っているかのようなうだった…そしてはやてを見つめて呟いた…

はやて「！？佑輔！しっかりしい！今医療班がくるからな！―」

佑輔（も…う…駄目さ…自分の…体だ…よくわかるんだよ…）

はやて「なに弱音をはいとるん！―いつもは…いつもは…おちやらけで…スケベで…妙に強気な…佑輔やる！―」

佑輔（酷い…言い草だ…な…けど…ははっ…俺…やれたよ…これで…平和が…くる…誰も…泣かずに…済む…）

フェイト「そんな！佑輔が死んだら…みんな…悲しむんだよ！エリオも…キャロも…私たちも！だからお願い！気をしっかり持って！―」

なのは「そうだよ！これからでしょ！―せっかく…せっかく終わらせたのに！どうして！―」

なのは…「ハイ―」  
佑輔

目を閉じかけたがはやてに一喝される。

はやて「目を閉じたらアカン！―死んだらいやや！―！お願い！死ななというて！―生きて！―お願いやから…ウチのために…生きてええ！―！―」

はやては泣きながら佑輔に懇願した…

佑輔（はやて…ごめんな…俺は…結局…答えを…）

はやて「佑輔が死んだら…ウチ…ウチ…」

佑輔<sup>はやて…</sup>

はやて「一体誰を女装させたらええんや！…！！」

ええんや…ええんや…えんや…んや…（エコー（笑））

佑輔（……はい…？）

はやて「ウチの生き甲斐がなくなるやろ！」

ポポポポポポポポポポ…

??「どんな展開だあああああ！?」……………あ  
れ…夢…?」

目を覚ましたら、自分の部屋であり…なにか鳴っていた…

ポポポポポポポポポポ…

??「まったく…なんか変な夢見たな……………なんだっけ…?とつても大切なようで…なんかとんでもないオチがついたような…」

ピピピピピピピ!

??「あゝもう!うるさいなあ!」

鳴っていたのは通信だった…名前がでている…『八神はやて』と…さすがに放置はやばいので出る事にした…しかし…それが災いのもとだとは知るよしもなかった…

ピ!

はやて『あ、やっと出たな!もう遅い……………で……………』

??「……………?」

はやては画面に出た人物を見て固まった…何故か佑輔の部屋にサラサラした黒髪ロングヘアの美人なお姉さん(?)がいたからだ…しかも…薄着だ…言うなれば…俗にいう裸丫シャツのような姿だ…(もちろんズボンははいてますよ(笑))

はやて『……………ゆ…』

??「ゆ?」

はやて『佑輔が女を連れ込んでるううう……………!?!?』

??「……………え…?(汗)」

[illegible]

はやての声に呼応するかのように皆が皆叫んだ！そして……

**T**

「え？え？」

チュドーン！！

「ああああ！！！」

佑輔の部屋のドアが破壊された…。のちに出てくるであろう…。白い悪魔の手によって…。

なのは「**佐輔**」  
~~~~~  
「!!!!!!」

なのはを筆頭に皆乗り込んできた。または野次馬も来たのだ。

「え……え……？」

「??は固まっていた…なにが起こっている? 何故みんなここに来た? と…」

フェイト「佑輔は……いないね……」

スバル「もしかして逃げたのかな？」

ティアナ「なににせよ……隊舎に女を連れ込むなんて……最低ね……殺す……」

エリオ「え〜と…？（連れ込んで…なんだろう？」

キャロ「一体誰なんだろう？」

と…次々になにか言ってる面々…

ヴァイス「しっかし…美人だなあ…旦那もやるなあ…」

シグナム「うむ…確かに…女の私から見ても美人だと思う…」

シャマル「いつかはやるかとは思いましたが…なんか面白くなってきたわね」

??「……………あ…あの……………（汗）」

はやて「こらああああ！！！！」

ガシ！！！！

??「あみゅ！！！！」

はやては??の胸ぐらを掴んできた…それはまるで…鬼だった…

はやて「佑輔は一体どこや！！！！どこに隠したんや！！（怒）」

リン?「そうです！！！！隠すとタメになりませんよ！！（怒）」

ティアナ「答えればよし…さもなくば…」

フェイト「正直に答えてもらいましょうか……」

あの優しいフェイトですら……怒っていた……笑顔だからなお怖い……
そして……

「なのは「まあ……お話」はしなきゃね……お話」は……」

白い悪魔も本領発揮な勢いだっただけ……

「……お前なあ……」

「はやて……へ？」

スバル「い…今の声…まさか…」

「いい加減にしろおおおお！！！！！！（怒）」

佑輔が大声をあげた瞬間みんな固まった……

なのは「……え……と……ゆ……佑輔……なの？（汗）」

佑輔（美人モード）「そうだよ！」

六課全員 「う ええええええええええ！！！！！」

本日二度目の叫びだった……

ヴィータ「お……女だったのか……？」

佑輔（美人モード）「んなわけねえだろ！！！！れっきとした男じ

やああああ！……！モツコリもあるわい……！」

エリオ「モツコリ？」

キャロ「モツコリ……て……なんだろう？」

シグナム「お前たちは気にするな……気にしたら負けだ……」

スバル「で……でも……」

ティアナ「うん……」

リン？「女性にしか……見えないです……」

佑輔（美人モード）「見えちゃ駄目だからね！俺泣くぞ……！」

ヴァイス「しかし旦那……いつものボサボサヘア……は……？」

佑輔（美人モード）「あれはわざとやってたんだよ……寝起きたとこ……
れだからな……いつもはセットしてたんだよ……ったく……」

なのは「そ……そうだったんだ……（汗）」

はやて「しかし……あれやな……」

はやては佑輔を見るなり……複雑な顔をして……

はやて「なんか……女として負けた気分や……（泣）」

なのは「うん……」

フェイト「そう…だね…」

女性陣はショックを受けて…落ち込んだ…

佑輔（美人モード）「おゝい…負けるな…ちゃんと勝ってるからね、その胸にちゃんと女性の象徴たるメロンが二つついてるからね…俺にはないぞ…」

なのは「……………どうしてそう…堂々とセクハラ発言できるかな…／／／／／」

なのはたちは胸を隠すようにして顔を真っ赤にした。

佑輔「健全な男って証拠だろうが。」

フェイト「いや…あまり威張られると困るんだけど…／／／／／」

ティアナ「どっちにしろ犯罪でしょうが…」

ティアナがそう言ったら佑輔は反発しだした…

佑輔（美人モード）「なにい！！！！誰が犯罪だ！じゃあお前比べてみる！いいか犯罪ってのはな！」

ティアナ「な…なによ…？」

佑輔（美人モード）「例えば俺がだな！」

そう言ってキャラの前に来て…

佑輔（美人モード）「エリオ…俺の生涯の伴侶になってくれ…」

エリオ「んなああああ！！？」

佑輔「どうですか！！みなさん！こんな俺がさっきよりマシだと思えますか！！それともヴァイスを口説いたほうがいいのか！！」

ヴァイス「いい！？そ…それは…勘弁してくれ旦那……（泣）」

ヴァイスは涙を流しながら懇願した…当然ではある…しかし…

シャル「私的には…アリかも…」

ピシ！

その瞬間…空気が固まった……

佑輔（美人モード）「強制排除」

そう言っ指をパチンと鳴らすと…

ラッセ、ラッセ、ラッセ！！

シャル「え！なんですか！！なんなんですか！？ちよつと！この筋肉マッチョの方々は！ああああ！！いやああ！離してええ！！！！？？？（泣）」

ラッセ、ラッセ、ラッセ、ラッセ、久しぶりの お客様　ラッセ、ラッセ、ラッセ、ラッセ！

シャルはどこからか現れた筋肉マッチョのお兄さん達にどこか連れて行かれた…

ヴィータ「さよなら…シャル…」

シグナム「お前の生きざま…三秒で忘れよう…」

エリオ「えええ！！いいんですかあ！？」

ヴィータ「時には辛い別れもある…しかし…我々はそれを乗り越えなければならぬんだ…」

エリオ「いやいやいやいや！！これは乗り越える所ではありませんよ！！」

佑輔（美人モード）「で…ご理解いただけましたか？」

フェイト「え…と…まあ…ね…」

なのは「そ…そだね…」

スバル「まあ…なんというか…ね…」

シグナム「うむ…どちらにしろ危険な男だということはわかった。」

佑輔（美人モード）「あるえええ！？そんな理解のされ方！！！」

ティアナ「いや…当たり前でしょ…」

ティアナは呆れながら言った…

佑輔（美人モード）「……………まあいいや…とにかく着替えるから出ていってくれ…」

ヴァイス「おっと…こりゃ失礼…」

と言ってヴァイスと他男性陣は出ていった…

佑輔（美人モード）「……………おい…」

なのは「ん？なにかな？」

佑輔（美人モード）「なにかな？…………じゃねえよ！！女性陣が主に出ていかなきゃ駄目だろ！？」

フェイト「はっ！？そうだった…見た目が見た目だから…つい…（汗）」

佑輔（美人モード）「本気で泣くぞ…」

はやて「ちょいまち！！！」

佑輔（美人モード）「な…なんだよ…」

はやて「じいいいい…」

はやては佑輔をじっと見つめながら考えていた…

はやて（……………うん……………使える…）

はやてはなにか思いついたようだ。

はやて「よし！佑輔、ちょっと付き合ってもらおうで！シャーリーも手伝ってえな！」

グイ！

そう言つて佑輔を掴み連れて行つた。

シャーリー「え！……なるほど 了解」

佑輔（美人モード）「な！なに！なにすんだ！？うわああー！」

スバル「え…と…」

フェイト「なににする気…なのかな…？」

なのは「さあ…？」

その場に取り残されたなのは達だつた…一方その頃…

ラッセーラ！ラッセーラ！ラッセーラ！

シャル「あわわわわ…なんなんですか！？」

シャマルは筋肉マッチョなお兄さん達に囲まれていた…まるでなにかの儀式のように…そして…段々と近づいて…

シャマル「え…え…い…いやああああ！！！！（泣）」

これ以上は作者からはちょっと…頑張れシャマル！！…きっと未来は絶望だ！！負けるなシャマル！生き残れシャマル！！…

シャマル「なにをどう頑張ればいいんですかああああ！！！！（泣）」

そして…今日の任務…ホテル・アグスタの警護任務のためヘリで移動していた…

なのは「それじゃ…私達は中の警備に回るから前線のみんなは副隊長たちの指示に従ってね。」

キャロ「あの…シャマル先生…二つ気になるんですが…顔色が…というか…なにか赤くなってますか？」

シャマル「……………筋肉って…いいわよね…／／／」

キャロ「え！？」

シャマル「ああいや！？なんでもないわよ！！で…もう一つは？」

全員（……………一体シャマル先生になにがあったの！？）

キャロ「えつと…その四つの箱は？」

シャル「ああ…これはね…隊長達と…佑輔君の仕事着」

ピク！

佑輔はその言葉に反応した……

はやて「あと佑輔もウチらと一緒に中で警備やからな」

ピクピク！

フェイト「え？そうなの？」

ティアナ「佑輔？」

フェイトとなのはは不思議だと思った。その時！

ガチャ！！

佑輔「お家帰る〜〜〜〜！！」（泣）

なのは「うわあああ！！！！なにしてんの〜〜！！！！」

ヘリのドアを開いて佑輔が飛び出そうとしたがなのはとはやてに体を捕まえられた。

佑輔「やだやだ！！！！あんなもん着るくらいなら街中でピエロになったほうがマシだああ〜〜！！！！」（泣）

はやて「あほう！！武士道とは死ぬことと見つけえや！！！」

佑輔「いやだいやだ！！！！そんな武士道なんか知るかああ！！！！（泣）」

どこかで見たやり取りを見ながらみんな不思議な顔をしていた。

スバル「あの、佑輔はなにを騒いで…？」

シャル「んゝそんなにこの正装がいやなのかしら？」

ティアナ「正装って……アンタね…正装ぐらいで…」

佑輔「簡単に言うなあああ！！！！！！（泣）」

佑輔の叫びも虚しくへりはアグスタへと向かって行った…ここで少し時間を戻そう…なぜ佑輔が正装を嫌がるのか…まあ…大抵ここまですんで頂いた読者様たちは想像がつくでしょう。それは…佑輔が連れられて行かれたはやての部屋での出来事…

はやての部屋

はやて「ええつと…確かこのへんに…」

佑輔（美人モード）「おゝい…なにしてたよ…そろそろミーティングだろ？」

佑輔とシャーリーを待たせながらはやてはクローゼットの中をあさっていた…そして…

はやて「見つけたあ！！ジャーン！」

佑輔「……………」？」

シャーリー「メイド服ですね」

佑輔（美人モード）「それが…どうした？」

はやて「これ着てみて」

佑輔（美人モード）「……………」は？」

はやて「だから、これ着てみて」

佑輔（美人モード）「……………」

はやて「……………」

シャーリー「……………」

三人はしばらく沈黙した…そして…

ダッ！！

佑輔は逃げ出した！！

シャーリー「逃がすか！！」

ガシ！！
ブブー！

しかし！シャーリーからは逃げられない！

佑輔（美人モード）「いやだああああ！！！！！！離せ！！！！」

はやて「そんなに嫌なん？」

佑輔（美人モード）「当たり前じゃ！！なに考えてんだ！！遊んでる場合じゃないだろうが！！」

はやて「もちろん遊びじゃあらへんよ。」

はやてが真面目な顔で答えた。

佑輔（美人モード）「な…なんでえ…いきなり真面目な顔して…」

シャーリー「佑輔、今日の任務は知ってるよね？」

佑輔（美人モード）「確か…ホテル・アグスタでの警護任務だったな。」

はやて「せや。だから佑輔にはホテル内での警備に当たって欲しいんや、ウチらと一緒にな。」

佑輔（美人モード）「ホテル内に入るのは構わんが…理由がないぞ？なんで俺まで中の警備を？」

佑輔は至極もつともな質問をした。何故ならホテル内の任務は隊長達がつくはず…ならば自分は外でも問題はないはずだ…

はやて「せやな。理由は二つある。まずは佑輔に会わせたい人物がある。」

佑輔（美人モード）「会わせたい人物？」

はやて「うん。佑輔のクリスタルや力を調べてくれる人が今日来るんや。それから女装にも理由があつてな。シャーリー、あのデータ見れる？」

シャーリー「はい。出しますね。」

そう言つて、シャーリーはモニターにある男のデータを見せた。

佑輔（美人モード）「誰だい？」

はやて「ジェイル・スカリエッティ…指名手配中の犯罪者や。この科学者が今回の事件に絡んでる可能性がある、そして…この男はな、簡単に言つと違法な人体実験を繰り返してるっちゆうことや。」

佑輔（美人モード）「人体実験…か…ようは…命を持てあそぶ危ないやつ…か…」

シャーリー「うん。それで今フェイトさんがそいつを捜査してるの…」

はやて「で…厄介な事にこいつが興味を持ってるのは変わった力を持つ者を捕らえて人体実験するってこと。つまり…もうここまで言

えはわかるやろ？」

佑輔（美人モード）「まさか…俺まで狙われるって事か？」

はやて「まあ可能性やけどな。だから正直、今の佑輔に実力はあまりあらへん。だから今回はウチらと一緒にあつてもらうんや。女装はまあ、隠れ蓑やな。」

佑輔（美人モード）「まあ…筋は通ってるな…けど…楽しんでねるか？」

佑輔がジト目で二人を見ると…

シャーリー「……………」

はやて「……………」

二人とも目を反らした。

佑輔（美人モード）「あのなあ…帰っていいか？」

はやて「……………着てくれへんの？ウルウル…」

シャーリー「佑輔って…冷たいですね…ウルウル」

佑輔（美人モード）「……………泣くほど着て欲しいのかよ…つか泣きたいのはこっちだよ…」

はやて「……………いくじなし…ボソッ」

シャーリー「……………根性なし…ボソッ」

二人がそう呟いた瞬間…単純な男…佑輔に火をつけた…

佑輔（美人モード）「なんだと〜〜！！！！やってやるわい！着てやるわい！！貸せ！！」

はやて・シャーリー「やった〜」

佑輔（美人モード）「……………どうやって着るんだ…これ…？」

ズコー！！

二人はコケた…そして着るのを手伝う事にした…そして…

佑輔メイドモード「……………／／／／／／／／／（泣）」

シャーリー「こ…これは…」

はやて「に…似合い…すぎやろ…」

二人は絶句した…まさかここまでとは…化粧もしたとはいえ、これで胸があれば完璧というほどに…

佑輔メイドモード「もう脱がさせてくれ…（泣）あと…やっぱり任務は普通の…」

パシャ！！！！

佑輔メイドモード「え…？（汗）」

はやて「ふっふっふ…ばっちり撮らせてもらったで〜！題して東雲 佑子ちゃん」

はやてが密かに用意したカメラで佑輔の写真を撮った。

メイドモード
佑輔「なにしてくれてんのおお！！消せ！今すぐ消せえ！！」

と…はやてに向かって行っただが…

ズル！ボタン！

メイドモード
佑輔「ふげっ！？……………痛い…（泣）」

スカートの裾を踏んでコケた…

シャーリー「しかもドジッ娘ですか…」

はやて「さあ、これでもう逃げられへんよ」

メイドモード
佑輔「最悪だああああ！！（泣）」

そして現在、ホテルの更衣室に至る…佑輔は対峙していた……………そう…目の前にある……………黄色のドレスと……………

佑輔「……………よし…逃げよう！」

そう言つて窓から逃げ出そうとしたが…

ガチャ

はやて「佑輔く？お着替えの時間や…あ！逃がすか！！！」

ガシ！！

ドレスに身を包んだはやてが現れた…

佑輔「やっぱり嫌だああ！！！」

こうして、佑輔の大改造が終わつた……そして……

なのは「あれ？はやてちゃん、その綺麗な人だれ？」

ピク！

はやて「フッフッフ、それはな。」

ドレスモード
佑輔「……………俺だ…（泣）」

なのは「……………うわああああ！！！！ゆゆゆゆ…佑すむぐぐ！！！」

はやて「おつとなのはちゃん　ここでは東雲　佑子ちゃんや」

なのは「コクコク……」

はやてに口を押さえられながらなのは首を縦に振つた。

ドレスモード
佑輔「

………いつそ殺してくれ………（泣）」

こうしてホテルアグスタの警備が始まった…頑張れ東雲 佑子！負けるな東雲 佑子！！きつと明日はヒロインだ！！

ドレスモード
佑子「

なりたくねええええ！！！！！！（泣）」

次回に続く！

番外編！リリカルメンバーにこのシーンを！！！！Gガンダム編！（前書き）

佑輔「ええ…キャラが壊れます…間違いなく壊れます…なので嫌な方は見ないほうがよろしいかと…」

ティアナ・なのは・ギンガ「……………（泣）」

佑輔「一番哀れだよな…」

番外編！リリカルメンバーにこのシーンを！！Gガンダム編！

なのは「……………ほんとにやるの？（泣）」

佑輔「やる。」

はやて「ええやん。面白そうやん」

なのは「うええん！私あんな濃いおさげのおじいちゃんじゃないも
くん！（泣）」

ヴィータ「いや、あんなデタラメな強さや部下への厳しさはそっくり
だと思う。」

佑輔「だよな？」

フェイト（ちよつとだけ同情するよ…なのは…）

ティアナ「スバル、アンタ主人公だからしっかりしなさいよ？」

スバル「うん！」

佑輔「では始めてみよう！！ガンダムファイトオ！！レディー
！！！！」

リン？・エリオ・キャロ「ゴ」

第39話 石破天驚拳！決闘マスター・アジアより…

ネオ香港……地球上でもっとも繁栄している街……しかし……その裏は未だ廃墟となつてゐる街がある……スバル・ナカジマ……そして師匠である高町なのは……二人は敵対関係にあるが……デビルガンダムに襲われ……廃墟の地下に落ちてしまった……二人はひとまず休戦し……脱出することにした……

なのは「はああああ……!!」

道を塞がれたが……なのはは魔力を込めだした……

なのは「覚えてる？ スバル……以前にもこんな事があつた……そう……そしてあの時も……この流派・高町なのは、最終奥義を放つたはず……その名は……スターライト！ ブレイカアア……!!」

ドゴォ……!!

スバル「こ……これは!？」

なのは打ち出した魔力砲で塞いでいた壁を突き破つた……

スバル「覚えている……覚えています……あの時も同じだった……私は……この人に助けられたんだ……」

スバル（修行の旅の途中……師匠とはぐれてしまった私は……狼の大量に囲まれた……）

グルルルル……ワンワンワンン！！！！

スバル（襲わそうになった時……私は狼に恐怖し……なにもできなかった……）

スバル『キャアアアア！！！！』

ゴォォ……ドゴォン！！！！

キャイン！キャインキャイン！！

スバルに襲いかかった狼達は突如放たれた魔力砲で吹き飛ばされた……

スタ！！！！

スバル『師匠！！』

なのは『おバカ！！魔導士たる者！一時たりとも気を抜くんじゃないの！！でなければ……このスターライトブレイカー……習得することなど……夢のまた夢ええええ！！！！！！』

そう言うてなのはレイジングハートを天に突き上げた……

スバル『師匠……』

なのは「ついにこの魔法だけはスバルに伝えられなかった……スバル

はあの頃からまるで変わってないよ…目先の事に捕われ…すぐに心を乱し、大切な事を見失う…」

スバル「……………」

スバルは言い返せなかった……

なのは「無駄話がすぎたね…行く……う……」

なのはは歩いこうとしたが片膝をついてしまった…そしてもう一度起きあがるがまたよろめいた…

スバル「あ…！」

ガシ…！

スバルはなのはの体を支えた…

なのは「ご…ごめんね…」

スバル「無駄口を効いてる暇はないんでしょ…行くよ。」

体を支えながら二人は歩き出した…

なのは「……………よく見ておきなさい…スバル…ネオ香港…地球上で最大の繁栄に沸く街…そのもう一つの顔がこれよ……………地球上…どこもかしこも破滅は確実に迫っている…しかし人々はその事から目を背け…知ろつともせず…デバイスファイトに浮かれています…人間とはつくづく救い難い生物とは思われないかな…？人間なんて…最早この地球には無用の存在…だからこそ…だからこそ、この私は…」

スバル「……………ん？」

二人が進む先はまた道が塞がれていた…廃墟と化したビルが地面を突き抜けていたのだ…

スバル「ええい！また！？」

なのは「スバル…力を貸して…」

スバル「え…？」

なのは「私にはもう、スターライトブレイカーを撃つ力は残ってないの……………ん！？」

ゴゴゴゴ…！

二人の後ろから水が迫ってきた…

なのは「時間がない！！急いで！一気に突き破るよ！！」

スバルは頷き…二人は構えた…

スバル・なのは「ハアアアア……………てりゃあああああああ
ああ！！！！」

ドゴオオオオオオ！！！！！！！！！！

二人はビルを突き破り…地上にでた…

スタ！スタ！！

なのは「う…く…」

スバル「大丈夫！？」

なのは「どうやら…命拾いしたようだね…でもまだ気を抜いたらだめだよ…」

グオオオ！！！！

地面からデビルガンダムの一部…ガンダムヘッドが現れた！

スバル「先回りしていたのか！！セツトアアアップ！！！」

パチン！！

スバルが指を鳴らすと変身した！！！！

クエエエ！！！！！！

その時、廃墟の奥から黒チヨコボが走って来た。

はやて「って…ちょいまち…なんで黒チヨコボ？」

佑輔「一応この小説はFFもあるから…だろ？」

はやて「なんか…納得いかへんなあ…」

なのは「来たね、黒チヨコボ！私の足となって戦って！！」

黒チヨコボ「クエエエ！！！」

ウイングロードでガンダムヘッドの攻撃を避けていくスバル、そこへなのはが鬼神の如く突っ込んでいく。

なのは「ハイヤアアア！！！」

ピシュン！！！！ズガアアアン！！！！

すれ違いざまに魔力弾を打ち込みガンダムヘッドの一体を撃破した！

スバル「お見事！」

なのは「気を抜いちゃダメ！！！」

ピシュン！ピシュンピシュン！

なのは「スバル！行っただよ！！！」

三体のガンダムヘッドがスバルに向かって行った。

スバル「なっ！？このお！！！」

バキィ！ズカア！！ドゴォ！！！！

スバル「うああああ！」

スバルはガンダムヘッドに突き飛ばされた…そこへなのはから通信が入った…

なのは「スバル！スターライトブレイカー、今こそ撃ってみせなさい！！！」

スバル「く！！！」

スバルはウイングロードでガンダムヘッドから間合いをとり…魔力を込めたした…

スバル「ハアアアアア……………流派…高町なのは…………！」

キィィィィン！

スバルの目が戦闘機人モードになった…

スバル「最終奥義いい！！！！スターライトォ！！！！ブレイカアアアアアア！！！！！！！」

ドゴォォォォォン！！！！！！

スバル「……で……できた……」

スバルは見事、最終奥義を撃ち……ガンダムヘッドを撃破した……

なのは「スバル……」

スバルが後ろを向くとなのはがいた……

なのは「流派・高町なのは……最終奥義スターライトブレイカー……確かに伝授したよ。」

スバル「師匠……」

なのは「その魔法ならシュバルツとの戦いにも遅れはとらないよ……」

スバル「待ってください……！私はまだ師匠に聞きたいことが……！」

なのは「いい？この廃墟と化した街を……人類の黄昏の光景を……その胸に刻んでおきなさい！バトルロワイアルで会いましょう……！」

黒チヨコボ「クエエエ……！」

そう言ってなのはは立ち去った……

スバル「人類の黄昏……師匠……師匠おおおお……！」

佑輔「はあい！カットオー！」

はやて「なんちゅうか…熱いな…」

エリオ「そうですね…」

ヴィータ「つか、流派高町なのはって…まんまじゃん…」

フェイト「ところでなのは？回想シーンなんだけど…おバカ！じゃなくて、馬鹿者お！…じゃないの？」

なのは「うう…それは…勘弁してよ…」（泣）…ただでさえ…夢のまた夢え…できついんだから…」（泣）」

佑輔「なんかおバカって…ぐりぐりとゲンコツの強い、とある幼稚園児のお母さんを連想させるな…」

キヤロ「誰ですか？それ。」

佑輔「いや…気にするな…」

スバル「ところで佑輔？私アレが言いたいんだけど？」

佑輔「なんだ？」

スバル「ほら、俺のこの手が…ってやつ」

佑輔「言いたいのか…（汗）じゃあ…仕方ない…ギンガ！」

ビクウ！！

ギンガ「……………やっぱり…私？」

佑輔「YES！」

ギンガ「いやああ！！マスクなんていやああ！（泣）私だって
そんな濃いキャラじゃありません！（泣）」

なのは「ギンガ…こうなったら諦めよう…ね…」

ギンガ「嫌です！（泣）」

第40話 非情のデスマッチ！シュバルツ最終決戦 より…

スバルが宣言したデバイスファイト全勝も残り一試合…それは第2
の師匠でもあるシュバルツ・ブルーダー（正体はギンガ（笑））と
の対戦……その試合方法は完全決着の时限爆弾のデスマッチ！しか

し、スバルのデバイスが不備を起こし、必殺技のリボルバー・フィ
ンガーが撃てず…ピンチになっていた…しかも！パートナーである
ティアナと喧嘩してしまい…ティアナはシュバルツのパートナーと
なっていた…

ティアナ「ちよつとまった！！」

佑輔「なんだ？」

ティアナ「あのさ…そのまま行くと、私、スバルの恋人？」

佑輔「……………」

さあ！続けて行ってみようかあ！！」

ティアナ「こらああああ！！！！！！！」

ギンガ「この程度の力では、私を倒す事はおろか、デビルガンダム
打倒など、無理の一言おお！！！！！」

バキィ！！！！

スバル「うあああ！！！」

ギンガ「そおれ！それぞれ！！！」

ドゴォ！バキィ！

佑輔「なんだかんだで…ギンガ…ノリノリだな…（汗）」

フェイト「それにどことなく楽しそうだね…（汗）」

ギンガ「どう？スバル。所詮アナター人では私には勝てないとわかったかしら？ならば！！あそこにいるティアナに助けを求めたらどう！？」

そう言って指をさした先にはギンガと同じマスクを被ったティアナがいた（笑）。

スバル「い……いやだ……！あんなやつに……誰が頼む……もんかああ……！」

ギンガ「ならば……！ここらで引導を渡してくれるわあああああ……！……！」

そう言つてギンガは構えたまま体を高速回転しだした。

ザフィーラ「いかん！あれは……！」

エリオ「僕達もくらつた……！」

『シュバルツの必殺技……！』

ギンガ「シュツルム！ウント！ドリンク……！！！！……！」（目が回る……！！！！……！！！！（泣））

シャーリー（実況）「さあ……！いよいよトドメに入るか、シュバルツ・ブルーダー……！！……！」

ギンガ「そのとお……り……！！！！……」（こつなつたらヤケよ……！！！！（泣）スバル！覚悟……！！！！）

ドガア！ドガアドガアドガア……！！

ギンガは高速回転のままスバルに連続で体当たりをした！

ティアナ「スバル……？」

ドシャア……！！

そのままスバルは倒れてしまった……そしてギンガも回転を止め……
スバルを見下ろした……

スバル「く……ああ……やっぱり……私一人の力じゃ……シユバルツには……
勝てない……の……？」

ギンガ「ふ……情けないわね……やはりアナタはあの頃から変わっちゃ
いない……」

スバル「な……にい……！」

ギンガ「変わっちゃいないのよ……！あの頃と！あの頃と！あの頃と……
！あの頃とおおお……！」

佑輔「………ある意味……ギンガは当たりだな……うん……」

はやて「静かに……！回想に入るんやから……」

そこは吊り橋の高いところをギンガがスバルを背負って渡っていた……

スバル（幼少）『怖いよお！怖いよお！ギン姉……！』

ギンガ（少女）『ふふ、泣かないの、スバル。』

スバル『だって高いんだもん!』

ギンガ『バカねえ。高いと思うから怖いのよ。いい?足元だけに気をとられちゃダメ。アナタは一人じゃない…お姉ちゃんを信じて、もつと遠くを見て。ほら、お父さんもお母さんも待つてるよ…。』

スバル『でも、ギン姉!』

スバル(?!?貴方は…まさか…!)

ギンガ(教えたはずよ!!人を信じる心があれば恐れるものはない!……そして…聞こえるでしょう…アナタを応援する…友の声が…)

スバル(……声?)

ヴァイス「スバル……!!」

ヴェロツサ「立ってください!スバル!」

エリオ「どうしたの姉貴!!」

ザフィーラ「さあ!立て!スバル!」

『スバル!スバル・ナカジマ!!』

スバル(そうだ…私にはみんながいる!そして…誰よりも!)

ティアナ(幼少)『スバル……、こっち向いて』

パシャ！！

スバル（幼少）『うわ！』

ティアナがスバル達家族を…カメラに収めた時があった…

スバル（ティアがいる！！）

ティアナ「スバル……！！！」

ティアナがマスクをとってスバルに叫んだ！

ティアナ「聞こえていたら私の言う通りにして！ショートした回路を捨ててバイパスの……バイパスの………なん
だっけ……？（汗）」

ズコオ！！！！

リン？（ACSですよ！ティアナ！）

ティアナ（あ…そっか…ゴメンゴメン…）

佑輔「TAKE2うう………！！！！」（泣）

ティアナ「ショートした回路を捨てて、バイパスのACCSを入れるの……そうすれば動くはずよ……！」

スバル「テ……ティア……！」

ティアナ「私……バカだったわ……私は魔導士じゃないから……魔法と魔法でわかりあうことなんてできない……だから……私だけ置いてけぼりのような気がして……でも今は……サポートしかできない私でいい……だって……気付いたら……ずっとアナタだけを見ていたから……！」

スバル「ティア……！」

佑輔「っしやあああ百合ツプルができたあああ……！」

ゴシヤアアア……！」

佑輔「アンドレ……？」

なのは「ちょっと黙ってようね……（怒）」

カリム「回路が回復していきます!!」

レジラス「おお!」

グレアム「ティアナ……お前はそんなに……スバル君の事を……」

はやて「なんや……さつきから……色んな人が出とるような……(汗)」

キャロ「……最早カオス……ですね……(汗)」

BGM：明鏡止水〜されど拳は烈火の如く〜

スバル「ハアアアア……はああ!!」

スバルのデバイスが回復し……立ち上がった!!

スカリエツィ「ふ……だがもう時間はない!!」

なのは「さあ……ここが正念場だよ……スバル………っ
てえ!!……なんで貴方ここにいるの!!……しかも私と同じチーム

！？」

スカリエツティ「そりゃ番外編だからさ。いわばカオスご免だよ？」

なのは「納得いかないの…（怒）」

ギンガ「スバル…よく立ち上がったわ！」

スバル「今こそ私の本当の戦いがわかった！！！」

ギンガ「なら心して受け止めてみせよう！貴方達の愛の力を！」

リン？「愛ときましたか…（汗）」

そしてまたギンガは高速回転しだした！

シャーリー「さあ！いよいよ二人の最後の一撃となるか！！！！生き残るのは…シユバルツ・ブルーダーか！それとも！スバル・ナカジマか！！」

グオオオ！！！！

スバルは戦闘機人モードになり魔力を込めだした！！

スバル「いくぞ！！！！流派！高町なのはの名のもとに！！俺のこの手が真つ赤に燃えるう！！！！」

フェイト「俺！？」

ギンガ「勝利を掴めと轟き叫ぶう！！！！」

スバル「今！爆熱するのは…ティアとこの私！！」

ギンガ「勝負！！！！」

スバル「リボルバーフィンガア……！！スターライトオ！！ブレ
イカアアアアア！！！！！」

ギンガ「でやあああああ！！！！！！！」

ギンガはスバルに突っ込んでいき……そして……時間がきた！！！！！！

ドゴォン！！！！！！！！！！

リングが爆発した！！！！

ティアナ「スバル~~~~~！！！！！」

そして出てきたのは……

シュバ！！！！

ウイングロードを走るスバルだった！！

ティアナ「……よかった……」

ギンガ「……み……見事よ……スバル……貴方はもう……一人じゃ……な……
……あく……」

ドサ！！

スター!!

スバル「シュバルツ!!!」

ティアナ「スバル!!!」

ティアナがスバルに向かって走り出した…そして…

スバル「ティア!」

ガシ!!

スバルはしっかりと受け止めた…

スバル「ありがとう…ティアが助けてくれなかったら…私は負けていたよ…」

ティアナ「うん…でも…一番見守っていたのは…」

スバル「そうだ…シュバルツ!!!」

スバルが向かっていったら…すでに救護班に救助されていた…

シャル「そのマスクはとっておいて!」

バツ!!!

マスクをとったその顔は二人のよく知る人物…それは…

スバル「ギン姉…やっぱり!ギン姉!!!」

ギンガ「スバル……よく……やったわね……」

スバル「ギン姉……！」

ギンガ「だけど……気をつけなさい……あの島に……気をつけ………うく………！！」

そのままギンガは気を失った……

スバル「ギン姉……ギン姉えええ……！！」

はやて「はあい！カット！！！！……おつかれさんや」

スバル「楽しかったああ」

ティアナ「………なんで私が………」

ギンガ「同感……（泣）」

なのは「私たち……あまりいい役じゃないよね……（泣）」

レジラス「しかし……ワシまで出るとはの……」

カリム「ホントですね」

グレアム「いやいや…長生きはするもんですなあ…」

フェイト「本当に皆さんお疲れ様です。」

はやて「ヴェロッサはまた次回の本編で会えるんよな」

ヴェロッサ「そうだね。確か…謎の美人に会えるんだよね?」

ビクウ!!

佑輔「……………（泣）」

はやて「なに泣いてんの? ゆ・う・こ・ちゃん」

佑輔「やめれえええ!!!!（泣）」

スバル「それじゃ收拾つけるためにもこの変で幕を閉じましょう
では最後に皆さんで…ガンダムファイトオ」

キャロ「レディー!」

スカリエッティ「ゴオオ!!」

佑輔「……………お前が言っなよ…」

番外編! 終了! !!

番外編！リリカルメンバーにこのシーンを！！！！Gガンダム編！（後書き）

ゴシャアアア！

佑輔「ブラッド！？」

なのは「少しはすつきりしたよ。」

ティアナ「ですね。」

ギンガ「まったく…もう茶番はこりこりです！」

佑輔「ええ…ええ…何故か作者の変わりに俺がやられるんだよ…（泣）いいじゃん…次回まだ俺…女装なんだから…クスン…読まれた方々…どうかご感想を…（泣）」

第十一話…東雲 佑子奮闘記！！覚醒編！

皆さんこんにちは、東雲 佑輔です…この青空の下皆様は如何お過ごしでしょうか…俺ですか？ええ…俺は…俺は…

ドレスモード
佑輔「…しくしくしくしくしく…（泣）」

とある狸娘に女装させられています…現在進行系で（泣）

はやて「もう…いつまでも泣かんの。よしよし。」

なのは（泣かせたのはやてちゃんのせいじゃ…（汗））

ドレスモード
佑輔「これはなんの拷問ですか…誰か教えてください…（泣）」

なのは「だ…大丈夫だよ。佑輔さ…

はやて「佑子ちゃんや。」

佑子ちゃん…（汗）」

ドレスモード
佑輔「なにがどう大丈夫なのか言ってくれや…どこにそんな要素があるんだよ…」

なのは「え！？…え〜と…ド…ドレスが似合ってて…美人だよ…？」

なのはは「どう言えばいいかわからず、苦し紛れに言った…」

ドレスモード
佑輔「……………努力は認めるが誉める処がフォローにすらなっ
てねえよ。」

なのは「にゃ…にゃはは…でもホントによく似合ってるよ？ただ…」

ドレスモード
佑輔「……ただ…なんだよ…」

はやて「あ…なのはちゃんも気付いた？」

なのは「うん。」

ドレスモード
佑輔「だからなんだ？」

なのはとはやては同じ事を思ったようだ…それは…

なのは「言動が男らし過ぎるよ。」

はやて「あと、仕草やな…どこの世界にそんな仁王立ちみたいな立ち方した女性がおるんや？」

ドレスモード
佑輔「無茶言っなよ！？ただでさえこのヒール高くて履きにくい
によ…！…！」

なのは「ちよっ！！大声はマズイよ！」

ドレスモード
佑輔「あ…すまん…でもよ…要は女らしくしろって事だよな？」

はやて「そや。」

その時… 佑輔に声をかける男性が… 見た感じ優しそうなオジサマだ。

男性「おや、その綺麗なお嬢さん方、ご参加されるお方ですかな？」

なのは「はい。」

はやて「お褒め頂き恐縮です。」

二人はきちんと挨拶できたが…

^{ドレスモード}
佑輔「…………… てめえの目はクサレてんのかコノヤロウ。その貧相なモツコリを切り落とすぞ」

男性「…………… へ…？（汗）」

ドス！ドス！

^{ドレスモード}
佑輔「みきゅ！？」

なのは達は即座に佑輔の腹に肘鉄をお見舞いした… 無論見えないように…

男性「あ…あの…？（汗）」

はやて「なんでもありません！幻聴です！！」

なのは「し、失礼します！！」

そう言つて佑輔を引つ張つて言つてしまった…そして離れた場所で
ひそひそと作戦会議を開いていた…

はやて（なにしてんねん！！（怒））

ドレスモード
佑輔（仕方ねえだろ！！いきなり綺麗なお嬢さんとか言われても腹
立つだけじゃ！！（怒））

なのは（まあ…佑輔の言い分が最もなんだけど…（汗）とにかくも
うちよつと女らしくしたほうが…）

はやて（そやで…目の前に見本がいるんやから…）

ドレスモード
佑輔（……………ようはなのはみたいにすればいいのか…）

ギリギリギリギリギリギリギリ！！

ドレスモード
佑輔「アアタタタタ！？（泣）」

はやてが佑輔の背中をつねりだした。

はやて「な・ん・で・ウ・チ・は・入・っ・て・な・い・ね・ん！
（怒）」

ドレスモード
佑輔「なんでつてお前……………人を女装させるわ、胸が小さ
いわで……………なにが参考に……………」

ギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリ！！

ルーテシア「……………誰かが……………見てる……………」

ゼスト「???……………周りには誰もいない……………反応もないが……………」

ドレスモード
佑輔（なんなんだ……………この感覚……………?）

その時……………ルーテシアの頭の中に聞いた事のない声が聞こえた……………

ルーテシア（!?……………念話?違う……………もつと……………感覚的な……………）

ドレスモード
佑輔「!?……………女の子……………?」

佑輔の頭にもルーテシアの声が聞こえた……………

はやて「佑輔?」

なのは「どうしたの?」

ドレスモード
佑輔「……………」

ゼスト「ルーテシア、大丈夫か?」

ルーテシア「……………」

二人とも離れた場所にいたながらもなにか感応していた……………

ドレスモード
佑輔「ルー……………テシア……………」

はやて「佑輔!?!ちよつと、大丈夫なん!?!」

ルーテシア「……ゆうすけ……？」

ゼスト「しっかりしろ、ルーテシア……！」

ルーテシア「！？……え……ゼスト……？」

ゼスト「正気に戻ったか……やはり帰るか……？ここにはお前の探している物はないのだろう？」

ルーテシア「………」

ゼスト「それとも……なにか気になるのか？」

ルーテシアは黙ったまま頷いた……その時、ルーテシアの元に一匹の虫みたいな物が近づいてきた……

ルーテシア「………ドクターの玩具が近づいて来てるって………それにさっきの感覚が……気になるの……」

アグスタ内部……

なのは「佑輔……！しっかり……！」

ドレスモード
佑輔「！？………あれ………なのは……はやて………俺はなに……？」

その時、ガジェットの接近を感知したシャルの現場指揮の元、前線メンバーは防衛、迎撃に出ていた。そしてなのは達と佑輔はホテル内の警備に当たっていた……

ドレスモード

佑輔「さっきの感覚は…なんだったんだ…もしかして…フィン・ファンネルを使っていたせいかな…もしくはこのクリスタルのおかげなのか…ニユータイプに…？」

佑輔が小さなクリスタルを見つめたまま考えていると……

ピキイン！！

佑輔「！？これは！」

キイイイン！

エリオ「キャロ？」

キャロ「誰かが…近くで召喚魔法を使ってる！」

キャロは同じ召喚士として…佑輔は感覚として感じていた…

シャマル「クラールヴィントのセンサーにも反応が…でも、これは…」

シャーリー「……大きい……」

ルーテシアがインジェクトを召喚していたのを感知していた…

ドレスモード

佑輔「ロングアーチ！シャマル先生！！聞こえるか！！俺がその召喚魔法を使っている奴の所に行く！！」

シャル「なんですって！」

ドレスモード
佑輔「今動けるのは俺だけだ！！許可をくれ！」

シャル「で…でも…」

はやて「ええよ！佑輔…頼めるか？」

その時、はやてが通信で許可を出してきた…

シャル「はやてちゃん！？」

はやて「シャル、ええから。佑輔…気になるんやろ？さっきの感覚が…」

ドレスモード
佑輔「ああ…もしかしてそいつかもしれない…」

はやて「わかったよ…ただ…無理はアカンよ。ガジェットが絡んどうるいうことは…」

ドレスモード
佑輔「わかってる…ドジは踏まんさ…幸いこうやって変装してるわけだしな…あ…変身すればバレるのか…」

シャーリー「大丈夫です！ビームライフルとビームサーベルだけです、単体で出せるよう調整しました」

ドレスモード
佑輔「……………いつの間に…（汗）」

シャーリー「ふっふっふ…こんなこともあるのかとってやつです」

ドレスモード
佑輔「お前はどこぞの機動戦艦のメカニックマンか…（汗）でも今回は感謝するぜ！ビームサーベル！ビームライフル！」

シュウウウ！

佑輔は片手ずつ装備した…

シャル「ちよつと待って！」

ドレスモード
佑輔「なんだ？」

シャル「……………その恰好とても似合ってるわよ」

ズコ！

ドレスモード
佑輔「誉められても嬉しくねえよ！？」

シャーリー「これからは女性として生きたらどうですか？」

ドレスモード
佑輔「やかましい！？（怒）」

はやて『こらこら、シャーリーもシャルも佑子ちゃんをいじめんの。今は任務中やで。』

ドレスモード
佑輔「……………最もな事を言ってるみたいだが……………このの発端はお前だからな……………（怒）だいたい…誰が佑子だ…誰が…」

佑子はテンションが下がってきた……………

「！！……ん？」

森を進んでいると移動中のガジェットが見えた……だが……

シューウウー！！

ドレスモード
佑輔「んな！？き……消えた………なんで？」

まるで地面に吸い込まれるかのように消えてしまった……

ドレスモード
佑輔「………考えてても仕方ねえ………」

ピキイン！

ドレスモード
佑輔「よし……こっちか。」

また森の奥に進む事にした。その頃……佑輔の真上の上空をリイン？が召喚士を見つけるため飛んでいた……

リイン？「強力な召喚士……私一人じゃ叩けないにしても……見つけるぐらいなら……あれ？」

リイン？は森の中を走っている女性を見つけた。

リイン？「民間人！？なんでこんなところに！！！」

ギューン！！

リイン？は女性？の元に降りた。

リイン? 「その人! ここは今危ないですよ! ! すぐに退避を! 」

ドレスモード
佑輔「へ? …… んげ! ? 」

リイン? (わ… 綺麗な人ですう… … あれ… ?)

リイン? はどこかで見たような感じがした… … ちなみに佑輔の変装を知っているのは… … なのは、フェイト、はやて、シャマル、シャリー… … だけである… …

ドレスモード
佑輔(… … ななななんでリインが! ? や… … やばい… … こんなんで正体がバレたら… …)

リイン? 「あの… … どこかでお会いしましたか? 」

ドレスモード
佑輔「な… … なんのことがしらあ? (汗) 」

佑輔は声を裏返してごまかそうとした… … が! !

リイン? 「あれ… … それは ガンダムのビームサーベルとビームライフル… … って事は… … ええええええ! ? 佑輔さん! ? 」

ドレスモード
佑輔「うわあ! ! ! しまったあああ! ! ! (泣) 」

装備していた武装でバレた… … とことん抜けている主人公である… …

ドレスモード
佑輔「… … とにかく… … 今は任務だ… … 召喚士を見つけなきゃならんのだ… … 」

リイン? 「佑輔さんも? なら一緒にいきましょー! 」

ドレスモード
佑輔「了解だ。あ、それと前線のみんなには秘密な…後…今のコー
ドネームは…東雲 佑子…だから……」

リイン？「は…はあ…（汗）わかりました！佑子ちゃん！」

ドレスモード
佑輔「お前も…ちゃんづけかい……しくしくしくしくしく……（
泣）」

こうしてリイン？と合流した佑子は召喚士を探す事にした…

そしてしばらく進むと…

ブウウウン…

ドレスモード
佑輔「な…なんだ？この音…？」

リイン？「…さあ……？……なにかきます！？」

周りからインジェクトが向かってきた…

ドレスモード
佑輔「んげ！？虫の団体さんかよ！？…たく……邪魔すんな！！！」

ダンダンダン！！！！！！

佑輔はビームライフルを撃ったが的が小さすぎるせいか当てる事が
できなかった…

ドレスモード
佑輔「ちい！ティアナやなのはみたいにはいかねえか！！！」

接近されてしまいビームサーベルで応戦するが…

ザシュ！！

ドレスモード
佑輔「うぐ！？」

リイン？「佑子ちゃん！きゃああ！！」

ザシュ！！

インジェクトは体当たりし…羽で二人を攻撃してきた！

ザシュ！ザシュ！ザシュ！ザシュ！ザシュ！

ドレスモード
佑輔「リイン！！くっ！！」

ガシ！！

リイン？「え！？佑子ちゃ…きゃ！？」

ガボ！！

佑輔はリイン？を掴み、自分の胸から服の中へリイン？を入れた。

ドレスモード
佑輔「しっかり俺の服を掴んでろよ！！」

リイン？「は…はい！！」

ザシュザシュザシュザシュザシュ！

ドレスモード
佑輔「く！数が多すぎる！」

ビームサーベルを振り回すがなかなか数が減らず…しかもリイン？をかばいながら戦っているため、上手く動けなかった。

シヤマル『佑子ちゃん！リイン！聞こえる！これ以上は進めないわ！一旦下がって、フォワードメンバーと合流して！』

ドレスモード
佑輔「く！ここまで来といて！」

リイン？「佑子ちゃん…悔しいのはわかりましすけど…今は…」

ドレスモード
佑輔「……………任務変更…了解…！リイン！捕まってる！奴らをまいて後退する！」

リイン？「はい…！」

ザッザッザッザッザッザッザッ！！！！

佑輔はインジェクトの攻撃を受けながらリイン？を胸に抱えたまま…その場を離れた……………そして…その途中で…

ドレスモード
佑輔「はあ…はあ…はあ…ま…まいたか…………？」

リイン？「……………みたいです…」

ドレスモード
佑輔「そうか……………う…く…！」

トサ！

佑輔は体の痛みで片膝をついてしまった…

ポタ…ポタ…ポタ…

リイン？「佑子ちゃん！！……腕から血が！？」

ドレスモード
佑輔「だ…大丈夫だ……かすり傷だ……さあ…行こう…」

佑輔が立ち上がるうとしたが…

リイン？「ダメです！！今は治療が先です！治療魔法かけますから座ってください！」

リイン？に一喝されてしまった…

ドレスモード
佑輔「わ…わかった…（汗）」

佑輔は観念して治療を受ける事にした。

キイイイイン…

リイン？「ごめんなさい…私のために…」

リイン？は佑輔に治療魔法を掛けながら謝った…

ドレスモード
佑輔「んう？気にするな…ただ俺がリインを守ろうとしたただけだ…」

リン?「佑子ちゃん…」

ドレスモード
佑輔「でも…結局…リンにも傷を負わせたな…はあ…まだまだ俺
じゃ誰かを守る楯にはなれんかあ…」

リン?「そんな事ありません!!佑子ちゃんは…佑輔さんは立派
な私の…!」

ドレスモード
佑輔「へ?リン?」

リン?「私のナ…トですよ…// // // //」

リン?は小さな声で言った…だが佑輔は聞きとれず…そんなリイ
ン?の乙女心にこの主人公は……

ドレスモード
佑輔(……私のナト?…なんだろ?…ナトリウム?)

まったく気付いてなかった!!!つか気づけ!!!このスカタン!!

ドレスモード
佑輔「お?傷も塞がったな…よし!行くぞリン!」

リン?「へ?あ…はい!!」

こうして二人はアグスタまで戻っていった…

リン?(……いつか…言いますね…私だけのナイトにな
ってください…と……)

ザッザッザッザッザッザッザッザッザッザッ！！！

ドレスモード
佑輔「ここ抜ければ…もうすぐホテル……………！？」

ピキイン！！！！

リイン？「佑す…………佑子ちゃん？」

ドレスモード
佑輔「なんだ…この…嫌な予感……………殺気？…………いや違う…
…………これは…焦りと…不安…………どこだ…………？」

ダンダンダンダンダンダンダンダン！！

ドレスモード
佑輔「この音は！？」

リイン？「佑子ちゃん！！あれを！スバルのウイングロードです！
！」

森から空へと流れるウイングロードを見つけた…

ドレスモード
佑輔「じゃあ…二人が戦ってるのか…よし！リインはシャマル先生
と合流してくれ！俺は二人と合流する！」

リイン？「はいです！！！」

そして二人は別れ… 佑輔はティアナの元に走り出した。

ドレスモード
佑輔「……やはり嫌な予感が消えない…なにが起こる………?」

佑輔は二人に近づいていった…そこでは…

ティアナ「うあああああああ!!!!」

ダンダンダンダンダンダンダンダン!!

ティアナがガジェットを撃ち貫きまくっていた…しかし!

ダン!!!!

一発が外れ…スバルに向かって行った……

スバル「……!?!」

すべてがスローモーションのように思えた……

ドレスモード
佑輔「!?!スバルウウ!!!!」

キイイイン!!!!

その時、小さなクリスタルが輝き…佑輔の瞳が紅く染まった…そして…

ピシュン!!!!

スバル「え……?」

スバルの目の前にさつき見た女性？がいきなり現れた…

佑輔（ドレスモード紅）（南無三！！！）

佑輔がスバルの目の前に一瞬の内に移動し……スバルをかばおうとした………しかし！

バチン！！

佑輔（ドレスモード紅）（~~~~~！！……………あれ………
…痛く…ない？）

恐る恐る目を開こうとした時…

スバル「ヴィータ副隊長！？」

ヴィータ「ティアナ！！このバカ！！！」

ドレスモード
佑輔「んな！？」

いきなり怒鳴り声が聞こえ、びっくりした。ちなみに瞳も元に戻った…どうやらヴィータが防いでくれたみたいだ…

ヴィータ「無茶やった上に味方撃つてどうすんだ！！！」

ティアナ「…あ………ああ………」

ティアナは呆然としていた……

スバル「あ…あの！今のも、コンビネーションの中で…それで…」

ヴィータ「ふざける…タコ…直撃コースだよ！今は！」

スバル「違ってます！！今は私が悪…」

ヴィータ「うるせえ！バカども！」

なにやら言いあいが始まったようだ…

ドレスモード
佑輔「あ…あの…ケンカしてる場合じゃ………」

佑輔は止めようとしたが…

ヴィータ「うるせえ！！！！よそ者は黙ってる！！！！」

ドレスモード
佑輔「は…はいいい！？」

凄い剣幕で怒られた…

ドレスモード
佑輔（俺って………なんか情けなくね………？（泣）………あれ
…よそ者…？もしかして…気付いて…ねえのか…？）

それはそれで佑輔は何故かショックを受けた…

ヴィータ「もういい…お前らまとめて…すっこんでろ！！！！」

そう言つてヴィータは飛んでいってしまった…

ヴィータ「………あれ…そういや…今の女…誰だ…？」

今更ながら疑問に思ったヴィータだった…そして…ガジェットが全部撃破され…とりあえずは危機は去った…

ドレスモード
佑輔「はあ……とりあえず終わったか……ティアナ…大丈夫かな…
…よし…様子見に行くか…」

そうしてティアナの所に向かったが……十分後…

ドヨン………

ドレスモード
佑輔「………（泣）」

暗い空気を浮かべながら帰ってきた………どうやら先程一人で走り去ったスバルと同じく相手にされなかったようだ…

ドレスモード
佑輔「そりゃそうだよな……よその女に話しかけられても相手にし
たくないわな……（泣）………はあ…困ったわね………ん…
…？ってオイイー！！俺ってば段々女に染まってきてませんかあ
あ…！？」

あまりのショックで一人でボケツツコミをしていた…

ドレスモード
佑輔（仕方ない…戻るか…）

ホテル内部に戻り…はやてと合流した………

ドレスモード
佑輔「た…ただいま…戻り…ましたあ…（泣）」

はやて「おかえり」………って…なんで泣いとんの…？（汗）」

ドレスモード
佑輔「いえ…色々ありまして…（泣）」

ヴェロッサ「おや？はやて、こちらのお嬢さんは？」

はやて「え？ああ…この人は東雲 佑す……………にやり…」

はやてはなににか思いついたようだった…

はやて「東雲 佑子ちゃんや」

ドレスモード
佑輔「…え…？」

ヴェロッサ「へえ…はじめまして、ヴェロッサ・アコースです。」

ドレスモード
佑輔「は…はあ…」

佑輔は涙目のまま顔を上げた…………それがはやても予想できなかった失敗だった…

ズキーン！！！！

はやて「なんや？今の音は？…………ヴェロッサ？」

ヴェロッサ「……………」

ヴェロッサはずっと佑輔を見つめ…そして…

ガシ！？

おまけ…『実はこんな裏話がありました…またの名をボツネタと
もう…の巻』

なのは「……………もうちょっと女の子らしくできないの？」

ドレスモード
佑輔「無理だつてば。」

はやて「はあ…これじゃいつかボロがでるなあ…」

三人があれこれと作戦会議？をしていた所に…

フェイト「みんな？なにしてるの？」

フェイトが現れ…事の顛末を話した…

フェイト「なるほど……………うん、私がなんとかするよ。」

はやて「ほんまに？フェイトちゃん。なんか策があるん？」

フェイト「うん。まあ見てて。佑輔、このチェーンにぶら下がって
るバルディッシュを見て。」

ドレスモード
佑輔「ん？なんだ？」

フェイト「あなたは段々女性になる」……あなたは段々女性になる」……」

ズコー！

なのはとはやては盛大にコケた。フェイトはバルディッシュを揺らして催眠術をかけようとしていたからだ。

なのは「フェイトちゃん…（汗）いくらなんでも佑輔がそんなので…（汗）」

カクン…

はやて「へ…？佑輔？」

佑輔はいきなり脱力してしまった…そして顔を上げると、フェイトが質問した…

フェイト「貴方は誰ですか？」

佑子「え？私は東雲 佑子ですよ。」

ガラガラガッシャーン！！

その時！なのはとはやてに衝撃が走ったあああ！！

なのは「う…嘘おおおおお！？」

はやて「ほんまにかかったあああああ!!?」

フェイト「うん。成功したね。」

なのは「いや…成功と言えば…成功だけど……（汗）」

はやて「か…変わりすぎやろ…主にキャラが…（汗）」

佑子「はい？皆さんどうかしましたか？」

はやて「…………（汗）」

フェイト「うゝん…確かにちょっと変わりすぎちゃったかな…?でもこれでこまかしは効くと思うよ。」

三人がヒソヒソと話し合っていたら…

佑子「あの…所で警備は…よろしいんですか？」

ガラガラガッシャーン!!!

その時!!!またもや衝撃が走った!!

なのは「佑輔がまともな事言ってるうゝゝゝ!？」

フェイト「…それは…言い過ぎだよなのは……（汗）」

はやて「っていうか…ほんまに佑輔なんか…これ…?どう考えても別人やないか…ほわほわなお姉ちゃんやで…（汗）」

佑子「あらあら…私は佑輔なんてモツコリバカで低俗な人間じゃありませんよ。いわばあれは私の中の黒歴史…恥すべき過去…そう…私は…佑子として生まれ変わったんです!」

はやて「……………こつちでいいんとちゃう?」

フェイト「うん。そうだね、エリオとキャロの情操教育のためにも佑子のほうが…」

なのは「いや!よくないよ!主人公がオカマなんて聞いた事ないよ!…!二人ともしっかりしてえええ!…!」

佑子「ほらほらなのはちゃん?あんまり叫ぶと可愛い顔が台無しですよ?」

そう言つてなのはの顔に手を当て見つめると…

なのは「あ……………// // //佑子お姉様: // // /」

はやて「はっ!?!アカン!?!この流れはアカン!?!このままやと百合ップルが誕生してまう!?!」

フェイト「体は男だけどね…(汗)」

はやて「言つてる場合か!!!フェイトちゃん元に戻してえ!?!」

フェイト「うゝん…わかったよ…佑子ちゃん。」

佑子「はい?」

フェイトが佑子に近づいて……

フェイト「猫だまし。」

パアアン！！！

ドレスモード
佑輔「ふみゃー！！……あれ……俺なにしてたんだっけ？」

はやて「はあああ……よかったあ……元に戻った……」

フェイト「なのは？大丈夫？」

なのは「ぽく……／／／／」

ドレスモード
佑輔「ん？なのははどうしたんだ？」

はやて「はあ……なのはちゃんもか……（汗）」

ドレスモード
佑輔「おい……なの……むむ！？」

ピピピピ！！！

佑輔はある一点に注目した……

ドレスモード
佑輔「こ……これは……見事な……モツコリ谷間……／／／／／」

なのはの胸元だった……

なのは「……ほえ……？………うきやあああああ……！！！！」

バキィ！！！！！！

ドレスモード
佑輔「ゼータ！？」

ボタン！！！！

なのはのボディーブローが炸裂した！！

はやて「ああ……確かに……恥すべき黒歴史やな……」

フェイト「うん……というより……現在進行系の歴史だよね……」

という流れもありましたが………話しが別方向に向きそうなのでボツになりました！！！！

今度こそ次回に続く！！！！

第十一話…東雲 佑子奮闘記！！覚醒編！（後書き）

佑子「はい、ではボツになった私で閉めたいと思います　それで
は皆様…またお会いできるよう…『ごきげんよう』…」

はやて「……………二度と出んといて…（泣）」

第十二話：人生に迷いはつきもの……けどこの主人公……悩みなんてあるのか？

佑輔「はあ……しつかしまあ……派手にやったもんだなあ……」

佑輔は壊れたガジェットたちの残骸を見ながら呟いた……周りを見ると科学班やら局員たちがあちこちで現場検証をしている……ちなみに……佑輔は元の服だ……（笑）

佑輔「……あの感覚の正体も結局わからず終いだっだし……リンには怪我させちゃったし……凹むなあ……ま……唯一の救いは……女装が前線メンバーにバレなかったって事だが……はあ……ん？」

森の方を見るとティアナが歩いてきた。

スバル「ティアナ……」

ティアナ「スバル……」

佑輔が声をかけるよりも早くスバルが駆け寄っていった……二人が話していると多少ティアナが笑ったが……

佑輔「……ふむ……まだ暗いな……仕方ないな……お……い……」

タッタッタ……

佑輔も駆け寄って行った。

ティアナ「あ……佑輔……」

スバル「佑輔も現場検証？」

佑輔「いんや、俺にやさっぱりわからんからパスだ。」

スバル「パスって…（汗）」

佑輔「それよかティアナ…なあにしんきくせえ顔してやがる ほら、スマイルスマイル」

ティアナ「な…なによ急に…」

佑輔「だってよく調子狂うぜ？ツッコミ役のお前が暗かったらスバルのボケを誰がツッコむよ？」

スバル「私ボケ役なの！？」

ティアナ「……………それ…励ましてるつもり…？」

佑輔「ありや…不評だったかあ……………うゝん…じゃあ人生の先輩からのアドバイスだ」

ティアナ「アドバイス？」

佑輔「お前は一人じゃない。例えば誰かがヘマしてもあの時ヴィータが助けてくれたように、誰かがフォローしてくれる。それが仲間つてもんだろ？お前さんはどこかで焦って一人で背負いすぎなんだよ。もう少し仲間を信じてみな」

ティアナ「……………信じる……………」

佑輔「信じるって事をやめたら…それはただの孤独だ…な」

ポン！

佑輔はティアナの頭に手を乗せて撫でた。

ティアナ「ちょ…やめてよ！／／／／／」

佑輔「わかったって言うまでやめねえ」　ウリウリウリウリウリ
「」

そう言つてティアナの頭をくしゃくしゃと撫でた。

ティアナ「わかったからやめてよ！／／／／／」

そう言つてティアナは佑輔の手を払いのけた。

佑輔「ハッハッハ　そうそう、その位の元気があつた方がティアナらしいぞ」

ティアナ「…セクハラで訴えるわよ…／／／／／」

佑輔「おいおい、ただのスキンシップだぞ？なあスバル？」

スバル「まあ…ね…（汗）」

佑輔「だいたいセクハラってのはな…こうやってモッコリ的に行動する事が…うつへっへ…」

佑輔が手をワキワキさせながらティアナに近づいていくと…

ジャキ!!!

ティアナ「……………ホントにしたら撃つわよ…」

佑輔「……………冗談だからクロスミラーージュをしまってください…
(汗)」

ティアナ「まったく…でも……………ありがと……………」

ティアナは小さく呟いた。

佑輔「ん？なんだって？」

ティアナ「な…なんでもない!!!／／／／／行こ!スバル!」

スバル「あ!ちょ…待ってよ!ティア!」(汗) 佑輔「またあとで
ね〜!」

佑輔「ほいほい ふう…ちつとは元気になってくれたかね…?」

スバル「ところでさ、ティア?」

ティアナ「なに？」

スバル「どうしてあの時、佑輔いなかったのにヴィータ副隊長が助けてくれたって知ってるんだろ？」

ティアナ「そう言えば……なんでだろ？」

二人は疑問に思ったがわからず終いだった……

その頃……

佑輔「……………こりやまた…綺麗に残ったガジェットだな……………動かねえ…よな…？まったくどこから現れてんだろつかね……………このやる。」

ガン！

佑輔は壊れたガジェットを殴った。

ウィイイン…ガシイ！！

佑輔「んなああ！？？？ロボットゾンビの復活ああああ！！！！」

ガジェットが動きだして佑輔に絡みついた！

佑輔「んなろおお！！！！ビームサーベル！！」

ブウン！！ドス！！！！！！！！

佑輔はビームサーベルを装備して突き刺した！

バチバチバチ！キュウウン……

ガジェットは完全に機能を停止して佑輔から離れた…

佑輔「ぜえぜえ！つたく…脅かしやがって……（汗）」

フェイト「佑輔！！今の騒ぎなにかあったの！？」

その時フェイトと見慣れない男性が走って来た。

佑輔「ああ、いや…ちょっとしたアクシデントが………あった
……だけ……」

佑輔は目を丸くして二人を見た…

フェイト「？どしたの？」

ユーノ「??？」

佑輔「……………驚愕の真実！？フェイトの彼氏がああ！？」

佑輔のいきなりの叫びに…

フェイト「え！？／＼／＼／＼」

ユーノ「ちちち違いますよ！？」

佑輔「ふうん……なんだつまらん……せっかく冷やかしてやるうかと思っただのに……」

佑輔はつまらなさそうに落胆した。

フェイト「佑輔……なんか恨みでもあるのかな……？（汗）」

佑輔「そりゃ……人に暗示をかけて女にしやがったからな……」

フェイト「……？？？なんの話し？」

佑輔「あ……そつか……あれはボツネタだったな……すまん……俺の勘違いだ……」

フェイト「……？？？」

インターミッション……！！

フェイト「えっと…こちらはユーノ・スクライアって…無限
書庫の司書長なんだよ。」

ユーノ「はじめまして、佑輔さん。ユーノ・スクライアです。」

佑輔「東雲佑輔だ。佑輔で構わんぞ 固っ 苦しいのは苦手だから
」

ユーノ「じゃあ僕の事もユーノで。」

二人は握手した。

ユーノ（あれ…この人…）

ユーノはじいっと佑輔を見た…

佑輔「？なんだ？………はっ！まさか…！おおお俺はノーマルだ
からな！！決してBLにはならんからな！？」

ユーノ「え！？いやいやいやいや！！！！違いますよ！！！！（汗）
僕だってノーマルです！！！！」

佑輔「勘弁してくれ！！！！俺は女に言い寄られるのはよくても男
にだけは言い寄られたくないんだああ！！！！ああああ〜！！や
めてくれえ！！！！ディナーに誘わないでええ！！！！（マジ泣）」

どうやら佑輔はヴェロッサの件でトラウマになったらしい…（笑）

フェイト「ちよっと！佑輔！落ち着いてー！（汗）」

佑輔「は！？……………俺はなにを…？」

フェイト「はあ…」（女装の時になにかあったのかな…？）

ユーノ「ええと…話し…進めていいかな…？（汗）」

佑輔「あ…ああ…すまん…」

ユーノ「えつとですね…昔、どこかで会った事ありませんか？」

佑輔「？？？いや……………記憶にないな……………会った事…あるっけ？」

フェイト「ユーノ…佑輔に会った事あるの？」

ユーノ「うゝん…昔どっかで見たような気が……………」

佑輔「まあ広い世界、似た顔が三人はいるって聞くし…勘違いじゃね？」

ユーノ「そうですか…すみません、変な質問して。」

ユーノは頭を下げで謝ると…

佑輔「いや…気にすんな」

ユーノ「ありがとう…で…君の力…クリスタルの事なんだけど…」

佑輔「???なんでお前さんがクリスタルの事を?」

佑輔は疑問に思ったが、フェイトとユーノが答えた。

フェイト「はやてから聞いてないかな? 佑輔に会わせたい人物がいるって。」

佑輔「……へ?それって…もしかしてユーノの事だったのか?」

ユーノ「あ…すみません…いきなりで。はやてから頼まれてたんです。」

佑輔「ふん、あんの狸…名前くらい教えとけよなあ……」

ユーノ（狸って…（汗））

フェイト（よっぽど女装の事…根に持ってるんだね…（汗））

二人は苦笑しながら話を進めた…

ユーノ「それで正確な事はまだ…ただわかってるのは、佑輔は管理外世界97番、極東の島国出身って事だけで…」

佑輔「……管理……な…なんだって…?（汗）」

佑輔はユーノが言ってる事がよくわからなかった…

フェイト「つまり、佑輔は私たちが元居た世界と…つまり…地球の

日本で育ったって事。私やなのは、はやてやヴィータ達…守護騎士達も数年前まで居たんだよ。」

佑輔「へえ〜！世間って狭いなあ〜。まあなのははやての名前からして日本人じゃないかとは思ってたが…」

佑輔は感心しながら納得した。

ユーノ「それで引き続き調べてみようと思います。」

佑輔「そつか…すまん、俺の事で迷惑かけちゃって。」

ユーノ「いえ、そんな事は…」

なのは「おい、ユーノ君！フェイトちゃん！」

ユーノが言い終わる前になのはが走ってきた…

フェイト「あ、なのは。」

なのは「あ、佑輔いたんだ。」

なのはついでにみたと言った。

佑輔「おい…なんだその冷たい態度…（泣）」

なのは「だって、人の胸をエッチな目で見る人なんて知らないもん。」

なのははむくれた顔でそっぽむいた…

ユーノ「胸って……（汗）」

フェイト「佑輔……（怒）」

佑輔「ちょ！？待て待て！なんの話した！？」

佑輔は身に覚えがなかった…なぜなら…

なのは「あ…あれはボツネタの中の話しだっけ…」

佑輔「???」

さつきもやったよね…このやりとり…

二度目のインターミッション！！

フェイト「ちょうどよかった。アコース査察官が戻ってこられるまで、ユーノ先生の護衛を頼まれてるんだ。……交代…いいかな？」

なのは「うん 了解」

フエイト「佑輔、現場検証を手伝ってくれるかな？」

佑輔「んな事言われてもやった事ねえからわからんぞ。あ…じゃあ俺が護衛するつてのは…」

佑輔が言い終わる前にフエイトは佑輔のエリを持ち…

フエイト「良いから手伝って」

ズルズルと引つ張って行つた。

佑輔「ちょ！なに！？なんなんだ！こら！引つ張るなああ……………」

……」

そのまま行ってしまった…

ユーノ「なんか…面白い人だね、佑輔つて。」

なのは「うん、みんなにも優しいし…気さくな人って感じかな」

ユーノ「そつか。」

なのは「それにフォワード陣のみんなにも優しいし……お兄さん…みたいな感じかな」

ユーノ「そうなんだ。でも…みんなが彼を慕う気持ちがよくわかるよ。」

なのは「え？」

ユーノ「あの人の過去ははやてから聞いたし、データでも見たけど……凄いなと思うよ。」

なのは「……………」

なのはは黙って聞いていた……

ユーノ「自分と自分の家族があんな目に会ったのに……それでも絶望する事もなく、あんなに明るく、そして誰にでも優しく生きれるなんて……もし僕だったら……とてもできそうにないや……」

なのは「……そうだね……私でも……無理かも……恵まれてるよね……私たち……」

ユーノ「うん……そうだね……」

ユーノ（でも……だからこそ……心が脆くなると………？）

ユーノが考え事をしてると……

なのは「？ユーノ君？」

ユーノ「え？ああ……なんでもないよ……（汗）所でなのは。」

なのは「なにかな？」

ユーノ「……昔……佑輔に会った事ないかな？僕達……」

なのは「え?.....あつたかな?」

ユーノ「やっぱりなのはもわからないかな?」

なのは「うん.....」(でも言われてみれば.....

.....あるような.....ないような.....)

一方.....キャラとエリオと合流した二人は.....

佑輔「.....んで.....なんで俺まで連れて来たんだ?」

フェイト「佑輔.....ホントにわからない?」

佑輔「ああ.....やっぱりなあ.....そゆことか.....なのはとユーノは.....」

フェイト「そういう事。二人は小さい時からパートナーだったからね。」

フェイトは昔を思い出しながら言っていた.....

佑輔「パートナーか。.....あれ?あいつら付き合ってるんじゃない?」

フェイト「うゝん…付き合っではないみたいなんだけど…」

佑輔「ふゝん…お互い今一歩か……ったくユーノも女心がわからんのだなあ…こういう場合、大抵女の子が待ってると思うんだがなあ……情けない…」

フェイト「……………佑輔も人の事言えないよ…」

佑輔「え？なんで？」

フェイト「別に、なんでも。ただ佑輔はバカだつて事。」

フェイトはそっぽ向きながら言つた。

佑輔「んま！！ちよつとキャラの奥様聞きましたか！？人を捕まえておいてバカと言いましたよ！！どう思われますか！！！」

キャラ「ふえ！？え…えゝゝと……………ごめんなさい……」

佑輔「（；）！！！」

バタリ…

佑輔はショックを受けて倒れてしまった…

佑輔「…俺って…バカだったんだ……………しくしくしくしくしくしくしくしくしくしく……………（泣）」

エリオ（なんか…哀れだなあ…（汗））

そう思わずにはいられないエリオだった…

フェイト（昔…か……………あれ…？）

その時フェイトにあるヴィジョンが浮かんだ……

フェイト（少女期）「ハアアアアア……！」

??「うおおお……！！！！奥義……！！疾空斬……！！」

ガキーン……！！

二人が交差した……………そして……

ドシュ……！！

??「ぬぐ……？」

男性の足から血が出て……片膝をついた……その男性の近くには……心配
そうに見ている……少女………なのはに……ユーノ……ああ……そうか……私達
が初めて会った時だ……

フェイト（少女期）「はぁ……はぁ……私の……勝ちで……」

ピキキ!!

フェイト（少女期）「え!?!」

バルディッシュにヒビが入った!

フェイト（そんな…相手は…ただの木刀なのに…）

??「いつつうう…あゝまいったあ…強いなあ…お嬢ちゃん俺の負けだ…」

その人は…負けたのに笑顔だった…なぜ…?私が勝ったのに…なぜこんなにも負けた気分になるのだろう…?バルディッシュに木刀に入れられたから…?違う…この人の目は…凄く澄んでいて…優しくて…私の強さを認めてくれたから…?…でも…なぜ…なぜなの?私は…貴方を…傷つけたのに…なぜ?

エリオ「……………イトさん……………フェイトさん!!」

フェイト「え!?!……………あ…エリオ?」

フェイトを心配そうに見ているエリオが目に入った…

フェイト「ごめんね…ちょっと考え事してた…」

エリオ「は…はあ…あの…気分が悪いなら休んだほうが…」

フェイト「ううん…大丈夫だよ。ありがとう、エリオ。」

そうお礼を言つとフェイトは泣きすぎて干からびかけてる佑輔を見た…

フェイト（……………まさかね……………そういえば…あの人…あの後…）

??「お前さん…迷いがあるみたいだが…やっぱり悪い奴には見えねえよ　いつか…迷いが晴れるといいな」

その人の足からは…血が流れていたけど…自分の体の心配より…私を励ましてくれたんだ……………だけど…私は…なにも言わず…なのは達から…去ったんだ…だけど……………

フェイト「……………そんな偶然…あるわけないか…さてと…ほら佑輔、いい加減起きないと置いてくよ?」

佑輔「いいんだいいんだ……どうせ俺はバカでアホでモッコリ変態なんだよ…キャラにもそう思われてんだよ（泣）」

キャラ「あわわわ…だから違うんです！（汗）」

フェイト「……そんな事ないよ…佑輔は…優しくとても強いよ…」

佑輔「はい？（汗）」

佑輔が起きてフェイトを見ると…優しい笑顔を向けてくれた…

フェイト「だから…ほら行こ」

佑輔「な…なんだよ…急に…／／／／／」

フェイト「なんでもないよ」

佑輔「はあ？？」

フェイトは上機嫌になったようで歩きだした…だが佑輔たちはその理由がわからなかった。

佑輔「フェイトのやつ…なにが起きたんだ？」

キャラ「さ…さあ…（汗）」

エリオ「わかりません…ね…（汗）」

フェイト（だけど……嬉しかったな……あの時は……でも……ホン
トにあの人が佑輔だったら……いいのにな……）

次回に続く！！

第十三話：時には夕日に向かって走るのもいいかも？

なのは「みんな、お疲れ様。じゃあ今日の午後は訓練おやすみね。」

フェイト「明日に備えて、ご飯を食べてお風呂に入って、ゆっくりしてね。」

空も夕日で赤くなつた頃、隊舎で隊長達の話聞いてフォワード陣は解散した。その帰り道…

ティアナ「スバル…私これからちよつと一人で練習してくるから…」

ティアナは立ち止まり、話だした…

スバル「自主練？私も付き合うよ」

スバル「あ、じゃあ僕も！」

キャロ「私も」

スバルが言つと次々と付き合つと言い出した……

佑輔「これで俺が抜けたら仲間外れだよなあ……つつつわけで俺も付き合うか」

と、佑輔まで言い出したが……

ティアナ「……………ゆっくりしてねって言われたでしょ……？アンタ達はゆっくりしてなさい……」

ティアナは優しくエリオ達に言い…

ティアナ「それにスバルと佑輔も…一人でやりたいから…」

スバル「……………」

佑輔「はあ……………やれやれ…わかったよ…ただし…無茶はするんじゃないぞ？」

ティアナ「……………わかってるわよ……………」

佑輔は忠告にティアナは一応了解して、行ってしまった…

佑輔「さて…俺はシャワーでも浴びてくらあ…」

キヤロ「あ、お疲れ様でした。」

佑輔「ああ、んじやなあ…」

佑輔も行ってしまった…

佑輔の自室…………

佑輔「ああ…疲れた…色んな意味で……………（泣）……………ん？」

佑輔はふと自分の机に立掛けてる、木刀（自作）に目をやった…
この世界に来て初めて給料をもらって外出許可を得た時に木材を買
つてきて作ったものだ……………

佑輔「……………俺も…なかなか決別できんもんだな
…東雲流剣術……………」

木刀を握り…思い出していた……………あの……………血に染まった…悪
夢の日を……………

それは学校が終わり家の前まで着いた時の事…

佑輔（１７歳）「はあゝ疲れ……………!?」

佑輔は家の玄関の前で違和感を感じた……………

佑輔「なんだ……………血の…匂い……………!?明!!!!美奈!!!!」

バン!!!!!!!!!!

家に飛び込むと…あちこちの壁が血だらけになっていた……………

佑輔「こ…こいつは……………!?明!!!!」

佑輔は倒れている明の元に向け寄った…

佑輔「明!!!!おい!明!!!!……………!?」

明は返事ができなかった……………もう…絶命していたからだ…

佑輔「そんな……………嘘…だろ……………明あああ！！！！」

カタン…

佑輔「！？……………美奈！！！！」

音のした方を振り向くと美奈が一回り小さな木刀を杖にしながらヨロヨロと佑輔の所へ歩いていた…そして佑輔が抱き抱えると…

ガシ！

佑輔「美奈！！美奈！！しっかりしろ！！美奈！！」

美奈「お…兄…ちゃ……………ごめん…ね……………明……………守れなか……………」

佑輔「喋るな！！傷口にさわる！！今兄ちゃんが病院へ！！！！」

美奈「ご…め…ね…お…兄……………」

佑輔「美奈？…おい冗談はよせ……………美奈ああああ！！！！」

その時…佑輔の背後から……………

ズバッ！！

佑輔「うぐ！！！！」

何者かに背中を斬られた。だが……………

佑輔「う…く…あ……………てめえか……………明と…美奈を…やりやがったのはあ…!!」

血を流しながらも…美奈を横にし…立ち上がった……………そこには…

強盗犯「ふひ…ふひひひははははは…!!ナガセ…モット…モット…血ヲナガセエ…!!」

まるで狂っていた男が日本刀を持っていた…

佑輔「うおおお…!!」

ガキン…!!

手にした木刀で男に斬りかかった…

強盗犯「ふひひやひやひやひや…!!」

バシイ…!!

佑輔「うぐ…!!」

木刀を弾き飛ばされ…そして…

ドス…!!

佑輔「!？」

佑輔の左胸が貫かれた……………

佑輔「……………あれから……………なんだよな……………俺が東雲流剣術を……捨てたのは……………けど……やはり捨てきれねえなにかが……………あるんだろっな……………木刀を作ったのがなによりの証拠……か……それに……………ガンダムのビームサーベル……………」

そう……佑輔は元々……………ガンダムにサーベルは付けるつもりはなかった……………だが……なにかが心に引っかけ……………剣を捨てる事はできなかった……………

佑輔「ふ……………もう東雲流剣術が打てる体じゃないってのに……………未練……………だなあ……………ん？」

その時ふと窓の外を見るとティアナが練習してるのが見えた……………だがもう日が沈んでいた……………

佑輔「…………………………やれやれ……………年上の俺がウジウジ悩んでたらかつこ悪いな……………よし！ここは一発！ティアナにモッコリ…………………………じゃなかった……………ティアナにアドバイスに行くか！！……………」

そして……………佑輔は部屋を出た……………

ティアナ「ふっ！はっ！くっ！……ふう……」

ティアナが一息着こうとしたら…

ティアナ「……？なんだろ？甘い匂いが………ん？（汗）」

すると煙まで流れてきた……

ティアナ「え………ちよ………まさか！火事！？」

タッタッタ！……！

ティアナが茂みの奥まで走って行った………そしてそこで見た物は………！！！！

佑輔「おいし〜おいし〜〜焼きい〜〜もおお〜〜」

ズシャアアア！……！！！！

ティアナは盛大にすっころんだ（笑）

佑輔がコブシの効いた歌声で歌いながら焼き芋をしていたからだ…

ティアナ「なにやってんのアンタはあああああ！！！！（怒）」

スパアアアン！！！！

佑輔「グラツチエ！？」

秘技！ハリセンストライクがヒット！！！

佑輔「なにつて…焼き芋してるだけなんだがなあ…」（泣）

ティアナ「？？やきいも？？？」

ティアナはよくわからなかった…

佑輔「なんだ…ミッドチルダじゃ焼き芋はあまり知られてないのか
……この火の中でサツマイモを焼いてんだよ ……そろそろかな
」

そう言つて木の枝で突き刺して芋を取り出した。

佑輔「よかったら食べるか？おいしいぞ」

ティアナ「べ…別にいらな…」

クウウウ……

ティアナ「……………／／／／／」

佑輔「ハハハ お腹は正直だな。一緒に食べようぜ」

そう言つて半分に割つてティアナに渡した。

ティアナ「きゃ…あつ…」

佑輔「はは。気をつけろよ？」

ティアナ「あ…ありがと…」

佑輔「いいよ どうせなら海に見える所で食うか」

そして二人は移動した……

佑輔「はぐ…ほふ！ほふ！うめえ〜〜〜！さすが俺様！！！絶妙な焼き加減！！」

ティアナ「普通自分で褒める？（汗）」

と言いつつティアナも食べ始めた…

ティアナ「はむ…はふ…はふ…あ…美味しい…」

佑輔「だろ〜 いや〜食堂から掻っ払って来て正解だったな」

ティアナ「ブツ！！…あ…あんだねえ…（汗）」

佑輔「お〜っと！お前も食べたから共犯だからな」

ティアナ「う……」

ティアナは後悔した…やっぱり佑輔と関わってロクな事がないと…
だが次の一言でそれは無くなった…

佑輔「ま 俺達だけの秘密って事で」

ティアナ「……………うん…／／／／／」

二人で焼き芋を食べながら少し時間がたつと……

佑輔「んで？長い時間自主練やってなにか掴めたか？」

ティアナ「……………まあ…おぼろげにはね…」

佑輔「そっか。」

佑輔はそれっきり黙って海を見ながら焼き芋をまた食べ始めた…

ティアナ「……………ねえ…」

佑輔「ん？」

ティアナが重たそうに口を開いた…

ティアナ「……………怒らないの？」

佑輔「なんでだ？」

ティアナ「だって……これって…佑輔にとっては…無茶じゃないの？」

佑輔「ん〜…まあ俺も人の事は言えなかったってこつたな。俺もお前くらいの頃は無茶して、修行ばかりしてたからなあ〜…」

ティアナ「修行？なんの？」

佑輔「こいつさ…」

そいつって背中から上着の中に手を伸ばし木刀を出した。

ティアナ「それ…剣？……でも…なんか見たことない形ね…片刃？しかも…それ木でできてる？」

ティアナは当然日本刀の形を知らないがために疑問に思った…

佑輔「こいつはまんま木刀つつてな、昔はこれで東雲流剣術を親父から習ってたんだ。」

ティアナ「シノノメ…リュウ…？」

佑輔「あつはは…わからんか。んじゃあ………見てろよ？」

佑輔は立ち上がり…芋を頭上高く放りなげ…木刀を収める形…いわば居合いの構えをし…そして……

佑輔「破っ！！！」

ズバッ！！！！

ティアナ「！？」

見事芋を粉々にした。ティアナはその技に驚きを覚えた。なぜなら構えから斬る動作がまるで見えなかったからだ。

佑輔「ま、これが東雲流…って訳じゃないが…まあ初歩中の初歩だな」

ティアナ「こ…これで初歩なの…？」

佑輔「この程度ならシグナムの方がかなり上手いと思っぞ？」

佑輔がそう言った瞬間…

ズキン！！

佑輔「！！」

ティアナ「？どうしたの？」

佑輔「いや…なんでもない…」

佑輔はいつもの顔でごまかした。

ティアナ「……あれ？でも…その技…ガンダムの時でも使えるんじゃない？」

ティアナはふと思った…そうだ…ガンダムの方は普通に斬りつける事しかしなかった事に疑問を思った。

佑輔「ああ…それはな…ガンダムのサーベルは…刃の部分が完全にビームじゃん？今の技やったら…俺の手がまっぷたつになるからなあ…（汗）」

そう…ビームサーベルで居合いの構えから斬りつける事したら手を怪我してしまうのだ。

ティアナ「な…なるほど（汗）」

佑輔「それに…もう打てねえんだよ…東雲流は…」

佑輔は小さく海を見ながら呟いた…

ティアナ「え…？」

ザアアア……

風が吹き…月に照らされた佑輔の顔は…海を見ているだけなのに…どこか…泣いているようにも見えた…

ティアナ（………悲しい瞳………でも…どこか…綺麗…）

ティアナは見とれていた…佑輔の長い黒髪は流れるようになびいており…悲しくも澄んだ瞳をしていたから…だがそう見えたのは…内に秘めた想いのせいなのか…はたまた…いつものおちゃらけた佑輔ではないような…そんな気がしたからか…

ティアナ自身にも…それはわからなかった…

佑輔「ティアナ？」

ふと佑輔が声をかけると…

ティアナ「え…？ああ！／／／／なんでもないわよ！／／／／」

佑輔「？そうか。」

ティアナが正気に戻った時見た佑輔はいつもの表情だった…

ティアナ（げ…幻覚だったのかな…佑輔が綺麗だなんて…相当疲れてんのかな…（汗））

佑輔「そろそろ戻るか…スバルも心配してるだろうしな。」

ティアナ「うん…」

その帰り道…ティアナはふと疑問に思った事を佑輔に聞いた…

ティアナ「ねえ…佑輔はさ…なんの為に戦うの…？」

佑輔「ん？戦う理由…か…そうだな…きっかけは…はやての提案だったが…俺はエリオとキャロの為…だな。」

ティアナ「エリオとキャロ…？」

佑輔「ああ…この世界へ来た時…あの二人…あんなデカブツを相手に戦ってるのを見て…守りたくなっただ。なんとなく…似てん

だ…美奈と明にな…」

ティアナ「ミナ…アキラ？」

佑輔「妹と弟さ…まあ…姿形が似てる訳じゃない…ただ…歳がな…同じくらいなんだ…だからこそ…俺は…」

ティアナ「……………」

ティアナはしまったと後悔した…佑輔の家族は…もう……

ティアナ「ごめん…佑輔…」

佑輔「いんや 構やしねえよ ま、俺の戦う理由はそんなところ…ティアナは？」

ティアナ「え…？……………私は……………兄の…夢を叶えるためよ。」

佑輔「？？兄貴の夢??？」

佑輔はティアナの兄が執務官を目指していた事を聞いた……

佑輔「そっか……………兄想いだな…ティアナは…」

ティアナ「そう…かな…」

佑輔「だけどよ…もしお前の兄貴だったら……もつと自分の為に生きて欲しいって…思うかな。」

ティアナ「自分の…為…？」

佑輔「執務官になるのがお前自身の夢でもあるならそれで構わない…けどよ…もつと自分の事を大事にして欲しいって思ってるんじゃないか？」

ティアナ「……………」

佑輔「修行も度が過ぎればただの苦行だ。ま、あんまりやり過ぎるなよって事。」

ティアナ「……でも…私は…みんなと違って凡人だから…」

佑輔「あのなあ…お前が凡人なら、魔法が使えない俺はどうなる訳だ？（汗）」

佑輔は呆れながらティアナに言った…

ティアナ「え…？……………超人…？」

佑輔「なんですと！？言いやがったなあ…こいつう！」

佑輔はティアナの頭を捕まえて軽くグリグリ攻撃をした。

ティアナ「きゃー！！ちょっと、痛いわよ！」

佑輔「やあかましい」 超凡人の攻撃をくらえい うりやうりやうりやうりや！」

ティアナ「イタタタタ！？ごめんってば！」

二人で攻防戦をしていると…

佑輔「……………ぷっ……………」

ティアナ「……………クス」

佑輔「アツハハハハ！」

ティアナ「…フフ…アハハハハハ」

二人は笑い出した…先程までの暗い空気が吹き飛ぶくらい…

ヴァイス「ふう……………さすが旦那だ。俺が言っても、やめなかったのに…やめさせた上に笑顔にするたあ…こりゃみんなに慕われる訳だな……………」

屋上から見ていたヴァイスは感心していたそう。

翌朝…スバルとティアナは早朝練習するために外へ出ると…

スバル「……………なにしてんの…？（汗）」

佑輔「なにつて…お前たちを待ってたんだが？」

ティアナ「……………っていつか……………なんで朝からまた焼き芋
…（汗）」

佑輔「いやぁ…腹減ったから…」

インターミッション!!!!!!

ティアナ「で…？」

ティアナは呆れながら聞いた。

佑輔「どうせお前の事だから…『私！！早朝訓練頑張ります！！コートチー！！』……って思ってたんじゃないかと…」

佑輔は目をキラキラさせながら…まるで…昔の某バレーボールアニメみたいな顔をしながら言った…

ティアナ「そんな言い方してないわよ！！…だいたいコーチって誰よ！！…」

スバル「まあ…だいたい内容は合ってるけどね…（汗）」

佑輔「ま…冗談はさておき……俺もいたら実戦として役に立つと思っ
てな」

ティアナ「足引っ張るの間違いじゃないの？」

ゴーン……………

佑輔「……………しくしく…しくしくしく…（泣）」

スバル「ティア…言い過ぎだよ…（汗）事実かも知れないけど…」

佑輔「おい…追い討ちかコノヤロウ…（泣）」

ティアナ「冗談よ。でも素直に協力してくれるのは助かるわ。」

佑輔「まったく…早起きしたってのに…まあいいや。んじゃ始めるか
！！！！…」

スバル「おゝ!!」

ティアナ（私は…この無茶な練習のせいで…なのはさんと佑輔が…
…そして佑輔の体に起こっている事を知り…後悔する事になると
は…この時…微塵にも思わなかった…）

次回に続く!!!

第十四話：小さい頃の記憶って曖昧な気がする…

スバル「で…ティアの考えてる事って？」

ティアナ「短期間で、とりあえず現状戦力をアップさせる方法…」

早朝…スバルとティアはこれからの練習方法について話し合ってた……のだが…

佑輔「んぐんぐんぐ…」

スバル「……………（汗）」

ティアナ「（イライラ）……………上手くいけば…アンタとのコンビネーションもぐつと広がるし…エリオとキャロのフォローももつと……………」

佑輔「もぐもぐ……………んぐ！？の…喉つまっ！？」

ティアナ「永久に窒息死しろおお！！！！！」

バキヤア！！！！

佑輔「マリアン！？」

ティアナの飛び回し蹴りが決まった！！！！

ティアナ「アンタやる気あるの?!?!!!」(怒)「

佑輔「あります…」(泣)「ごめんなさい……………」だから…水を…」(泣)「

インターミッション!!!!!!

なんだかんだと練習に付き合ってはみたんだが……………最初は技を増やしたりと…色々やってる内は俺もノリ気で相手役を買ったのだが…

……………

スバル「デイベイイイン……………バスタアアア!!!!!!」

ドオオオオオン!!!!!!

佑輔「うおっと!!!!!!」

スバルのデイベインバスターをバーニアを使って避けたが……………

ティアナ「もらった！！！！ハアアアア！！！！」

佑輔「む！！！！ハッ！！！！」

バチン！！！！！！

ティアナがクロスミラージュを光の刃に変えてウイングロードから突撃してきたが佑輔はビームサーベルで難なく弾いた…そして…

ティアナ「キャアア！！」

ドサ！！

ウイングロードからティアナは地面に落ちてしまった…

佑輔「しまった！！ティアナ！！」

スバル「ティア！！！！」

佑輔とスバルはティアナに駆け寄った…

スバル「ティア！大丈夫！？」

ティアナ「う…うん…なんとか…」

佑輔「……………」

佑輔は悩みに悩んだ末に重く口を開いた…

佑輔「ティアナ…やはり無茶だぞ…射撃主体のお前がいきなり接近

戦に持ち込むって言うのは…」

ティアナ「大丈夫よ…マスター…すれば…きっと…」

佑輔「あのなあ…マスターすればって…簡単に言うが…接近戦なんて一朝一夕でできるもんじゃないぞ？無論…中距離戦…遠距離戦もだ…」

ティアナ「…でも…私は…」

佑輔「とにかく…今は自分の地盤を固める方が…」

ティアナ「私はもっと強くなりたいの！！！！！」

佑輔「！？」

佑輔が言い終わる前にティアナが叫んだ…

スバル「ティア…」

ティアナ「もう…協力する気がないなら…帰って…」

スバル「ちょ…ティア…そういう言い方は…」

佑輔「はあ……わかった…俺はもう何も言わんし…協力はする…自分で納得するまでやってみな。だが…今日はもうやめておけ。体がホントに壊れちまう。」

佑輔は半ば呆れながら言った…

ティアナ「うん……」

ティアナは渋々やめる事にした…

佑輔「スバル、ティアナを頼む…」

スバル「うん…あの…佑輔…ごめんね…」

佑輔「いいよ わかってるから 気にするなって」

スバル「うん！ありがとう！」

そう言つてスバル達は帰って行つた…

シュボ！！

佑輔「すう……ふうう………」

佑輔はタバコに火を付けて夜空を見上げた…

佑輔（ティアナ…… お前が…強くなろうとするのは…よくわかる…
…だがな…急ぎ過ぎて得た力じゃ…自分の身を…滅ぼすだけだ…
…それでは…いつか…俺みたいな体に……）

佑輔はそんな事を考えながらいると…

カサ……

佑輔「………それで気配を消してるつもりか？」

はやて「あちゃあ…ばれてた？」

佑輔「バレバレだ…ニュータイプをなめんなよ？」

はやて「ぷっ…ニュータイプって……」

二人は座り込み夜空を見ながら話し出した…

はやて「で？どうなんや？今のあの二人は……」

佑輔「正直…ティアナが…一番急ぎ過ぎてるな……はあ…まったく…ほんつと昔の俺にそっくりだ……」

はやて「佑輔もあんな無茶な時あったん？」

佑輔「そもそも！1日中修行修行の毎日を送ったり！山籠もりをして熊と戦いまくったりしてな！」

はやて「どこの武道家やねん…（汗）」

佑輔「一番凄かったのが…旅行先の戦場真っ只中を駆け抜けて戦ったりしたなあ」

はやて「バカやろ？」

はやては素晴らしい笑顔で告げた…

佑輔「うわあ…めっちゃ笑顔で死の宣告だよこの人…（泣）」

はやて「アハハ……で…どないするん？」

佑輔「とりあえず自分で納得するまでやらせるさ。どの道もつすぐ模擬戦がある…ま、なのはがなんとかアドバイスするだろ。」

はやて「せやね それじゃウチらも帰ろつか？」

佑輔「ああ。」

そう言つて二人が立ち上がると歩き出した…

はやて「ほんま…今日は星が綺麗やな」

佑輔「おゝい…足元見ないとコケるぞ」

はやて「大丈夫やよ」

と、言つた瞬間……

ガッ!!

はやて「きゃ!？」

はやてが小石につまづいてコケそうになったが…

佑輔「あぶね!!!」

ガシィ!!!

佑輔に抱き止められた…

はやて「あ……ありが……あ……」

佑輔「ああ………」

二人の顔が近くにあった……

ドックン…ドックン…ドックン…

はやて「……………／／／／／／」（か…顔…近…ど…どうじょう！？こ…声が…出せ…へん…）

一方佑輔は……

佑輔（はて……………なんか…昔にもこんな事が…？）

その時佑輔の脳裏にあるヴィジョンが…

??「きゃああ!？」

佑輔（15歳）「あぶね!!!!」

ガシイ!!

ガラガラガッシャーン!!!!!!

旅行先のとある公園を歩いていたら車椅子の少女が公園の階段から落ちそうになっていたのを助けた…

佑輔（15歳）「だ…大丈夫か!？」

??「は…はい…ありがとうございます…」

少女はまだ状況が飲み込めていないのだろう…目をパチパチさせていた…

佑輔（15歳）「よつと…」

??「え?ひゃわあ!?!?!?!?!」

少女をお姫様抱っこして、車椅子を取りに階段を降りた……

佑輔（15歳）「ん…………よし…壊れちゃいないな」

確認し終えて車椅子をもとに戻し少女を乗せた…

佑輔（15歳）「怪我也なさそうだし。よかったな」

??「すみません…………ご迷惑おかけしました…」

佑輔（15歳）（ん?関西弁か…?）

??「あの…よかつたらお名前を…」

佑輔（15歳）「え?ああ…俺はしの……………」

警察官「あ!そこに居たか!?!?!不法侵入者ああ!?!?!?!」

佑輔（あり…はやてって…こんなに…可愛かったつけ…？って…
なんか…ドキドキしてきたんですけど！？お袋様！！俺はどうな
っちゃうんですか！？いや！思い出せ！！俺はモツコリスケベのはず
！！…そう！！いわば！！…こんな純情は俺じゃない！！…のに
…変だ…いつもの感じに…なれん…／／／／／

さっき思い出したのが吹き飛ぶくらいだった…顔は普通にしてるの
に心の中は混乱爆発寸前だった…

はやて「……………／／／／／」

ついにははやては目をつむり…………

佑輔（！？マジかよ……！？！？…け…けど…はやて…ホントに
…可愛い…な…）

佑輔も目をつむり顔を近づけ…ついに……………と思いきや！！！！

リン？「はやてちゃん…どこですかあ…」

佑輔・はやて「！？／／／／／／／／」

ババツ！！！！

二人は一気に距離を離れた……………そして…眠そつに飛んできたリン？…

リン？「んう？なにしてるんですか…？」

はやて「いや！？なんでもあらへんよ！！！！／／／／」

佑輔「ああ！！！！／／／／別にキスしようとし……」

はやて「うわ！？バカアアア！！！！！！／／／／／」

バキィ！！！！！！

佑輔「アパカー！？」

はやてのアップー……いや昇○拳が決まった……

リン？「んゝ……鱧？」

はやて「さ……さあ！リン、部屋に戻るで！！！！／／／／／」

リン？「ふわあああい……」

そのままはやては行ってしまった……

佑輔「……さっきのはなんだったんだ……／／／／／

／つか……こんなに純情だったか……俺……（汗）……まさか……
……俺……マジ？」

一方……

はやて自室…リン？は既におやすみしていたがはやては窓の外を
を見ながら…

はやて「……………ウチ……………本気になつてもうたな…／／／／／
どないしょ…／／／／／そーいや…昔……………あんな風に助けてくれた人
がおったな……………」

はやては昔助けられた時の事を思い出していた…

ウチが昔…公園を散歩していた時…

はやて（９歳）「きゃあああ！？」

??「あぶね！…！」

ガシイ！！

ガラガラガツシャーン！！！！

??「だ…大丈夫か！？」

はやて（９歳）「は…はい…ありがとうございます…」

??「よつと…」

はやて（9歳）「え？ひゃわあ！？／／／／／」

いきなりウチをお姫様抱っこしたんやもんな…びっくりしたわあ…

??「ん…よし…壊れちゃいないな 怪我也なさそうだし。よかったな」

はやて（9歳）「すみません…ご迷惑おかけしました…

（そついやこの辺では見かけん顔やなあ…）

あの…よかつたらお名前を…」

??「え？ああ…俺はしの…」

警察官「あ！そこに居たか！…不法侵入者ああ！…！」

??「げ！？また来やがった！…じゃあなお嬢ちゃん！…！」

タッタッタ…！！

はやて（9歳）「え！？あ…行ってもうた…」

警察官「まてええ！…このロリコン不法侵入者ああああ！！」

??「バツカヤロ…！！誰がロリコンじゃああああ！！！！（怒）」

そのまま行っけしもうたんよなあ…なんで警察に追われてたんかは謎やったけど（汗）…でもお姫様抱っこされた時…ウチには…

王子様に見えたなあ…そういえば…

??『俺は…しの…』

はやて「しののめ…ゆうすけ…」

はやてポツリと呟いた…

はやて「…そんな偶然…ん…待てよ…確か…ユーノ君…昔佑輔に会ったような…って言うとな…フェイトちゃんも昔…木刀の男と戦ったって…まさか…ホンマに…?」

はやては画面を開き…カレンダーを確認した…

はやて「時期は…合うとる!?!いや…しかし…木刀って……そういや…最近…佑輔木刀を作ったな…うゝん…」

さすがは捜査を行ってきたはやて…調べるのが早い……そして助けてくれた男の姿をよく思いだそうとしていた…

??『じゃあな!お嬢ちゃん!』

タッタッタ…

佑輔「ぬおおお！……しっかりしろ！……モッコリスケべな俺」
」

ガンガンガンガンガン！

ひたすら木に頭を打ちつつづけていた……どうやらこっちはこっちで苦
悩していたようだ……

次回に続く……！

はやてとのキス（未遂）から翌朝…食堂にて…

フワード陣「……………（汗）」

佑輔「もぐもぐもぐ…」

みんなは佑輔の様子が変だと思った…いや……………最早確信していた…
…なぜなら……………

佑輔「……………このはんぺん……………固いな……………」

キャラ「……………あの……………それ手ぬぐいです……………（汗）」

佑輔「んっ？……………間違えた……………コクコク……………このコーヒー……………
辛いな……………」

スバル「それ…醤油だよ？（汗）」

佑輔「……………はあ……………」

ついにはため息までついて空を見た……………

佑輔「……………小鳥になりたい……………」

ドンガラガッシャーン！！！！

その時…食堂にいる全員に衝撃が走った！！！！

ヴィータ「おいしいい！？お前一体どうしたんだよ！？」

佑輔「え…？（汗）」

ヴァイス「旦那ぁ！！なんか拾い食いでもしたんツスカ！！」

ティアナ「とうとう頭がおかしく……」

スバル「そうなの！？うわぁぁ！！お医者さん！！いや、シャマルさぁん！！」

キャロ「佑輔さん！！気をしっかり持ってください！！」

エリオ「そうだ！！ネギを刺せば！！」

まるで重病人扱いだった……

リン？（……佑輔？……）

リン？は佑輔の様子のおかしさが妙に気になった……

一方……

はやて「……………結局…眠れんかった……」

はやては部隊長部屋でうなだれていた……

シャマル「……………はやてちゃん…大丈夫？」

はやて「だ…大丈夫や……………ちょっと色々とな…ハハハ……」

シャマル「無理は禁物ですよ？」

はやて「うん…ありがとう……」

はやてははやてで昨日の事が悩みの種であった……………

インターミッション！！

佑輔「……………」

パン！！パン！！！！

佑輔は朝食後…外に出て自分に喝を入れていた…

佑輔「よし……………昨夜の事は一時保留だ……………今は訓練に集中だ！
」

そう言つて今日もまた訓練に赴いた……………そしてまた…訓練が終わるとティアナ達の自主練に付き合っていた…明日の模擬戦のための仕上げだ…

ティアナ「やああああ！！！！！！」

佑輔「踏み込みが甘い！！！！」

バチン！！！！

ティアナ「うあ！！」

ドサ！！

スバル「ティア！！」

スバルはティアナに駆け寄って行った…

佑輔「よし…今日はもうやめておこう…」

ティアナ「……………ハア…ハア…」

スバル「ハア…ハア…」

二人はもう完全に息切れしていた…

スバル「佑輔……なんか…段々…教える側になってきたよね……」

佑輔「まあな。お前達が必死でやってるからな…俺も全力で応えてやらんとな…しかし…俺もくたびれたぜ…」

佑輔は座り込み…タバコに火をつけた…

佑輔「で…明日はやっぱり…今のコンビネーションをやるのか…？」

ティアナ「当然………やっぱり…佑輔は反対するの…？」

ティアナは半ば恐る恐る聞いた…

佑輔「もう反対はしねえが…オススメもできねえな…けど…それでもやるんだろ？なら…とことんやって、試して、そこからまたなにかを学めばいいさ。」

ティアナ「うん。ありがとう…それと…昨日は…ごめん…私言い過ぎたよ…」

佑輔「気にすんな。さて！明日に備えて寝るか…！」

スバル「そうだね。」

ティアナ「それじゃ、また明日。」

佑輔「ああ、おやすみ。」

三人と別れ…自室へ戻る途中…

はやて「あ…」

佑輔「あ…」

はやてと鉢合わせしてしまった…

はやて「……………／／／／／／／／」

佑輔「……………（汗）」

二人はなにも喋れなかった…どう切り出せばいいかわからなかった

……

佑輔（……………なんか…重い…（汗））

はやて（ど…どうしょ……な……なにか…喋らんと……）

なんとかしようと…はやてが喋りだした…

はやて「い…今…自主練からの帰り？／／／／／」

佑輔「あ…ああ…まあな……………（汗）」

それでも二人はやはりぎこちなかった…そしてそこで会話がスト
ップし…また沈黙になった……

佑輔「……………あ…あのよ……………」

はやて「え！？／／／／／な…なんや…？」

佑輔「昨夜の事…なんだけどよ…」

はやて「！？……………ウチ…まだ片付けなアカン仕事があるから…」

そのままはやては佑輔の横を走り去ろうとした…

佑輔「え！…ちょ…はやて！！」

はやては止まり……………振り返る事なく…告げた……………

はやて「昨夜の事……………忘れて……………」

佑輔「……………はい？」

佑輔はキョトンとした…

はやて「ウチ…疲れとったみたいや……………だから……………迷惑かけて……………
ゴメンな……………」

タッタッタ……………

そのまま廊下を曲がって走り去ってしまった……………

佑輔「……………え…と……………な…なあんだ……………疲れ
てた……………だけ……………は……………ハハハ……………そうだったのか……………納得…納得
……………俺の勘違いか……………ハハハ……………はあ……………」

佑輔はトボトボ歩きだした…
そして…廊下の曲がった先では……

はやて「……………ウチ…最低や……………佑輔…ゴメンな…けど
…ウチは…まだ…佑輔に…告白は…できんのか……………」

涙を流しながら……………はやてはもういない佑輔に謝った……………

二人の様子を物陰から見ていた人物が一人……………

リン？「……………はやてちゃん……………やっぱり……………佑輔の
事……………」

リン？だった……………

リン？（薄々……………そんな気はしてたですよ……………）

リン？も女の子だ……………直感とも言つべきか……………感づいていたよう
だ……………

リン？（私は……………）

リン？は気持ちのやり場をどこに向ければいいかわからなかった
のだ……………

屋上…

佑輔「……………」

シュボ…

佑輔は夜風にあてられながらタバコを吸っていた…

佑輔（…はやて… ホントに俺の…勘違い…なのか…？）

佑輔は落ち込みながら考えていた…何故はやては昨日の事を忘れてくれと頼んだのか…

佑輔「ま…どのみち振られたって事か…（泣）」

キィ…

その時、屋上の扉が開く音が聞こえた…

佑輔「ん？」

なのは「こゝら、明日は模擬戦だよ？もう寝とかないと明日は辛いよ？」

フェイト「こんな遅くまでなにしてるの？」

なのはとフェイトだった…

佑輔「な〜に言ってやがる…いつもキツイだろうが…」

なのは「にやはは…それもそう…ん？」

なのはは不思議そうに佑輔の顔を見た…

佑輔「……………なんだよ？（汗）」

なのは「佑輔……………なんか落ち込んでる？」

佑輔「ぶっ！！ば…バカ言っな！！なんで俺が落ち込まなきゃならねえんだ！（汗）」

フェイト「またナンパして振られたんでしょ…」

佑輔「だから違うつて！！（汗）ちょっと考え事してただけだ！！」

フェイト「考え事??」

なのは「佑輔が??」

佑輔「おいコラ…どういう意味だ…」

なのは「だって…ねえ？」

フェイト「うん…珍ししから…」

佑輔「……………お前らが普段どついう目で見てるかよくわかった…（怒）」

なのは「にやはは…ごめんごめん…」

フエイト「で…考え事って?」

佑輔「……………べっつに…もう解決済みだ…んじゃ!俺は寝る!
!おやすみ」

そう言っつて佑輔は帰って行っつた…

なのは「……………ウソつくの…下手だよね…」

フエイト「うん…はやてと…なにかあつたから…落ち込んでたんだ
よ…きつと…」

なのは達は佑輔が落ち込んでいるのを見破つていた…何故なら…

なのは「昨日はもう少しでキスしそうなくらいだったのにね…」

フエイト「うん…リインが来て未遂になつたけど…でも…素直に
は喜べないね…」

そう…二人はキス(未遂)を偶然見てしまったのだ…その時の様子を皆さんにご覧頂こう…チエケラ!!!

なのは『今日も疲れたね』

フェイト『うん。……………あれ?』

なのは『どうかした?』

フェイト『あれ…佑輔とはやてじゃない?』

なのは『あ…ホントだ…なに…!?!?』

フェイト『!?!?』

二人は訓練場からの帰り佑輔とはやてが抱き合っているのを発見した…そして…

なのは『フェイトちゃん!こっち!』

フェイト『え!?!?』

二人は茂みに隠れた…

なのは『な…なんで抱き合ってるの…?』

フェイト『わ…わかんないよ…ま…まさか…』

そしてはやてが目をつむり…

なのは『んな!?!?』

フェイト『う…嘘!?!?』

二人が顔を近づけた瞬間……

リン？『はやてちゃん……どこですかあ……』

リン？が眠そうに現れ……二人は離れた……そして佑輔ははやての昇○拳を喰らいはやては帰っていった……

なのは・フェイト『……ほっ……ん？』

二人は安堵の息をした瞬間、お互いの顔を見合わせた……

なのは「まさかフェイトちゃんまで佑輔を意識してたなんてねえ」

フェイト「そういうのはこそ。私はてっきり……ユーノが好きだとばかり……」

二人は笑ってしまった……

なのは「ユーノ君は……ん……なんていうか……幼なじみだね……うん。でも正直なところ……わかんないんだ……」

フェイト「？なにが？」

なのは「ホントに私……佑輔が好きなのかなって……もしかして……昔会った……あの人を佑輔に見たてているんじゃないかって……」

フェイト「……初めてなのはと会った時の……あの人が……そうだね
……私も……そうかも……」

なのは「フェイトちゃんも思い出したんだ……」

フェイト「うん……あのアグスタの時にね……なのはは……いつ？」

なのは「私はユーノ君から聞いた時……かな……」

フェイト「そっか……」

なのは「……あゝあ……初恋実らず……か……」

フェイト「うん……」

二人はしばらく沈黙しながら夜空を見ていた……

フェイト「そろそろ……寝よっか……」

なのは「うん……よし……とにかく気持ちを切り替えて明日も頑張ろ
……」

フェイト「うん……そうだね、頑張ろ。」

二人は明日に備えて休む事にした……

一方……

佑輔「……………?」

佑輔は部隊長室のドアの隙間から光が少し漏れているのに気付いた……そしてそつと中を覗くと……

はやて「……………すう……………すう……………」

はやてがモニターをつけっぱなしで寝ていた……

佑輔「……………はやて……………ふう……………」

佑輔は椅子に掛けてあったはやての上着をかけてやった……

佑輔「……………お疲れさん……………はやて……………」

そういつて佑輔は部屋から出た……

はやて「……………ん……………あれ……………上着……………誰が……………?」

その時ふとドアを見ると長い黒髪が部屋の外に出ていくのが見えた……

はやて「あ……………」

はやてはさっき佑輔に言ってしまった事を思い出していた……

はやて「……………佑輔……………バカやな……………あんな事言つたウチに
…優しくして……………」

それぞれの想いと迷いが交錯したまま……………次の日を迎えた……………

佑輔（…さて…見せてもらうぞ…スバル…ティアナ…お前たちの特
訓の成果を…）

佑輔はフェイト…エリオたちと共に模擬戦を見ていた…そしてフェ
イトから聞かされた…なのは…特訓が終わった後も…みんなの戦
い方をモニターで特訓メニューを作っていたりとか色々やっている
と……………

モニターで……………か……………
佑輔

佑輔はそこが何故か引つかかった……………そしていつものような顔では
なく…真剣な眼差しで…瞬き一つせず…模擬戦を見ていた……………

キャラ（ねえ…エリオ君…）

エリオ（え…なに？キャラ？）

キャラ（なんか…佑輔さん…ちょっといつもと違うような気が…）

エリオ（…うん…そうだね…）

ヴィータ（お前達も気付いたか…そうだ…佑輔は何故か…二人の戦い方に注目している…お前たちも無駄話してないでちゃんと見ておけよ？）

キャラ・エリオ（は…はい！）

三人は念話の会話を終わらせた…だがフェイトは…

フェイト（佑輔……なにか…心配してる…？）

フェイトは佑輔の表情を見て気になっていた…

佑輔（まずは……スバルの真っ向勝負…）

スバルはウイングロードをなのはに向け…魔力弾をシールドで防ぎながらも思いつきり突っ込み…

スバル「うりあああああ！！！！」

なのは「くっ…！！」

ズガアアアア！！！！

拳を叩き込んだがなのはもまたシールドで防ぎ…

なのは「……………、っ！！！」

バチン！！！！

そのままスバルを吹っ飛ばした！！

なのは「こらスバル！！駄目だよ！！そんな機動！！」

スタ！！

スバル「うわつとと！！す…すいません！でも、ちゃんと防ぎますから！！！」

なのは「……………？ティアナは…？」

なのはは周りを見渡しながらティアナを探した…

佑輔（！！勝負にでるつもりか！ティアナ！……………だが…なんだ…この嫌な予感…この胸をえぐるような感覚……………）

佑輔の表情が更にこわばった……

フェイト「？……………佑輔…大丈夫…？」

佑輔「あ…ああ……………大丈夫だ……………」

ティアナ（特訓の成果…クロスシフトC！行くわよ！！スバル！）

ティアナが砲撃の構えをしながら合図を送った！

スバル「おお！！でやあああああ！！」

スバルはまた突っ込んで行った…

なのは「！！」

ババツ！！

なのは魔力弾を撃ち…スバルを狙うが…スバルは止まらなかった。

スバル「おりゃあああああ！！」

ガキン！！！！

スバルの繰り出す拳をなのはもまたシールドで受け止めた…

スバル「うつくう！！ティアアア！！」

スバルがティアナの名を言った瞬間…砲撃の構えをしたティアナが消えた…

キャラ「え！？あつちのティアナさんはフェイク！？」

エリオ「ほ…本物は…!？」

ティアナはウイングロードを走ってなのはの真上を目指していた…

ティアナ「バリアを切り裂き…フィールドを突き抜ける……………一撃必殺!…!」

ティアナはなのはの真上に到達すると…クロスミラージュから光の刃を出し…突っ込んだ!!

負けられない……………!私のワガママな特訓に付き合ってくれたスバルの為にも…そして…そして……反対をしながらも…接近戦の極意を教えてくれて…心配してくれた…

佑輔の為にも!…!…!…!

ティアナ「でえええい!…!…!」

なのは「……………レイジングハート……………モードリリース…」

ピキインー!!

佑輔「!？」(なんだ…なのはの…なにかが…変わった…いや…違う…これは……………)

ドゴオオオン!…!…!…!…!

ティアナがなのはに到達した瞬間爆発が起きた……

エリオ「うわああ！」

佑輔「ぬっ！！くうう！！！！！」

フェイト「なのは……！」

そして……

なのは「おかしいな……二人とも……どうしちゃったのかな……」

煙が晴れると……

スバル「あ……ああ……」

ティアナ「え……」

佑輔「……テ……ティアナとスバルの……渾身の一撃を……素手で……だと……」

三人とも呆然としていた……

なのは「頑張ってるのはわかるけど……模擬戦は……ケンカじゃないんだよ……」

佑輔「……」（け……ケンカ……だと……）

なのははうつつ向いたまま言葉を続けた……

なのは「練習の時だけ言うこと聞いてるフリして……本番でこんな無茶するんなら……練習の意味……ないじゃない……」

ティアナ「!？」

なのは「ちゃんとさ……練習通りにやろうよ……ねえ……」

なのはが顔を上げたその瞬間……

ピキインー!!

佑輔「!？……なんだ……怒り……いや……悲しみ………なのか……？」

スバル「あ……あの……」

スバルの声は震えていた……なのは……の雰囲気の変わり様に……

なのは「私の言ってる事……私の訓練………そんなに間違ってる……？」

ティアナ「!？………つくー!!」

ティアナは光の刃をしまい、なのはとの距離をとった。

ティアナ「私は……!」

ガシユン！ガシユン！！

ティアナ「私はもう！誰も傷つけないから……無くしたくないからあ……!……!」

スバル「ティア……」

佑輔「よせ！！ティアナアア！！もういい！！それ以上自分を追い詰めるなアア！！！」

佑輔は大声で叫ぶがティアナには届かなかった……

ティアナ「だから……だからあ！！！」

佑輔「くそ！！！！ガンダム！！セットアップ！！ミノフスキークラフト！！！！ブースター全開！！！！」

バチン！！キュイイン……ドゥン！！

フェイト「佑輔！！ダメ！！戻って！！！」

佑輔はフェイトの静止を振りきって飛び出した。

ティアナ「だから……私は強くなりたいんです！！！」

なのは「………少し………頭……冷やそうか………」

キイン……

スバル「！？」

佑輔「！？なのはが魔法陣を……まさか！！くっ！！！」

なのは「クロス……ファイア……」

ティアナ「うわああああ！！！！ファントムブレイ……！！！」

なのは「シュート……」

ドギユウン！！

ティアナ「！？」

ティアナが撃つ前になのはが早く撃った……

ドゴオオオン！！

スバル「ティア……！！バインド！？」

スバルは自分にバインドがかけられたのに気付いた……そして……

なのは「じつとして……よく見てなさい……」

煙が少し晴れた先には……まだティアナがたっていたが……ふらついていた……

キイイイン……

スバル「！？なのはさん！！！！」

スバルの叫びも虚しく……なのはの無情の一撃が……

ズドオオン！！！！

放たれた……

ドゴオオオン！……！！

スバル「！？ティアアアアア！！！！！」

ティアナに直撃した……はずだった……

なのは「………どういっつもり………佑輔……？」

スバル「え！？」

煙が晴れて……そこに居たのは………フィン・ファンネルでエフィールドを作り……シールドを構えティアナをかばった……佑輔だった……

佑輔「………」

シールドを降ろし……その時見えた佑輔の表情は険しく……なのはを睨んでいた……なのはもまた……佑輔を睨んでいた……だが佑輔はティアナの方を向き……

佑輔「ティアナ、ティアナ！しっかりしろ……ティアナ！」

ティアナ「う……く……ゆ……すけ……？」

佑輔「ああ……俺だ……」

ティアナ「ご……め……私………強く………なれなか………」

佑輔「………もう喋るな……！ダメージがひでえんだ………お前はよく頑

張った…努力もしていた…スバルも…だから……………落とし前は…
…俺がつけてやる…！」

佑輔はそう言ってティアナをお姫様抱っこして…スバルの元に降りた……

スバル「ティアア…！」

スバルが駆け寄って来たが…

佑輔「大丈夫だ…意識を失ってるだけだ…それより動くな、スバル」

スバル「え？」

佑輔「……………破っ…！」

パン…！！

佑輔は気合いを入れたかと思うとスバルのバインドを破裂させた…

スバル「バインドが…！」

佑輔「スバル…ティアナをキャロの所に連れてってやってくれ…」

スバル「う…うん…」

そう言ってスバルはティアナを連れてキャロの所に行った……………そして……

佑輔「待たせたな……………次は…俺の番だったよな…落とし前は

つけさせてもらっぜ……」

なのは「……………二人の敵討ちでもするつもり……？」

佑輔「まあな……それに今のお前のやり方は気にいらん……」

なのは「……………佑輔も……………ティアナ達の味方なんだ……………ふうん……じやあティアナにあの接近戦を教えたのは佑輔なんだ……………」

佑輔「だとしたら……なんだ……」

なのは「私も……気にいらないよ……………勝手な事して……無茶させて……そして……佑輔まで……私にケンカを売るんだから……」

ピク……

佑輔はなのはの言葉に怒りを覚えた……

佑輔「俺の戦いがケンカならそれでも構わん……………だがな……………ティアナ達のはケンカじゃねえ……………！！！！」

佑輔は叫んだ……………許せなかったのだ……………二人はただ……………純粹に強くなりたかった……………努力しただけだ……………その成果を……………誰よりも……………なのはに見てもらいたかった……………

なのは「……………もう言葉じゃ……………わからないようだね……………」

佑輔「お互いにな……………ならば……」

ジャキン……！！

なのははレイジングハートを…佑輔はビームライフルを構えた……

フェイト『佑輔！！ダメ！やめて！！なのはも落ち着いて！！』

フェイトが通信で二人を止めようとした…だが……

佑輔「……………悪いが……………やめる気は……………ない！！」

なのは「……………だそうだよ…フェイトちゃん…」

フェイト『そんな…』

ヴィータ「フェイト…もうこうなったらやらせるしかねえよ…」

フェイト「でもヴィータ！！」

ヴィータはもう止めれそうにない事を悟っていた…これはもう…お互いの意地と意地のぶつかり合いだ……納得するまでやらせるしかない……

佑輔「……………行くぜ……………」

ドキュンドキュンドキュンドキュン！！

佑輔がビームライフルを撃つと同時に戦いが始まった…！

なのは「……………」

なのはは無言で避けていき……………

レイジングハート「アクセルシューター」

ドドドド!!

佑輔「そんな魔法がいつまでも通用すると思うな!!!!フィンファンネル!!」

ピシュンピシュン!!!!

ガガガガ!!!!

佑輔はフィンファンネ

ルでアクセルシューターを叩き落とした…

エリオ「……………凄い……………佑輔さん…あれから…強くなってる……………」

キャロ「う…うん……………スピードも…射撃の速さも…ファンネルの鋭さもパワーアップしてる……………」

二人は驚いていた…それほどまでに佑輔の実力はアップしていた…
…だが…

チュイン!!

佑輔「つつ!!」

段々となのはの魔力弾を避けられなくなった…

なのは「どうしたの…?あれほど大口叩いておいて……………」

佑輔「ちっ！！」（空中だとなのはの思っツボだ……ならば！！」

ギョーン！！！！

佑輔は地上のスレスレまで降りてそのままバーニアで飛んだ…ビルを障害物にして被弾するのを防ぐためだ……だがなのはとてそんなに甘くはない……魔力弾を巧みにビルの間を縫い佑輔に向かわせた

……

佑輔「ちい……ならば……！！！」

パシュンパシュンパシュン！！

ダミーバルーンを出して…

ドゴオオオン！！！！

大爆発を起こさせ…その隙にビルの中に隠れた……

佑輔「………さて………と………落ち着け………なんとか接近戦で叩くしかない…だが…シールドも強い………ダメ元で………やってみるしかないな………よし！！！」

佑輔はビルから出てきた……

なのは「………どうするの…？まだやるの…？」

佑輔「あつたり前だ！！行くぜ！！！」

佑輔はシールドを構えながらなのはへと一直線に飛び始めた！

なのは「突貫するつもり…？それじゃ…スバルと変わらないよ！！」

ドドドド！！！！

容赦なく佑輔に魔力弾を撃ちまくる…だが…佑輔は止まらず…被弾しながらも…更に進んだ…そして…

佑輔「ここだ…！てえい！！！！」

シュバ！！

佑輔はなのはに向けてシールドをブーメランみたいに投げた…が…
なのははいとも簡単に避けた…

佑輔「そこだ！！フィンファンネル！！」

佑輔はビームライフルとフィンファンネルをなのはが避けた時間差で撃った！！

なのは「甘いよ！！！！」

佑輔「…甘い…のは…お前だぜ…」

なのは「え…？…はっ！？」

なのはは気付いた…佑輔がビームライフルとフィンファンネルを撃った先には…

バチン！！

シールドにあたり、その反射でなのはに不意打ちを喰らわせようとしたのだ…

なのは「！？レイジングハート！！」

ズガァー！！！！

計七本のビームがシールドによって収束…反射された…なのははシールドでなんとか受け止めたが…佑輔はその隙を見逃さなかった…

佑輔「もらったああー！！！！」

佑輔はビームサーベルでなのはに斬りかかった…

なのは「そうは…いかない！！！！」

なのははレイジングハートで佑輔のビームサーベルを受け止めた…その時！！

ピキイン！！！！

佑輔「！？」

佑輔の頭の中にイメージが流れた…

佑輔（……血まみれの…少女と……これは…ヴィータか……？……！
？この少女……まさか！！あの時の……！）

佑輔「なのは…お前は……？」

なのは「…私は……………」

バチン！！

佑輔「うおっ！？」

なのはは佑輔を弾き飛ばし魔法陣を展開した…

なのは「私は…私のように…苦しむ人を…出したくないから……………」

レイジングハート「ディバインバスター。」

ドゴオオオン！！

なのははまだ態勢を立て直せてない佑輔に向けて放った…

佑輔「つく！！！！うおおお！！？」

ドオオオオオン…

佑輔はそのまま地上に落下した……………

ティアナ「！？」

その時ティアナが目を覚ました……………

フェイト「佑輔え！？」

ティアナ「…………え…………佑…輔…？」

スバル「ティア！大丈夫？！」

ティアナは起き上がりスバルに聞いた…

ティアナ「そんな事より！佑輔は！？」

シュウウウ…

佑輔は仰向けに倒れていた…ダメージはあるが…動けないわけではない…だが佑輔は動かず…

佑輔（……………そうか……………なのは…お前も……………今の俺と…同じだったのか…だからこそ…願いがあつたんだな……………ならば…俺のとるべき道は！）

佑輔は立ち上がり……………なのはを見上げた……………

なのは「……………まだ…やるの……………？もう……………これ以上やっただって……………」

佑輔「そうだな……………今のまんまじゃ……………お前には立ち打ちできん……………」

フェイト「佑輔……………」

フェイトは安堵した…… 佑輔は敗けを認め……これで二人とも無事で……終われると……だが……

ヴィータ「……やけにあっさりだな……」

エリオ「え……？」

ヴィータは疑問に思った……

ヴィータ「アイツの性格を考えてみる……」

スバル「佑輔の性格？」

スバルのイメージ……

佑輔『だはははは……!! モッコリ……!!』

スバル「………（汗）」

エリオのイメージ……

はやて『この…ドアホ～～～！！！！（怒）』

バキイ！！

佑輔『あんぎゃあああ！？』

エリオ「……………（汗）」

キャロのイメージ…

佑子「あらあら～～」

キャロ「……………（涙）」

ヴィータ「お前ら……………佑輔の事どう見てんだ……………？（汗）特にキャロ…それは酷い…というかボツネタだからな…」

スバル・エリオ・キャロ「あ…あはは…ごめんなさい…」

いえ…案外また出番が回るかも？

ヴィータ「マジか!？」

ティアナ「あのね…（汗）そうじゃなくて…絶対諦めない…でしょ？」

ヴィータ「ティアナが正解だ…まあ…佑輔の性格があんなだということも認める…が!!!今のシリアスの状況に合わないだろ!？」

なのは「……………佑輔……………泣いてんの…?」

佑輔「なぜだろう…涙が止まらない…（泣）」

インターミッション~~~~ぶるあ!!!!

なのは「じゃあ…模擬戦は終……」

佑輔「ちょい待ち！！俺は終わらせるつもりはないぞ？」

なのは「……………結果はわかってるんだよ……？」

佑輔「今のまんまだと言ったはずだ……………ガンダム…解除……」

ピシュン……………

佑輔は ガンダムを解除した…

なのは「……………なんのつもり……？」

佑輔「こつから先は……………機動六課としての俺じゃないって事だ……ん……？」

佑輔は視線が一つ増えた事に気づいた…

佑輔「どうやらティアナも目を覚ましたようだな……丁度いい……………」

そして佑輔は大声で叫んだ…

佑輔「スバル！！ティアナ！！エリオ！！キャロ！！俺となのはの戦いをよく見ておけ！！そして……その心に刻め！！なのはの願いを！！お前たちの強くなりたいという想いを！！いいな！！」

ティアナ「……え……？」

エリオ「佑輔さん……一体なにを……？」

フェイト「佑輔……」

佑輔「さて……ここからは手加減なしで相手になってもらっぞ……
…なのは…俺も全力で行かせてもらっ…」

なのは「………全力……？今まで手加減してたとでも？」

佑輔「ガンダムの俺としては全力だったさ………だが……」

佑輔は背中に手を伸ばし………

スウ………ブンー！

佑輔「俺はこいつで相手をする……」

木刀を取り出した……

なのは「！？………木……刀………」

なのはは驚愕した……

なのは（まさか……佑輔……が……あの時の……？）

フエイト「!?!?」佑輔……嘘……でも……そんな……」

なのはとフエイトはまだ半信半疑だった……

佑輔（………思えば……あの十年前のあの二人は……魔法使いだったんだな……ふ……因果だな……）

佑輔は木刀を構えてなのはを見上げた……その表情は……今までの優しい笑顔の佑輔じゃない……剣士としての……佑輔だった……

なのは（佑輔………本気だ……木刀で魔法と戦う気だ………でも……もし……佑輔が……あの時の……私を助け……フエイトちゃんと刃を交えた……あの人なら………戦えば……わかるの……?）

なのはがなにか迷っているように見えた………

佑輔「………はあ………仕方ない……すう……!!空戦戦技教導官……!高町なのはは一等空尉……!!」

ピクウ……!

なのは「!?!?」

佑輔「今お前の目の前にいる男は、本気でやらなきゃ倒せない相手なんだぞ……!シャキつとしろ……!」

佑輔に一喝されたが……

なのは「で……でも………」

佑輔「ちつ……しゃあねえな………いいか！！今からお前に一撃を入れる！！ちゃんと防げよ！！」

なのは「え……？」

佑輔は叫んだ後……佑輔は……居合いの構えをした……

ティアナ（あの構え……あの時の……でも……空中にいるなのはさんに……どうやって……？）

フェイト「！！あの構え……まさか！？」

ティアナ「え……？」

ティアナがフェイトの声に反応した……その刹那！！

佑輔「東雲流剣術奥義！！疾空斬！！！！」

タアン！！！！

佑輔は凄まじいスピードで一気になのはの元まで飛び上がり……

なのは「！？レイジングハート！！」

佑輔「破っ！！！！」

バチン！！！！

なのは「きゃあああー!!」

佑輔の斬撃をシールドで防いだが地面に落ちていった……だが……なんとか態勢を立て直し……地面への直撃を免れた……そして佑輔も同時に地面に着地したようだ……

なのは「う……く……」

佑輔「よつと……どうだ？目え覚めたか？」

スバル「……嘘……」

キャラ「な……なんですか……今の……」

エリオ「……夢でも……見てるのかな……僕達……」

ティアナ「……信じられない……あれが……東雲流……

剣術……あの時の芋を砕いたのは……ホントに初歩の初歩だったんだ……」

フォワード陣は驚いていた……だが……四人だけではなかった……

ヴィータ「な……マジ……かよ……アイツ……あんな実力……持つて

たのかよ……」

流石のヴィータも驚きを隠せなかった……そして……

フェイト「あの技……間違い……ない……あの人が……来て……くれた
……やっと……会えた……会えてたんだ……私……」

エリオ「フェイトさ……え!？」

キャロ「フェ……フェイトさん!？」

ヴィータ「お……おい!？フェイト!お前……」

フェイト「……え……?」

フェイトは涙を流していた……そう……やっと会えたのだ……過去に
おいて刃を交え……そして……本気で励ましてくれた……あの人に

……

そして再会に涙を流れそうになったのはフェイトだけではない……な
のはもだった……だが……

なのは（ホントに……あの人だ……やっと会えた……でも……今は……）

そう……今は全力で自分に挑んでいる剣士だった……だが不思議と先
程の怒りは消えていた……ティアナへの怒りも……忘れるくらい……そ
う……嬉しいくらいだった……

なのは（私は……あの人に助けられ……教わったんだ……）

なのは（少女）「あ…あの…助けてくれて…ありがとうございます…」
……」

佑輔（15歳）「いやゝ助けたと言ってもボロ負けしたけどなゝ」

なのは（少女）「……………」

なのはは沈んだ顔をしたままだった……ショックだった……自分が
負けた事が……そして……あの娘の事……なにも聞けなかった自分が
……

ユーノ（……なのは……）

佑輔「……………」

コッソン！

なのは（少女）「あにゃ！？」

佑輔はなのはに軽くげんこつした…

佑輔（15歳）「なゝに沈んだ顔をしてやがる。そんなに悔しかった

たのか？」

なのは（少女）「……………コク…」

佑輔「だったら強くなつてまたチャレンジすりゃいいんだよ」

なのは（少女）「え…？」

佑輔は頭の撫でながら言った…

佑輔（15歳）「諦めなければ、いつか望みが叶うさ そうだろ？」

なのは（少女）「は…はい！ ありがとうございます！」

佑輔（15歳）「よし 笑顔になったな その意気だ」

二人が笑っていたがユーノはふと疑問に思った…

ユーノ（ねえ…なのは？）

なのは（少女）（なに？）

ユーノ（この人…どこから月村さんの家に入ってきたのかな？）

なのは（少女）（……………あ……………）

なのはも気づいた……

なのは（少女）「あ…あの…どこから入ってきたんですか…？（汗）」

佑輔（15歳）「え？その塀から……あ……」

佑輔も気づいた……

佑輔（15歳）「これって……不法侵入……？（汗）」

なのは「……………ですね……………（汗）」

三人「……………（汗）」

佑輔（15歳）「しまったあ……………好奇心のあまり……………ついやってしまったあ……………よし！俺帰る……！」

ガシイ！！ヨジヨジヨジヨジヨジ……

佑輔は塀をよじ登っていき……頂上につき……

佑輔「お嬢ちゃん！頑張れよ……！よつと……」

佑輔は飛び降りた……

佑輔「おわあああ……！思ったより高かったあああ……！（汗）」

ドスン……！

なのは「……………（汗）」

運が悪いのは大抵続くもの……

警察「あ……こらー！！そこでなにしてる！！」

佑輔「げっ！？ばつちり警察に見られたあああ！」

警察「こら待てえ！！！！不法侵入者……！！！！」

佑輔「ンノオオオ！？」

ダダダダ……

ユーノ（……………なんだっただろ……（汗））

なのは（さあ……あ……右足の怪我……大丈夫かな……？）

なのは（そう……教わったんだ……諦めない……不屈の心を……！！な
ら私は！！）

ジャキン！！

佑輔「……む……？」

なのはレイジングハートを構え…

なのは「東雲佑輔さん！！全力全開で…お相手願います！！！！」

佑輔「ああ……ならば……東雲流剣術が師範代！！東雲佑輔！！お相手つかまつる！！いざ！！尋常に！！」

佑輔・なのは「勝負！！」

次回に続く！！

ちよこつとオマケ…MINING編…

なのは「……もう言葉じゃわからないみたいだね……」

佑輔「お互いにな……ならば……」

フェイト『佑輔！ダメ！やめて！！なのはも落ち着……』

なのは・佑輔「肉体言語にて語るのみ！！！」

フェイト『……………はい…？（汗）』

佑輔「アタタタタタタタタ！！！！ほあちゃあああああ！！！」

なのは「てえい！！！！たああああああ！！！！」

ドガバキドガバキ！！！！

この戦いの後……………二人に奇妙な友情が芽生えた……………

フェイト「いや……………そんなシナリオないから……………（汗）」

次回に続く!!!

キャラ設定その2!!

しのめ
東雲 美奈 みな

10歳

佑輔の妹、三人兄弟の中で一番のしっかりもの。家事全般はお手のもの。

恋に恋する乙女…好みのタイプは優しい男性。

東雲流剣術を習っていたが…天武の才は佑輔以上…だがまだ小さい体故に…強盗犯に立ち打ちできず………佑輔の胸の中でその若い命を散らした……

享年10歳……

しのめ
東雲 明 あき

9歳

佑輔と美奈の弟、三人兄弟の末っ子で甘えん坊、純真無垢な性格でいつも佑輔と美奈に甘えていた。まだ10歳にならないが故に東雲流剣術は習っておらず…強盗犯に恐怖したまま……その小さい命を散らされた……

享年9歳……

オマケ……

しのめ
東雲 佑子 ゆうこ

25歳……

ボツネタでフェイトによって生み出された佑輔のもう一つの人格……
性格は温和でおっとりした優しいお姉さん。

口癖は「あらあら」「めっ！……ですよ？」

東雲流剣術を使えるが……その鋭さは佑輔以上……？

何故ここに書いたかというところ……作者が気に入ったらしく、もし
かしたら本編に影響させるかもしれないため……

第十六話：『想いと願いを込めた剣…後編…』……………とにかく叫ぼう！……………！

佑輔となのはのがチバトルが始まり……………幾数分……………

佑輔「行くぞ！……………なのはああああ……………！」

ブン……………！ガキーン……………！！

なのは「う……………？くう……………！！……………！」

佑輔の斬撃でなのは吹っ飛ばされるがすぐさま魔力弾を撃ち返した……………

なのは「レイジングハート……………！！……………！」

ドン……………！！ドンドンドン……………！！

佑輔「む……………！！……………東雲流……………風爆斬……………！！……………！」

佑輔も負けじと居合いの構えから斬撃の剣圧で生み出された衝撃破で魔力弾を反らしてかわした……………だが……………

ズキン……………！！

佑輔「……………！？……………！」

佑輔の体に異変が起きはじめていた……………

佑輔（ちい…やはり…まだ…く…このまま延長戦は…まずいな…体が…）

だが佑輔は平気なフリをしつつなのはに向かって行った…

ガキン！ガキン！！

なのは（流石…佑輔…いや…佑輔さん！！10年前よりも…速い！！）

エリオ「あの…フェイトさん…大丈夫ですか？」

フェイト「うん、大丈夫…取り乱してごめんね…」

キャロ「いえ…」

泣きやんだフェイトは佑輔の戦いを見ていたが……なにか疑問に思っていた……そしてそれはヴィータもだった…

ヴィータ「アイツ……なんか……おかしくねえか…？」

スバル「え？」

フェイト「うん…ヴィータも気づいた？」

ヴィータ「ああ…なんか勝負を…急いでねえか…？」

エリオ「そういえば…最初から…全力…なんでしょうか…？」

フェイト「でも…あんな飛ばし方…ちょっと気になるよ…」

そう…佑輔は急いでいた…まるで…早く決着をつけようとしているかのようだった…

佑輔「はっ…！だりゃ…！うら…！せやああ…！」

ガキン…！ギンギン…キン…！！

なのは「うっ…！」

佑輔のやまない斬撃をなのははフィールドで持ち堪えていたが…

ピキキ…

なのは「！？バリアが…！」

佑輔「今だ…！東雲流…！斬光閃…！」

ダン…！

佑輔は居合いの構えでなのはの懷に重く踏み込み……

佑輔「破あつ！！！！」

ブオン！！！！

力を込めた重い斬撃を繰り出した！！！！そして……

バキーン！！

なのは「きゃああああ！！！！！」

なのははまた吹っ飛ばされビルへ突っ込んだ……

佑輔「ハア……ハア……ハア……」

キャロ「なのはさん！？」

ヴィータ「なのは！？」

みんなは自分の目を疑った……あのなのはが……佑輔に吹っ飛ばされた事に……

エリオ「す…凄い…」

ティアナ「な……なのはさんを………」

みんなが感嘆な声を上げていたが……スバルはある疑問が浮かんだ

……

スバル「あのさ……なんで佑輔は…あんな力があるのに今まで東雲流を使わなかったんだろ？」

フェイト「え？」

スバルの疑問にフェイトも考えだした…

フェイト（そういえばそうだ……魔導士と互角に渡り合える実力を持ちながら……なぜ？わざわざ ガンダムを………？）

佑輔「…ハア…ハア……ハア……………」

佑輔は息を切らせながら黙ってなのはが突っ込んだビルを見ていた

……

佑輔（……………なのはにしては…あっけなさすぎる……

…！？）

「しまった!？」

ドゴオオオン!!

佑輔が気づいたと同時に砲撃魔法が飛んできた!!

佑輔「ちい!!!!」

佑輔はなんとか飛んで避けて着地した……するとなのはもビルから出てきた……

なのは「あちゃ……当てれると思ったのに……」

佑輔「残念だったな……そう簡単に……」

ドックン……

佑輔「う……けほっ……けほっけほっ……」

なのは「??佑輔?大丈夫?」

なのはは急に咳き込んだ佑輔を心配した……

佑輔「……平気……だ……ちょっと呼吸が乱れたただけだ……」

佑輔の体の異変は確実に起きていた……

佑輔（ちい……そろそろ……限界か……だが……まだまだ……倒れる訳には……もう少しだけ……もってくれ……!）

ティアナ「佑輔……なんか様子がおかしい……」

キャロ「なんか……顔色も……」

フエイト「佑輔……一体……」

それは最早あきらかだった……

なのは「……佑輔さん……もうやめ……」

佑輔「風爆斬！！！」

ドゴオオオ！！

なのは「！？」

佑輔はなのはが言い終わる前に奥義を放ち……なのはをかすめた……

なのは「佑輔さん！！」

ズキン…ズキン…

佑輔「つく………言った…はずだぞ…俺は……お前を倒すとな…！」

佑輔は体が悲鳴をあげながらもまだ戦う気だった……

なのは「どうして！？佑輔さん！！」

佑輔「ハア…ハア……俺達は……まだ……伝え……きれてない……
…からだ……つく…けほっ……けほっ！」

なのは「え…？」

佑輔「ハア…ハア……おしゃべりがすぎたな……さあ…続…」

ドクン…！

佑輔「うぐ…！！…う…けほっ…！！けほっ…！！………ゴフッ…！！
！ゴフッゴフッ…！！

」

遂に佑輔は片膝をつき…咳き込んだ……そして……

佑輔「ゴホッ…！！ゴホッ…！！」

ビシャ…！！

なのは「！？佑輔さん！！！」

佑輔は血を吐きだした……そして……なのはは駆け寄ろうとしたが……

佑輔「来るな！！！」

ビクウ！！

なのは「！？でも！！！」

佑輔「…ハアハアハア…」

フェイト「！！！？佑輔！！！」

エリオ「ゆ…佑輔さん！！！」

みんなも佑輔を止めようと飛び出そうとしたが……

佑輔「…ギロ……！！！！！」

スバル「！？！」

ティアナ「なっ！？！」

エリオ「うつ！！」

キャロ「ひっ！？」

ヴィータ「くっ！！」

フェイト「！？」

佑輔の放った殺気で足が止まった……

フェイト「佑輔……どうして！！」

佑輔『余計な……こと……するな……』

ヴィータ「バカヤロウ！！それ以上やったら！！！」

ヴィータが叫ぶも佑輔は聞きいれなかった……

佑輔「なのは……構えろ……」

佑輔は静かに言った……

なのは「……できない……できないよ……こんな事……意味ない

よ……」

なのはは泣きそうになった……

佑輔「甘ったれた事を言うな！！！！ティアナ達に……俺達のような道を歩ませたいか！！！」

なのは「でも！！私にはできない！！！！こんな事しなくても、言葉で伝えれば！！！！」

なのはは叫んだ……そして……

佑輔「……なら……何故ちゃんと伝えてやらなかった……」

なのは「！？」

なのはは気づいた……そうだ……自分はなにをやってきた……ただ厳しい訓練をこなさせ……その意味を……ちゃんと伝えていなかった……

なのは「あ……あ……」

佑輔「……そういうことだ……だが……言葉だけじゃ……伝わらない事もある……だからこそ……この戦いの意味を……見せなきゃならん……」

なのはは震えながら聞いていた……

佑輔「さあ……俺を倒してみせろ……でなければ……俺は……何度でも……」

スウ………

呼吸を整え……居合いの構えをとった……

なのは「う……うあああああ……！」

ジャキン……！

なのはは構えて魔法陣を展開した……その魔法陣は……

ヴィータ「あいつまさか……スターライト・ブレイカーを……！」

フェイト「そんな……！なのは……！」

佑輔「……デイベインバスター……いや……それよりでかい……それが……お前の最高の力か……」

佑輔は構えたまま願った……

佑輔（ティアナ…よく見ておけ…俺の全てをかけた…願いを…）

ピキイン！！！！

キャロ（え！？今のは…佑輔さんの…）

キャロは佑輔の心が感じ取れた…そう…佑輔の決死の覚悟が…キヤロを目覚めさせた…ニュータイプに…

ティアナ「もう…見てられない！！」

ティアナは飛び出そうとしたが…

ガシィ！！

キャロがティアナの手を掴んだ…

ティアナ「キャロ！！アンタ何を！！」

キャロ「行っちゃダメです！！佑輔さんは…佑輔さんは…伝えようとしてるんです…ティアさんに！！だから…だから…ちゃんと見ていてください！！！！」

フェイト「キャロ……あなた……まさか……？」

フェイトは驚きを隠せなかった……まるでキャロが……佑輔の心を代弁したかのように見えた……

なのははスターライトブレイカーのカウントダウンを開始した……

なのは（佑輔さんを……止めるには……倒すしかない……）

「5……4……3……」

一方佑輔は構えをしたまま……全神経を集中させていた……

佑輔（……なのはに勝つには……神速の踏み込みで懐に入るしかない……頼む……もってくれよ……）

そしてみんなが見守る中……二人の最大技が放たれた……！

なのは「全力全開……！……スターライト……ブレイカアアア……！……」

ドゴオオオ……！！

桜色の魔力の奔流が佑輔に向かって行つた……

佑輔「うおああああああ……！！……東雲流剣術……！……秘剣中

の秘剣！……」

ピシュン！……！

なのは（え……消え……！）

シュパ……！

なのは「！？」

なのはは自分の目を疑った……スターライトブレイカーが直撃する
という直前……佑輔の姿が消え……一瞬で目の前に現れたという現実
に……

佑輔「龍桜！……千刃斬！……！」

バババババ……！！！！

その時……私は見た……幾千の桜の刃が……私に斬りかかってきた
……そして……思った……

なのは（……綺麗……）

ドゴオオオン！……！！！！！！！！

フェイト「なのはあ……佑輔え……！」

フェイトは叫んだ……そして煙が晴れ……そこにあったのは……交差した後の二人だった……

なのは「……あれ……痛く……ない……どうして……？」

ふと後ろを振り向くと……

ポタ……ポタ……

なのは「!？」

なのはは驚愕した……立っている佑輔の背中から……血が流れている事に……

佑輔「……惜しかつ……たぜ……」

ドサ……

倒れたのは……佑輔のほうだった……

なのは「佑輔さん！！！！」

なのはは佑輔に駆け寄り抱き起こした……
そしてみんなも飛んできた……

フェイト「佑輔！！」

エリオ「佑輔さん！！」

ヴィータ「シャル！！大変だ！！！！すぐ来てくれ！！佑輔が！！」

ヴィータが通信でシャルを呼んでいた……

佑輔「う……く……よう……みんな……」

佑輔は弱々しく声を出した……

ティアナ「佑輔！」

ティアナは泣きそうになっていた……いや……ティアナだけじゃない……
フェイトやみんなもだ……

佑輔「ティアナ……俺達の戦いを見て……どう思った……？」

ティアナ「……無茶……よ……そんな……ボロボロになって……血まみれに……な……って……」

佑輔「……そうだな……無茶……だな……だけどよ……お前たちも……無茶ばかりやってたら……俺みたいにな……っちゃうんだぞ……？」

スバル「!?!?..... 佑輔..... それを..... 教えるために.....」

ティアナ「じゃあ..... 私たちが..... やってきたのは..... 間違い..... だったの.....」

佑輔「いや..... 全てが..... 間違いじゃ..... ない..... 確かに..... いずれは..... 必要な事だっただろう..... けどな..... 未熟なまま..... 無茶した戦法は..... いずれ身を滅ぼす..... 俺みたいにな..... そうだろ..... なのは.....」

なのは「うん.....」

スバル「なのはさん.....」

佑輔「なのは..... お前のミスは..... それを..... ちゃんと伝えなかったからだ..... わかるな.....」

なのは「はい..... ごめんね..... スバル..... ティアナ..... 私..... 教導官..... 失格だね.....」

スバル「そんな!?! 私たちも..... ごめんなさい!?!」

ティアナ「ごめんなさい!?! 佑輔..... なのはさん..... グス.....」

佑輔「ティアナ..... なのはの願い..... 聞きいれてやってくれ..... そして..... 強くなれ..... 誰にもバカにされない..... 誇り高い..... ランスターの弾丸を作りあげ..... うぐ!?! ゴフツ!?! ゴフツ!?!」

佑輔は言い終わる直前にまた血を吐いた.....

ティアナ「!?!? 佑輔!?!?!」

なのは「佑輔……もう喋っちゃダメ……！」

佑輔「う……く……なのは……二人は……ただ……不安な……だけなんだ……だから……強くなろうと……努力した……ゴフッ……！……だ……から……それを……ケンカなんて……言葉で片付けなくて……大事に……してやれ……頼む……」

なのは「わかってる……！だから……もう……」

佑輔は苦しそだが笑顔だった……

佑輔「へへ……サンキュー……うぐ……！……ゴホッ……！……ゴホッゴフッ……！」

フェイト「……！佑輔……！……しっかりして……！」

佑輔の意識は朦朧としていた……そしてふとフェイトを見ると……

佑輔「……あれ……あの時の……迷いの……女の子……？」

佑輔はフェイトが昔、自分と刃を交えたあの女の子に見えた……

フェイト「……！？佑輔……思い出して……！？」

佑輔はもう一度見た……そこにはフェイトが見えた……

佑輔「……そうか……フェイト……お前も……あの時の……そっか…………迷いは……晴れたか……？」

「フェイト……うん……晴れたよ……なのはのおかげで……」

佑輔は目を閉じ……言った……

佑輔「そっか…大きくなっ たな…一人とも…」

フェイト「佑輔……」

佑輔「わりい……ちと……休ませてくれ……疲れちまつ……」

佑輔はそのままにも言わなくなった……

ティアナ「佑輔？……佑輔！？」

スバル「佑輔！」

エリオ「佑輔さん！！！！」

「嘘……いやあああ……！」

佑輔「……………」

なのは「佑輔！！嘘でしょ！！目を開けて！！？」

フエイト「嫌…死んじやいやああ！！！！佑輔えええ！！！！」

皆に伝え……ここに……一人の男が散つ……

[illegible]

なのは「……………へ？」

フェイト「……………ゆ……………うすけ？（汗）」

佑輔「ただ疲れたただだ……………寝れば治……………ゴフア！！（吐血）……
きゅ……………」

ボタン……………

佑輔「……………すう……………すう……………」

なのは「……………どゆこと……………？（汗）」

フェイト「……………さぁ……………？（汗）」

ティアナ「……………私たちの悲しみを返しなさいよ……………（怒）」

次回に続く……………！！

第十七話：告白ってかなり勇気いるよね…（汗）

模擬戦が終わり……日も暮れた頃…ロビーで佑輔の体についてシャルが説明をしていた……

シャル「とりあえず佑輔は今よく眠ってるわ…体も通常の行動なら支障もないです。」

なのは「シャルさん…佑輔は…何故あんなに血を…？」

それはみんなが疑問に思っていた事だった…

シャル「検査してわかったんだけど…佑輔の剣術…すなわち東雲流剣術は今の佑輔にはかなりの負担がかかってるの…」

フェイト「負担？」

シャル「ええ…映像やデータを見たけど……かなり素早く動いていたでしょ？」

なのは「はい…私もいくつかの奥義は見切れませんでした…」

エリオ「あの素早さは……下手したらフェイトさん以上…ですよね？」

シャル「そうね…だからこそ…なのよ…」

キャロ「どういう事ですか？」

シャル「フェイト隊長の場合は魔力によって…その身体機能を上げて素早く動いてるの…けど佑輔は…魔力じゃなく筋力や呼吸法…体力面でその素早さを出しているの…だから体への負担がフェイト隊長とは比べものにならない位かかるの…」

スバル「……え〜と…つまり……？（汗）」

スバルはあまり理解できていなかった…（笑）

ティアナ「要は電力供給の違いよ…電力を他の所から供給されるか自家発電かってことよ…（汗）」

スバル「ああ！なるほど！」

スバルよ…もう少し勉強しましょう………

ヴィータ「しかし…よくそんな危なっかしい剣術が今まであったよな？」

ヴィータがふと疑問に思った事を言った…

シャル「今の佑輔って言ったでしょ？もし佑輔の体が万全な状態なら…使っても平気かも知れない…けど…」

その時フェイトは気づいた…

フェイト「……背中と…左胸の傷…」

シャルが頷き…説明を続けた…

シャル「そう…その傷のせいで…佑輔は東雲流剣術を…打てなくなってしまうているの…ただ…」

なのは「ただ…？」

シャル「きっとそれだけじゃないような気がするの…」

それはシャルの勘であつた……

そしてその後…出撃命令がでたが…ティアナは無茶な行動をとつた事で待機命令から外され…自粛するという形になつたが…ティアナはそれを素直に受け入れた……

……な場所…

「……歴史が…変わり始めました……本来は有りはしない歴史……佑輔…あの悪しきモノを倒すためとはいえ…貴方を平和な時から外してしまった事…申し訳なく思います……しかし…これは貴方の運命……貴方に流れる血の運命……どうか……負けないで……」

……」

?????『……………』

?????『あなたにも…迷惑をかけます…どうですか…? 佑輔は?』

?????『危なっかしい男ですが…仲間を想いやる心…それが彼の強さなのでしょう…私のマスターになるには…申し分ありません…いえ…それに…主の事を…任せられるかと…』

?????『そうですか…狭いクリスタルの中で申し訳ありませんが…彼の助けになって上げてください…』

?????『はい…』

美奈『お兄ちゃん!! 起きてよ!! もう朝だよ!!』

美奈はユサユサと佑輔を起こそうとした…

佑輔『…う…う…なんだよ…もう少しだけ…』

美奈『もう…仕方ないなあ…すう…起きなさい!!…このモツコリスケべあ兄い!!…!』

ズガン！！

佑輔『グルッポ！？』

美奈の木刀クラッシュ炸裂！！！！……………容赦ない妹です…（汗）

佑輔『お前な……………もちっと優しい起こし方はないんかい…（泣）』

美奈『お兄ちゃん相手に優しくしても得なんてないもん』

明『またやってる…（汗）』

そこへ明も現れた…

佑輔『なあ明…なあんで美奈はこんなに凶暴になったんだろうな？』

明『さ…さあ…？（汗）』

美奈『……………だあれが凶暴ですって…（怒）』

佑輔『いえ…なんでもありません…（泣）』

美奈『ほら…早く起きて答えてあげないと…あの人…待ってるよ？』

佑輔『あの人？』

美奈『お兄ちゃんの好きな人。』

佑輔『はい？（汗）』

美奈『はあ…自分の気持ちにすら気付かないなんて…バカでしょ？
アホでしょ？マヌケでしょ？』

佑輔『……………しまいにゃ泣くぞ…（泣）』

明『兄ちゃん…もう泣いてるよ？悲しいものが眼から流れてるよ…
（汗）』

美奈『なんて冗談はおいといて…お兄ちゃん…気付かないフリなんてかっこ悪いだけなんだからね？さっさと起きて…言ってあげなさいよ？じゃね』

佑輔「はっ！？」

佑輔は目を覚ました……………周りを見渡すと医務室だと言う事がわかった…そして隣に目をやると…

はやて「すう……………すう……………」

佑輔「……………はやて？」

はやてが椅子に座ったまま眠っていた…おそろくずっと佑輔のそばに居てくれたのだろう……

佑輔「……………はやて……………疲れてやがるのに無理しやがって……」

佑輔はベッドの布団をはやてにかけて……屋上へ出た……

屋上……

シュボ……

佑輔「すう……は………いつの間にやら真夜中………ってか………あれ………こういう日って……大抵なんかあったような………（汗）」

佑輔は何故かデジャヴを感じていた……

リン？「重病人発見です……！」

佑輔「ぶほっ……！」

佑輔はいきなり声をかけられてタバコの煙を思いきり吸いすぎた……

佑輔「ゲホッ……！ゲホッ……！」

リン? 「ほら、無理するからです。」

佑輔「今は明らかにお前のせいだろうが!」

リン? 「アハハ。まあまあ」

佑輔「まあまあで済ませる気だよ...このちっこいの... (汗) んで...
なんの用だ?」

リン? 「まあ用らしい用は特に...ないんですけど...お話ししようか
なって...」

佑輔「そっか。」

リン? 「はい...」

佑輔「.....」

リン? 「.....」

会話が途切れ.....いや...始まりもしなかった.....

佑輔 (あれ...なに...この空気の重さ... (汗))

リン? 「.....」

リン? は佑輔の隣でずっと星空を見上げてるだけだった...

佑輔「え」と...リィ... (汗)」

堪り兼ねて佑輔が声をかけようとしたが……

リン？「佑輔さん……」

佑輔「はい！？（汗）」

言い終わる前にリン？が話しかけた……

リン？「はやてちゃん……医務室にいましたよね……？」

佑輔「あ……ああ……いたけど……寝てたぞ……？まあ……疲れてたんだろうな……」

リン？「どうして疲れてるか……考えましたか……？」

佑輔「え？そりやまあ……部隊長だし……結構大変そうだしな……？」

リン？「そうですね……部隊長で大変なのに……佑輔のこと見てたんですよ。佑輔が医務室に運ばれた時だって……慌てて医務室に行つて……泣きそうになってたですよ……」

佑輔「……そうだったのか……」

リン？「なのに……はやてちゃんは……」

佑輔「へ？」

リン？「はつい数時間前の出来事を思い出していた……」

それは佑輔の容体が落ち着き…みんなが安堵した時だった…

はやて『よかった…ホンマに…』

リン？『……………はやてちゃん……………ちょっと話したい事があるです…』

はやて『え？なんや？』

リン？はそう言つて人気のない場所へ連れて行つた…

はやて『リン…一体なんなんや？』

はやてはリンがなにをしたいのかさっぱりわからなかった…ただリン？はなにか真剣だということはわかっていた…

リン？『……………短刀直入に聞きます……………はやてちゃん……………佑輔の事…好きなんですか？』

はやて『え！？な…なに言つて……………』

その時ははやてはリン？目を見てわかった…真剣だと…

はやて『……………なんとも思つとらんよ……………佑輔は大事な仲間や…それだけや…』

はやてはそれでも嘘をついた…

リン？『嘘です……リン……見たですよ……昨晚の事……はやてちゃん……泣くほど辛いのに……どうして佑輔にあんな事言っただすか！』

はやて『……そっか……見てもうたんやな……なあ……リン……今……みんな頑張つとるよな？』

はやてはリン？に問いかけた……

リン？『は……はい……』

はやて『なのに……部隊長であるウチが、色恋に浮かれとつたら……アカンやろ……？だから……』

リン？『でも！佑輔さんならわかつて……！』

はやて『でも……それは甘えや……もし佑輔がウチの事受け入れてくれても……今のウチは彼女らしい事……してやれへん……そんな……お互いに辛いだけや……それに佑輔……ウチの事好きかどうかからんしな……』

リン？『でも……佑輔……落ち込んでました……！』

はやて『……リン……この話はもうやめよ……ウチは……佑輔に……なんもできへんのやから……』

はやての弱腰にリン？は遂に……怒った……

リン？『はやてちゃんの……バカ！！！！だったら……だったら
佑輔はリンがもらうです！！』

はやて『え！？』

流石のはやてもこれにはびっくりした……からかってはいたが……まさ
か本気になっているとは思わなかったのだ……

リン？『リンは……佑輔が好きです！！だから……佑輔を悲しませ
たりはしないです！！』

そう言つてリン？は飛び去つた……

医務室……

はやて「リン……？……ゆ……夢……？」

はやてはリンとのやりとりを夢で見て考えていた……

はやて（リン………本気………やったな……でも……佑輔が本気でリン
を……ま……まさかな……）

ところがはやてはある危険な考えに至ってしまった……

はやて（いや…待てよ………そういや佑輔………キャラにはかなり優しく
かったな………もし…佑輔が…極度なロリコン…やったら…
？）

佑輔（狼ver（笑））『ぬははははあ！ロリッ娘いったきま
ああす！…！』

リン？『いやああ…！！』（泣）』

キャラ『おか…さん！！』（泣）』

ああ…無情………可憐な小さな乙女の純潔は…モッコリ狼の餌じ……

ドコオ！…！！…！！

はやて「………なんや…腹立つ通り越して殺意がわくわ………」

ピキイン…！！

佑輔「くくく!?!」

リン? 「??? どうかしたですか?」

佑輔「…………… (汗) いや… なんと… 殺意と不本意な感情が入り混じったような感じが…………… (汗)」

リン? 「はあ… (汗)」

フェイト「あの… はやて… 私たちはどこからツッコめばいいのかな? (汗)」

はやて「フェイトちゃんになのはちゃん!? …………… え〜と…………… アハハ… (汗)」

フェイトとなのはが呆れた顔をしながら現れ… はやては笑ってごまかした…

なのは「はあ… そんなに気になるなら佑輔に告白すればいいのに。」

はやて「… す…………… 好きやないもん… あんなモッコリスケベ……………」

はやてはとうとう意地を張りだした…

フェイト「そうなの？じゃあ私が告白しちゃおうか。」

はやて「へ…？（汗）」

フェイトが急に大胆発言をし…そして…

なのは「だめだよ、フェイトちゃん？私が告白するんだから。」

はやて「なんやて！？（汗）」

フェイト「ずるいよ、なのは。私が最初に意識したんだから。」

なのは「そんなの関係ないよ」 恋は惚れさせたほうが勝ちなんだから」

はやて「あ…あの…二人とも…佑輔の事…？（汗）」

二人『好きだよ？』

はやて「……………（汗）」

見事なコンビネーションにはやては絶句した…

はやて「でででも！！二人はははは！？隊長陣であって…」

フェイト「でも佑輔ならわかってくれると思うし…」

なのは「うん、確かにモツコリスケベだけど…思いやりはあるから。」

それも愛嬌だと思う。」

佑輔「ぶえつくしよい!!!」

リン? 「風邪…ですか?」

佑輔「いや…誰か…噂でもしてんのかな?」

はやて「そ…そっか…二人とも…意識してたんやな…」

はやてはショックだった…まさか佑輔の倍率がこんなに高いとは…だがこれでいいのではないか?二人のどちらかを選べば…きっと佑輔は寂しい思いはしなくなる…

はやてはそう考え出したのだ…だが…

はやて（……………胸が…痛い……………）

はやての心情を悟ったのか…なのは達は言い出した…

なのは「ねえ、はやてちゃん…佑輔はきつとはやてちゃんが好きだよ？」

はやて「え……………？」

フェイト「うん…昨日の晩…結構落ち込んでたし…」

はやて「そ…そうなんか…？」

二人は昨日の晩の事…そして一昨日のキス（未遂）の一部始終を見た事も話した…

はやて「……………／／／／（汗）」

なのは「はやてちゃん…素直になったほうがいいよ？」

はやて「でも…ウチは……………」

フェイト「はやては機動六課の隊長だからって言いたいんだろうけど…その前に女の子だよ？」

はやて「…フェイトちゃん……………」

なのは「じゃあ想像してみて？佑輔が他の女の子とデートしてると……………」

ゴウ！……！

フェイト「え！？（汗）ちょ……はやて……？（汗）」

はやて「……………（怒）」

なのはが言い終わる前にはやてが炎を纏っていた……ジェラスイ……
そして……

ゴウ！……！

ティアナ「……………（怒）」

キャロ（ティアナさん！？（汗））

スバル（ティア！？ちょっと落ち着いて！？（汗））

エリオ（バレちゃいますよ！？）

物陰から聞いていたティアナもまたジェラスイ……

なのは「……………（汗）だから！！佑輔の事、早く捕まえておかなきゃ…きつと後悔するよ?」

はやて「なのはちゃん…フェイトちゃん…」

フェイト「私たちなら気にしないで。」

（佑輔はきつと…私たちの事…妹のようにしか見てないから…）

はやて「……………ごめんな……………ありがとな……………」

なのは「お礼は上手くいっただよ ほらいったいった」

はやて「うん！！ありがとな！！なのはちゃん！フェイトちゃん！」

こうしてはやては佑輔の居る所へ走って行った…

なのは「私たち…友達思いだね…」

フェイト「そうだね…」

なのは「でもちよつと悔しいから…今度の模擬戦…佑輔を徹底的にこらしめようか?」

フェイト「うん、異議なし」

なのは「……………で…ティアナはどうするの?」

なのはは物陰に向かって喋りだした…

スバル「ギクツッ!! (汗)」

キャロ「バレバレですよ!? (汗)」

エリオ「……………アハハ… (汗)」

フェイト「スバルたちまで… (汗)」

フェイトは呆れていた…

ティアナ「……………私も…多分…女の子としては…見られていませんから…悔しいですけど…」

なのは「そっか…じゃ…ティアナも佑輔を懲らしめ隊に入る?」

ティアナ「…はい」

ああ…女の友情ここにあり…時には上司や部下の垣根を超えるモノなのだ…

エリオ「…さようなら……………佑輔さん…………… (泣)」

スバル「骨は…拾ってあげよ… (泣)」

キャロ「はい… (汗)」

リン？「貴方が……好きです……」

次回に続く！！！！

第十八話：それぞれの決着……リン？編……女の子の涙って強いよな……

リン？「貴方が……好きです……」

佑輔「!？」

リン？の告白に佑輔は驚いた……

佑輔の心情……

火山爆発!!

津波警報発令!!!

ハリケーン接近!!!!!!

ミニミニ佑輔ハニワの大作進!!

母さん、ビール!

佑輔（告白ううああああ!!）

だがその考えもすぐに吹き飛んだ……リイン？の目を見て真剣だという事が感じたからだ……

佑輔「リイン……お前……」

リイン？「……」

二人は沈黙していた……そして……もう一人……その場面に遭遇していた……

はやて（リイン……）

はやてだった……物陰からこっそり二人の様子を見ていた……

はやて（……なんや……また……胸が……いやや……こんな気持ち……苦しい……）

リン？「私は…私は佑輔を悲しませたりしません！ずっと傍にいます…！だから…！」

佑輔「……………リン……………」

リン？「だから……………私の…私のナイトに……………なっ……………」

リン？はまっすぐ佑輔を見つめながら言った…

佑輔（俺は……………どう応えればいい……………）

佑輔はわからなかった……………リン？は真剣に言ってくれた……………けど自分は…はやてを気にしている……………だけどリンを悲しませたくない……………そんな二つの選択に苦悩した……………

リン？「佑輔…リンは…佑輔のためなら……………」

そう言っ……………てリン？は目を閉じて……………佑輔からのキスを待った……………

はやて（…！？）

はやてはリン？が目を閉じたのを見ると胸の痛みが激しくなっ……………た……………

はやて（いや……………お願い……………やめて……………お願いや神様……………二人を……………止め……………

て!!！)

佑輔「……俺は……」

その時…佑輔の頭に夢で見た二つのヴィジョンが流れた……

美奈『お兄ちゃん…自分の心に気付かないフリがかっこ悪いよ?』

はやて『死んだらアカン!!お願い!ウチのために生きて!!!!』

佑輔「!?!」

(そうか……俺は…もう答えが…出ていたんだな…)

佑輔は決意し…リインに近づき…肩に手を置いた……

リイン?「佑輔……」

はやて(佑輔!?!いや!!やめて!!!!)

はやては見たくなかった……二人がキスをする所を……だが……

佑輔「…すまない……………」

リン「!？」

はやて（え…？）

佑輔はそう一言…リン？に告げた……

リン「……………ヒクッ……………グスッ……………」

リン？は押さえきれず泣き出した……

リン？「ど……………して……………どうして……………私じゃ……………ダメな
んですか……………」

佑輔「リン……………俺は……………」

リン? 「どうしてですか! ! ! 私か… 小さいから… ユニゾンデバイスだからですか! ?」

リン? は堪らず大声で佑輔に問いかけた… …… 本当の理由はわかっていた… だが… どこかで納得はできなかった…

佑輔 「そうじゃないんだ… リン…」

リン? 「じゃあなんですか! ! 私… 佑輔の為なら… なんだってできます! 受け止めます! !」

そう言つてリン? は上着とシャツを脱ぎ始めた…

佑輔 「よせリン! ! なにする気だ! !」

ガシ! !

佑輔はリン? を捕まえてやめさせようとした…

リン? 「離して! ! !」

佑輔 「だつたら脱ぐのをやめろ! ! !」

リン? 「! ?」

佑輔に怒鳴られ… 動きを止めた… …… だが… 涙が止まらなかった…

リン? 「そんなに… 魅力… ありませんか… …… グスッ…」

佑輔 「そんなことはない… お前は魅力的な女の子だ…」

リイン？「私…真剣…なのに…どうして…」

佑輔「真剣に言ってくれたからこそだ……」

リイン？「え…？」

佑輔「リイン…お前が俺を想ってくれたのは嬉しかった…だからこそ…俺は自分の心を誤魔化し…お前を欺いてまで、付き合う事はできないんだ…俺は、真剣なリインを侮辱したくない。」

リイン？「……佑輔……」

リイン？は落ち着いたのか…服から手を離れた…

リイン？「ごめん…なさい…私…」

佑輔「いいんだ…リイン…」

そう言つて佑輔は手を離し…リイン？は服を着直した…

佑輔「リイン…俺は…」

リイン？「……もう…なんにも言わないでください…わかってますから…」

佑輔「……すまん…」

リイン？「謝るのは私ですよ……ごめんなさい…それと…ありがとうございました…真剣に…応えてくれて…結果はどうあれ…嬉しかったで

す……」

佑輔「……そうか……」

リイン？「それじゃ……私……行きますね……」

佑輔「ああ……」

リイン？はそう言つて……ドアまで行つたが……途中で止まつた……

リイン？「また明日から……いつも通り……接してくれますか……？」

佑輔「もちろんだ。リインは俺の大事な仲……いや……家族さ……みんなもな。」

佑輔は笑顔で答えた……

リイン？「……ありがとう……おやすみなさい……」

佑輔「ああ……おやすみ……」

そしてリイン？は帰つて行つた……

はやて（リイン……）

はやては複雑な気持ちだつた……そして……感じた……リイン？の強さを……

佑輔はリン？が出て行ったのを確認すると……

佑輔「……………はやて…居るんだろ？出てこいよ」

はやて「！？」

はやては驚きながら出てきた…

はやて「いつから…気付いとったん…？」

佑輔「ついさっきだ…リンが出ていくちょっと前にな…」

はやて「……………そう…」

はやてはそう言つと佑輔の隣に座つた……………

一方……

リン？「はあ……………」

なのは「リン……………」

リン？「……………みなさん……………」

廊下を飛んでいるとなのはやフェイト……スバル達がリン？を出迎えた……

スバル「リン曹長……………その……なんて言ったらわかんないですけど……………」

リン？「スバル……………えへへ……振られちゃいました……………」

リン？は苦笑しながら言った……………

フェイト「無理して……………笑わなくていいんだよ……………」

リン？「だ……だめですよ……せつかく……………我慢……して……たのに……………う……う……う……………」

リン？が泣きそうになるとなのは優しく抱いた……………

リン？「なのは……さん……………うわあああん……………！」

リン？泣いた……………初恋のために……………そして……失恋に……………そしてみんなも泣いた……………ただ……エリオは違う意味で涙が出ていた……………

それは…告白をみんなが見ていた時…リン？が服を脱ぐ瞬間…

フェイト・キャロ「エリオ（君）は見ちゃダメ!!」

ドシュ!!

エリオ「ンノオオオ!？」

いわゆるサミングを喰らったからだった……だが本編にはなんの
関係もない事をここに記しておく……

次回に続く!

第十九話：それぞれの決着……はやて編……傍にいて……なんかいいよね……

佑輔はなにも聞かずただはやての隣にいた……

はやて「……なあ……佑輔……」

佑輔「ん？」

はやて「どうして……リインを振ったん……？」

佑輔「自分に嘘を……つきたくなかったからだ……」

はやて「……そう……」

二人はまた黙った……そしてまたはやてが話だした……

はやて「なあ……佑輔……ウチは……みんなの隊長さんや……それなりに……責任もある……」

佑輔「ああ……そうだな……」

はやて「だからウチ……隊長として……みんなの為に頑張らなアカン……」

佑輔「……」

佑輔ははやての話をなにも言わず聞いていた……

はやて「そんな事言っといたら…なのはちゃん達に…怒られても
うた…」

佑輔「……………辛いかな?」

はやて「……………うん……………辛い……………こんなにモヤモヤするの……………い
やや……………」

佑輔「そうかな……………」

そんなやりとりをしているのを…

ヴァイス（かああ！旦那……………なにしてた全く！！）

シグナム（ヴァイス…静かにしろ…）

なのは（バレたら大変なんだよ！もう！）

エリオ（佑輔さん……………どうしてなにも言っ
てあげないんでしょう…）

キャロ（八神部隊長…可哀想ですよ…）

フェイト（……………佑輔…）

みんな見ていた……しかも……六課全員だ……なぜこうなったか
という……リン？が泣きやみ……はやくと佐輔の事を見届けるため
にみんな屋上へ向かいドアから覗いていたのだが……

ヴァイス『なにやってんツスカ？』

ヴァイスが現れ……

シャル「あら？」

シャルが現れ……

シグナム「高町……なにをしている？」

シグナムも現れ……

ヴィータ「………なにしてんだ……（汗）」

ヴィータも現れ……

シャーリー「なんか面白そうですね……」

と言った具合にドンドン現れ……

なのは（なんか……大人数になったね……（汗））

フェイト（うん……（汗））

となったのだ……

二人はまた黙ってしまった……

佑輔（ど……どうすりゃいいんだ……（汗））

はやて（あ……アカン……いざ言おうと思っても……怖い……もし……今受け入れてくれても……）

はやてはその先を考えると怖くなった……彼女らしい事ができず……お互い辛くなるんじゃないか……と……

はやて（こんなんじゃないアカン……アカンのに……勇気を出すって……決めたのに……）

佑輔「な……なあ……はや……！？」

佑輔が堪らず声をかけてはやてを見た時……

はやて「う……ヒック……グスッ……」

はやては泣いていた……先が不安で……怖くて……

はやて「……ゴメ……困らせるつも……グスッ……なくて……」

佑輔「はやて……………」

フエイト（ちょー！？はやて、泣きだしたよ！？）

リン？（はやてちゃん……）

ティアナ（ああもう！！佑輔ったらなに泣かせてんのよ！！）

ヴィータ（ティアナ！落ち着けて！？）

シグナム（おのれ…佑輔め…斬る…（怒））

ヴァイス（シグナム姉さん！！レヴァンティンはマズイッスよ！？）

なのは（佑輔…はやてちゃん……………）

リン？（…はやてちゃん……………）

佑輔（俺は……………なにをやっている……………情けない……………はやてを不安がらせて……………泣かせて……………よしー！！）

佑輔がなにかを決め…行動しようとした瞬間……

佑輔「はっ!？」

なにかに気付き……横目で見ると……

なのは達「じいいいい……………」

佑輔（あ…あいつら!？…あれで隠れてるつもりか……………（汗））

はやて「佑輔…………ウチ…………ウチ……………」

佑輔「……………!!（汗）」

佑輔はこれから起こす行動に迷った…………が…………

佑輔（ええい!こうなったら仕方あるまい!!東雲 佑輔…………一世

ヴィータ（……………（汗））

シャル（結構酷いわね……………というか……………なんで女装したこと知ってるの…？（汗））

ヴァイス（よし！！そこだ！旦那！押し倒せ！！）

バコ！！

ヴァイス（フリーダム！？）

シャーリー（ちょっと黙っててください！！）

キスを終えては yet はまだ呆然としていた……

は yet 「……………／／／／／」

佑輔「……………あの…は yet …？／／／／／」

は yet 「あ…え…えと…ウチ……………あわ…あわわ……………／／／／／」

は yet はまだ何を言えいいのかわからなかった……………頭がまだ真っ白なのだ……

佑輔「…ほれ……／／／」

ギュ……

佑輔ははやてを抱きしめた……

はやて「ひゃ！？／／／／」

佑輔「ちつとは落ち着いたか？」

はやて「う…うん……／／／」（あ……なんやろ……この暖かさ……
…懐かしい……）

佑輔「どうした……？」

はやて（そや……この暖かさ……昔にも……）

佑輔「おゝい……？」

そしてはやてはポツリと……

はやて「王子様……」

佑輔「へ…？（汗）」

佑輔はいきなり言われた事がよくわからなかった…

はやて「間違いない……………この暖かさ……………１０年前…ウチを助けてくれた…王子様や……………」

佑輔「１０年前？」

はやて「うん……………車椅子……………言ったら…わかる？」

佑輔「車椅子……………」

佑輔はふと１０年前の公園の出来事を思い出した…

佑輔「あ……………ああああ！？お前…あの時の車椅子のお嬢ちゃんか！？」

なのは（１０年前って……………私達が会った時の事かな？）

フェイト（多分……でも知らなかったな…佑輔…はやてにも出会ってんだ……）

二人は意外な出会いがあつた事に驚いていた……

佑輔「そっか………歩けるように…なつたんだな……」

はやて「うん………今思えば………その時から………ウチ……」

佑輔「はやて………」

はやて「東雲 佑輔さん………」

佑輔「………なんだ？」

はやては今までの悩みを消し………そして………佑輔に告げた………
………

はやて「八神はやては……10年前から……東雲 佑輔さんが……
……好きです……ウチの……彼氏になってください……」

佑輔「ああ……喜んで。」

なのは（……負けちゃったね……）

フェイト（うん……でも……悪い気はしないね……）

ティアナ（はい……）

リン？（……）

シャル（リンちゃん……）

リン？（……わかってます……これでよかったですよ……
10年の重みには……届かなかったです……）

なのは（そんな事ないよ……リンはちゃんと勇気を出せた……でも……
私たちは……勇気すら……出せなかった……）

フェイト（うん……だから……リンは強かったよ……）

リン？（みなさん……ありがとうございます……）

ヴィータ（ま……これで色々と収まったんじゃないか？）

シャル（そうね……）

佑輔「でも……よく覚えてたな……俺はあの時髪短かっただろ？」

はやて「最初は佑輔やって、わからなかったよ……でも……この暖かさ
だけは……佑輔だけだよ……」

佑輔「そっか」

はやて「うん…／／あ…でも…」

佑輔「でも…？」

はやて「ホントに…ウチでええの？ウチ…やっぱり…隊長やから
…あんまり…彼女らしいこ…んむぐ！」

はやてがそう言おうとしたら佑輔は人差し指で口を塞いだ。

佑輔「今さらだろうが…それに！俺は隊長として頑張ってるお前が
…／／／／／」

はやて「ウチが…？」

佑輔はその先が言えなかった…何故なら…恥ずかしいからだっ
た…

佑輔「~~~~！／／／／／とにかくだ！！そのまんまのはやて
で入ればいい。そんで！疲れたり…甘えたかったら…俺に…頼れ…
それが…お前の彼氏である俺だけの役目だ…／／／／／」

はやて「……………」

はやてはポカンとした顔だった…

佑輔「…なんだよ…／／／／／」

はやて「佑輔って…実は照れ屋？」

佑輔「ぬぐ！？／／／／／」

顔がタコみたく真っ赤になった…

はやて「ぷ…アハハハハハ！…！意外や！…あの女好きの佑輔が！
！アハハハハハ！…！…！」

佑輔「〜〜〜〜！！！！／／／／／／／／／」

なのは（ぷ…………アハハハハハ！…！）

フェイト（なんか…………佑輔…可愛い…………）

スバル（スッゴい意外…（汗））

リン？（結構レアです…………うつうつ…私もあんな顔をさせたかったですう…！）

シャーリー（せっかくだから写真に収めましょう（笑））

ヴァイス（お前な…………（汗））

シャーリーは端末を操作してばっちり収めていた…

ティアナ（佑輔って…実は純情だったんだ……）

佑輔「てんめえ……いきなり振られたいんかい……／／／」

はやて「じょ…冗談や冗談……でも…スッキリしたわ……ありがとうな…佑輔…」

はやては笑顔で佑輔にお礼を言った…

佑輔「…お礼なら…今度ベッドの上で幾らでも聞いてやる……／／／／／」

はやて「……………エツチ…／／／／／」

佑輔「うるせえやい……………ふっ…／／／／／」

はやて「……………クス…／／／／／」

二人は笑い合った……さっきまで悩みが嘘のように……

エリオ（あの…フェイトさん…）

フェイト（なに？）

エリオ（なんでお礼を聞くのにベッドなんですか？）

フェイト（ふえ！？／／／／え…えと…あの…／／／／／）

キャラ（あ…私も知りたいです。）

フェイト（キャラまで！？／／／／／／／／／）

ああ…子供の純粋は時に凶器である…フェイトは答えに困った…

フェイト（ゆ…佑輔）！！！！後で覚えといてよ！！／／／／／）

はやて「さて…みんなには…ちゃんと言わなアカンな…うつ…」

どうやらはやてはなのは達の存在に気づいてなかったようだ…

佑輔「あゝ……その必要はないぞ……」

はやて「へ?」

佑輔「………もういいだろ!出てきやがれ!この野次馬ども!!(怒)」

なのは達「ギクウ!? (汗)」

佑輔に怒鳴られ、全員渋々出てきた…

はやて「んな!?!」

はやては驚いた…

なのは「い…いつから? (汗)」

佑輔「キスする直前… (怒)」

フェイト「え…えゝと…おめでとう…? (汗)」

佑輔「どうもありがとよ…コンチクショゝ… (怒)」

シヤマル「ま…まあまあ…皆心配だったんですから… (汗)」

佑輔「ああそうかい…ったく…まあいいや…そういう訳だな…」

なのは「うん…わかってるよ…けど…！」

なのはは佑輔に指を指して言った…

なのは「ちゃんとはやてちゃんに言わないとダメだよ！」

佑輔「え…？（汗）」

ティアナ「え…じゃないでしょ！なに恥ずかしがって肝心な事言わないのよ！隊長として頑張ってるお前が…なによ…！」

リイン？「そうですよ…！！ちゃんとと言わないと…私…諦められません…！」

フェイト「はやてもリインも…勇気出したんだよ？」

佑輔「……………（汗）」

なのは「それに…私達も…踏ん切りつかないよ…」

なのはは切なそうに言った……………そう…彼女達にとって…大事な事だ…決着をつけるために…だが…！！

佑輔「？？リインはわかるが…なんでお前達が？」

……………やっぱり馬鹿だった……………

なのは（……………全然気づいてないし……………（怒））

佑輔「~~~~~お…おれは…はやてが……………／／／／／」

はやて「ウチが…？」

佑輔「……………す…す……………すすすす…／／／／／」

キャロ「ファイトですー!!」

佑輔「……………す…す……………好きだ……………愛してる…だから
…ずっと…俺の隣にいてくれ……………／／／／／」

佑輔は茹で蛸になりながら言った…そして…

はやて「はい…ずっと…一緒に居ます…／／／／／」

はやても答えた……………

なのは「……………」

フェイト「……………」

ティアナ「……………」

リン？「……………決まりましたね……………」

ヴァイス「ああ…勝負ありだ……………」

なのは達の恋も……………ここで終わりを告げた……………決着がついたのだ……………

なのはとフェイトは…幼き頃の短き時の心の師匠だった…

リン？は機動六課で初めて佑輔と出会い…自分を女の子として見てくれた…

ティアナは佑輔の初の模擬戦の折り…自分を守り…尚且…なのはに合格をもらった……

それぞれの始まりは違えども…確かに…そこに恋心はあった…実りはしなかったが…きっと…彼女たちを成長させるに必要な…道であったことは…彼女たち自身で…理解するであろう……

命短し…恋せよ…乙女……

願わくば…彼女たちの実らなかった想いに…祝福あれ……

佑輔「……………いや…感動的なナレーションだよ
……………（汗）」

はやて「ウチらに祝福は…？（汗）」

え？ああ…おめでとつございます……

佑輔「ぶつとばすぞ…この野郎…（怒）」

シャル「あの〜」

はやて「なんや？」

シャル「子供は何人くらい作るんでしょう？」

はやて「ぶつ！？／／／／／」

佑輔「そつだなあ…三人くらい娘は欲しいなあ〜」

はやて「佑輔も答えんなや！！／／／／／」

佑輔「え…欲しくねえの…？」

はやて「う……そりゃ…欲しいやよ……けど……！……まだ式も挙げてへんやんか……！」

ヴァイス「……そこじゃないでしょ…（汗）」

ヴィータ「……まあ…まともには終わるのがこの作品だよな…（泣）」

シャーリー「でもいつもよりはほのぼのですよ？」

シグナム「というより…最終回っぽくないか…（汗）」

そんな事はありません！…まだまだ続きますよ！…！

佑輔「あ…そうなの…？」

当たり前です！…！

はい！ちよつと脱線しましたが場面を戻しますよ！…！

久々の…インターミッシヨ…ン…！！…ぶるあああああ！！…！！

なのは「佑輔…はやてちゃんを大事にしてね…」

佑輔「言われずともだ…」

ティアナ「もし裏切ったら……撃ち抜くからね」

佑輔「ああ……わかった……俺は……どんな時だって必ず……はやての所に帰るさ……」

はやて「佑輔……／＼／＼／」

佑輔は決意を新たに……また……新たな戦いへと身を投じる事になる……

……だが……きっと……彼は切り抜けるだろう……愛する者の所へ……
今はただ……佑輔の仲間に……そして愛する者の絆に……祝福を……

シャル「だから……なんか最終回っぱいのやめましようよ……（汗）」

次回に続く……！！

ちょこつとオマケ……

佑輔「そついや…ティアナとなのは…仲直りできたんだな？」

なのは「うん…佑輔のおかげだよ…」

佑輔「そつか…俺も体張った甲斐があつたな」

ティアナ「あ………」

ティアナは佑輔が血を吐いて倒れた時の事を思いだし………

はやて「ほいでも無茶しすぎやで…ウチ…泣いたんやから………」

佑輔「そうか…すまん…ん？ティアナ？」

ティアナ「………」

ティアナは涙を流しながら佑輔を見ていた…

ティアナ「佑輔も…兄さんみたいに…いなくなるの……？」

佑輔「………俺は居なくならんさ……お前のような危なかつしい妹
みたいなのがいる限りはな………」

その佑輔の言葉にティアナは思わず………

ティアナ「………兄さん！！」

ガシ！！！

佑輔「~~~~!？」

ティアナは佑輔に抱きつき泣いた…佑輔が兄と重なったのだ……

なのは「ティアナ……」

はやて「…………妹……お兄ちゃんも大変やな…………佑輔？……
い!？」

ティアナ「ごめ……………ごめんなさい！！もう無茶しないから！居な
くならないで!！」

ティアナは泣きながら佑輔に言った……………だが…佑輔は返事できな
かった……

フエイト「どうしたのははやて？蒼い顔して……………んなっ!？ち
よ!！！ティアナ!！」

ティアナ「へ？」

ティアナが見上げて佑輔の顔を見ると……………

佑輔「ブクブクブクブクブクブクブクブク……………（泣）」

涙を流しながら気絶していた……………何故ならティアナが抱きついた
衝撃で傷に響いたからだ……

ティアナ「キヤアアアア！？兄さん！！兄さぁん！！（泣）」

ティアナは混乱しだした！？オマケに佑輔を兄さんと呼びだした！！！！

シャル「……………みんな…一応佑輔…怪我人だからね…」

ヴィータ「んなこと言ってる場合か！！！！早く治療しろおお！！！！」

ちゃんちゃん

ちょこつと番外編というか、オマケ集…なのは決戦からはやての告白まで！！！！
………えゝ今回…かなり無茶苦茶です…なので…気分を害される可
能性もありますので、キャラ重視な方は見ない方が宜しいかと…
涙）

ちょこつと番外編というか、オマケ集：なのは決戦からはやての告白まで！！々

注：このお話は本編に関係あるようでないようなわけわからん話し
です…

第一オマケ：それは訓練場で起きた事…今回はとあるアニメからご
参加して頂きますな編！

キャラ「あ…あのお…佑輔さん…（汗）」

エリオ「どうして僕達…（汗）」

スバル「縛られて……っていうか！私だけなんかエロちつくな縛
られ方なんだけど！？（泣）」

どんな縛られ方かは…ご想像におまかせします…（笑）

佑輔「………なんで……だと…？（怒）」

佑輔は怒っていた……何故なら……

佑輔「お前ら…俺となのはが戦ってる時に…なにをイメージしやが
ったか…忘れたとは言わせんぞ…（怒）」

三人「ギクウ！」

佑輔「お兄さんは悲しいぞ…そういうイメージを持たれていたなんてな…」

ヴィータ「いや…事実だろ…（汗）」

なのは「否定のしようがないと思うけど…（汗）」

ヴィータとなのはは心配で付き添っていた…

佑輔「シヤアアラップ！！今回は！ちよこつと！お仕置きしたいと思います！！これも兄からの愛だと思い！望んでいただく所存也！！」

そう言つてエリオに近づき…

エリオ「あ…あの！！ごめんなさい！！すみません！だから許してくださいああい！！」

佑輔「ええい！黙れ！！お代官様の裁きを受けい！！必殺！！とある幼稚園児のお母さん秘伝！！グリグリ攻撃iiiiiiii！！」

両手の拳でエリオの頭を横から挟み…そして…

グリグリグリグリグリグリグリグリグリグリグリグリグリグリグリグリグリ！！！！！！

エリオ「アアアアアアアア！！！！痛い！地味に痛い！！！！」
？（泣）」

佑輔「おらおらおらああ！！！！！！」

チーン…

エリオ「……………（気絶）」

ヴィータ「お前…容赦ないな…（汗）」

なのは「でも思った程酷くないね…？」

佑輔「……………エリオは子供だから…」

なのは「へ…？」

佑輔「さあて…次は…」

チラッ……

佑輔はスバルを横目で見ると……

ビクウ！？

スバル「……………（汗）」

スバルは冷や汗が滝のように流れた……

スバル（いや…エリオがアレだったんだ…いくら佑輔さんだってあのくらいなら私は耐えられる…！……………はず…（汗））

佑輔「スバル…もしやエリオと同じくらいだと思っておるわけではあるまいな…」

スバル「……………え…？（汗）」

佑輔「ふっふっ…なんのためにお前をそんな縛り方をしたと思っている…」

佑輔は怪しさ大爆発な笑顔になった…

スバル「ちょ…！まさか…！（汗）だめですよ…！私に手を出したらはやてさんが…！」

佑輔「ふ…誰がそんな危ない橋を渡るか……………実はな…とある所から呼びよせた客じ……………怪物がいてな？」

スバル「なんで言い直したの！？てか言い直す意味ないじゃん！？」

佑輔「ではお呼び致しましよ…！！」

スバル「ちよっと！？人の話を聞いてる！？」

佑輔「おいでませええええ！！！！オクトパス！！！！中島ああああああ！！！！！！！！」

ザッバアアン！！！！！！

中島『タツコチュ〜！』

水の中から巨大タコこと、オクトパス・中島が現れた！！（原作知ってる人はわかるはず（笑））

スバル「ひああああああああああ！！！！？」

キャロ「巨大なタコ〜〜〜！！！！？（泣）」

なのは「（。。。；）」

ヴィータ「なんだありやああああああ！！！！？」

エリオ「……………（まだ気絶中）」

佑輔「なにつて…オクトパス・中島だが？」

ヴィータ「なに普通に言っただよ！！つかどっから連れてきたあああ！！！！」

中島『タツコチュ〜…』（訳：はじめまして、お嬢さん方。瀬戸内組のオクトパス・中島です。）

佑輔「え？瀬戸の海から？」

ヴィータ「どうやってだあああ！！！」

佑輔は暫く考え……

佑輔「……………まあ…番外編だから？なんでもあり？」

ヴィータ「お前…いつか各方面から刺されるぞ…」

ですよ〜…（汗）

なのは「アハハ…で…なんでオクトパス・中島さんの？」

佑輔「そりゃあ……………ナカジマつながりだから。」

スバル「そんな理由！？」

なのは「……………まさかとは思っけど……………」

佑輔「おや、お気づきになりましたか？」

そして佑輔は胸を張り！

佑輔「触手は漢のロマンです！！！」

なのは「やっぱり……………（汗）」

スバル「いやあああ！？私あんなことや、そんな事のエロス全開なんですかあああ！？」

佑輔「スバル…覚悟せえやあああ！！！！！」

スバル「イヤアアアア!?(泣)」

佑輔「オクトパス!!GO~~~~!!!!」

中島『タツコチュ』。(訳:まあ落ち着きたまえよお兄さん)

佑輔「ふははははは!?!オクトパス中島も……………ん?なんだって?」

中島『タツコチュ』。(訳:ここでそんなのやったらホントにマズイよ?)

佑輔「む…確かに……………しかしなあ……………」

中島『タツコチュ』。(訳:まあエロスは諦めるとしてちょっと任せてくれやせんか?)

佑輔「ふむ…なにかあるんかい?」

中島『タツコチュ』。(訳:まあ任せたまえよ)

キャラ「なんで会話が成立してるんですか…(汗)」

なのは「不思議だよね…（汗）」

ヴィータ「もう人間じゃなくなってきたんじゃないか？（汗）」

佑輔「では改めて…オクトパス！！GOオオオオ！！！！！」

中島『タツコチュ〜！』

スバル「キャアアアア！？」

触手がスバルに近づき…そして…

コチヨコチヨコチヨコチヨコチヨコチヨコチヨコチヨコチヨ
コチヨコチヨ…

スバル「キャハハハハハハハ！！？？くすぐ！くすぐったいい！？
いやああ！（泣）」

そこらじゅうくすぐった…

なのは「……………ねえ…佑輔…／／／／」

佑輔「うん……………これはこれで…エロいな…（汗）」

ヴィータ「絶対…殺されるぞ…作者…（汗）」

マジで！？

10分後…

スバル「ふにゃあああ……………／／／／」

佑輔「……………」

なのは「スバル……………合掌…」

チーン…

佑輔「さて……………残す所キャラオなのだが…」

キャラ「ひっ!?（泣）」

佑輔「うゝむ……………さて……………やはりエリオみたくやるか…」

キャラ「い……………痛いのいやです……………（泣）」

佑輔「じゃあオクトパス・中島の……………スバルでできなかった……………エロス全開で……………」

キャラ「ひにや!?（泣）」

佑輔「ロリッ娘の……………触手……………うゝむ……………アリなのかも知れんが……………これはなあ……………俺的にはなあ……………」

キャラ「私……………脱がされちゃうんですかあ……………（泣）」

佑輔「いやいや……………なにも脱ぐ事がエロスの全てじゃないのだよ、キャラ君。」

キャラ「そ……………そうなんですか……………?（汗）」

中島「タツコチュ……………」（訳……………論点がズレてますぜ?）

インターミッション！！！

佑輔「ふむ……………さて……………」

キャラ「う……………う……………ごめんなさい……………謝りますから……………許してください……………」
…（泣）「

遂にキャラは泣きだした……………というか……………ずっと泣いてるね……………（汗）

佑輔「…………………………（汗）」

なのは「どうするの？佑輔……………っていうか……………もう許してあげたら？みんな悪気はないわけだし……………（汗）」

ヴィータ（その割には……………キャラのイメージが一番ひどかったよな……………）
（汗）

佑輔「はあ……………仕方ない……………キャラ……………こっち向け。」

キャロ「うつ…なにするんですかあ…ヒック…（泣）」

佑輔は決めた…そして…

佑輔「デコピン。」

ペチン！

キャロ「ふみゃ！？」

佑輔「これで勘弁してやるか…」

スバル「ちよつと！？私たちはなんだったの…！！」

佑輔「お前な…小さい女の子が泣いてんのに酷い事できねえだろ…

（汗）」

スバル「……………佑輔のロリコン…」

スバルがボソツと言った…

佑輔「てめえ…マジでR18的な事になりたいか…（怒）」

スバル「嘘ですごめんなさい…（泣）」

佑輔「はい！つうわけでお仕置き終了了！」

中島『タツコチュ…』（訳：じゃあ、あっしも帰りやす。向こうで学校の先生をせなアカンきん。）

そう言つてオクトパス・中島は水の中に帰つて行つた…

佑輔「達者でなあゝゝ！！刺身にされんなよゝゝ！！」

なのは「だから…なんで会話が成立すんの…（汗）」

ヴィータ「……………誰か説明しろよ…（汗）」

そしてお仕置きを受けた三人のその後はというと……………

三人「おはようございます！！佑輔さん！！」

ザッ！！！！

三人は佑輔に敬礼していた……

佑輔「……………ちよつとやりすぎたな…（汗）」

暫く佑輔に逆らわなかったとさ…

第二オマケ：リイン？よ…お前はどこからそんな知識を得たなの！？

佑輔「と、こんなお代が出ました！！！！てなわけで……………ホントにお前…どこからそんな知識を得たわけよ…？（汗）」

リイン？「あの…はしより過ぎてわからないんですが…（汗）」

佑輔「あゝつまりだな…俺に告白してくれたろ？」

リイン？「……………はい…振られましたけどね…しくしく…（泣）」

佑輔「……………いや…ホントにすまん…（汗）」

リイン？「そう思うなら付き合ってください！」

佑輔「いきなり不倫しろってか!？」

リン?「大丈夫です!!!バレなきゃいいんです!!!」

佑輔「お前…段々キャラが変わってきてんぞ…(汗)」

フェイト「佑輔の悪影響じゃないの?」

佑輔「……………なんか意地悪に聞こえますが…(汗)」

フェイト「そんなつもりないよ?ええ、ありませんとも…全然気付いてもらえなかったからって、意地悪してる訳じゃないよ。」

佑輔「???俺なんか見落としたっけ??」

フェイト「……………」

リン?「……………フェイトさん…ここは怒るところですよ…」

フェイト「じゃあ遠慮なく」

ジャキン!

佑輔「え…あの…フェイトさん…?何故に…バルディッシュを構えていらつしやるので…(汗)」

フェイト「大丈夫…次第に感覚も…消エルカラ…」

佑輔「ちょ!!!!!!!!!!それってボコボコに滅殺します宣言~~~~!!?」

フェイトはじりじりと佑輔に近づき……

フェイト「死ぬわよ…私を見たものは…みんな死ぬんだから…」

佑輔「ちょ待てえい!!?それどつかで聞いたことあ……………あぎやああああああ!」

ズババババ!!!!

リン?……………デスサイズ…?いえ確かに武器は似てますけど…(汗)

合掌……………もとい…インターミッション!!!!

佑輔「あつたたた…ひでえ目にあつた…（汗）」

佑輔はなんとか起き上がった…

リン？「……よく生きてましたね…（汗）」

フェイト「ちゃんと手加減したから大丈夫大丈夫。」

あゝ…本筋に戻ってくださあゝい…（泣）

佑輔「おつとそうそう…んで…その…なんだ…」

リン？「はい？」

佑輔はちよつと言いにくそうだった…が…意を決して聞いた…

佑輔「あゝまああれだ…俺に告白した時に…お前脱いだじゃん…？
（汗）」

リン？「…う……………／／／／／／」

フェイト「え！？そうなの！？」

リン？「ぜ…全部じゃないですよ！？／／／／／／脱ぐ覚悟は

ありましたけど……脱いでませんですよ！？／／／／

佑輔「……でも危うくブラまで取れそうだったもんなあ……」

リン？「はうう……／／／／／」

リン？は顔を真つ赤にしてうつ向いた……そりゃ恥ずかしい極まりありませんわな……が……対してフェイトは……

フェイト「………佑輔……見たの……リンの裸………」

ゴウ……！！

フェイトはまるでスーパー○イヤ人よろしくなぐらいの怒りを覚えた……

佑輔「見てねえよ！？ちゃんと止めたからね！？いくら俺がモッコリスケベでも全年齢版だからちゃんと止めたからね！？」

フェイト「………ホントなの？リン……」

フェイトはリンに聞いた………ドスの効いた声で……

リン？「は……はいですう！？佑輔にガシつと両手で捕まえられて止められましたああ！？（泣）」

リン？も必死で答えた……（笑）

佑輔「なっ！俺無実よ！無実潔白だからな！？（汗）」

フエイト「ふうん…………でも佑輔…………一つ落ち度があつたわね…」

佑輔「へ…？（汗）」

フエイト「リインを捕まえたって事は……………リインの柔肌に触ったって事よね…（怒）」

佑輔「あ…………（汗）」

佑輔も気付いた…………

佑輔「いやしかしたな！？止めようと必死だったわけでしょ！！ほらリインもなんか言ってくれ！？（汗）」

佑輔はリイン？に一抹の期待をした…が…

リイン？「そう言えば…………佑輔…………指が私の胸に当たってましたですよ…／／／／／」

裏切られた…（笑）

佑輔「おいしい！！！！火に油を注いでるんじゃないかああ！？（泣）」

フエイト「……………ユ・ウ・ス・ケ……………（怒）」

佑輔「いや待て待て！！！！俺そんなつもりじゃないんだってばあ！？（汗）」

リイン？「……………で…本音は？」

佑輔「リインって結構胸あるよな？人間サイズなら正にボンツキュッボンじゃね？.....あ.....（汗）」

リイン？「やあんですう」

リイン？は喜んでいたが.....

フェイト「.....やっぱり殺.....いえ.....お仕置きしてあげる.....」

佑輔「今なんか殺すって言おうとしたああ！？（汗）」

フェイトはバルディッシュではなく.....短刀と一振りの剣を出し.....

フェイト「交わられし命に.....今もたらされん刹那の奇跡.....
.....」

フェイトはなにか呪文のような.....って.....どっかで聞いたような.....（汗）

リイン？『チガ チヲコバム.....

ココロガ ココロヲクダク.....』

ズバツ！ドカツ！ガスツ！

佑輔「げぶっ！ぶげれば！」

フェイト「時を経て.....ここに融合せし未来への胎動.....」

リン？『キセキハオトズレナイ

ユメナド……………

ソコニハソンザイシナイノダカラ……………』

ズバッ！！ズバッ！！

佑輔「ぐげ！れべっか！？（汗）」

フェイト「義聖剣！！！！！！！！！！」

リン？『アラガウカ！』

チュド……………ン！！！！！！

佑輔「じゅう……………だ……………す！？（泣）」

佑輔はまた吹っ飛ばされ……………いや……………やばくない？色々……………

フェイト「大丈夫だよ？刺されるの作者だし……………」

ひどい……………（泣）

佑輔「つか……………なんで俺ばかり……………（汗）ってかリン！！！！なにお前までノリノリなんだよ！？」

リン？「アハハ……………（汗）」

はあい…そろそろマジで本題に入ってくださいあい…

佑輔「あゝつまり俺が聞きたいのはですね…」

リン？「だからなんですか？」

フェイト「早く言ってみて？」

佑輔「……………脱線させたの誰だよ…」

フェイト・リン？「ごめんなさい…（汗）」

佑輔「はあ…つまりは…リンはどこであんな…その…まあ…保健体育みたいな知識を得た訳だ？」

佑輔は（やつとこさ）聞いたがリン？はあっけらかんと…

リン？「保健体育…って……………なんの話ですか？」

と逆に尋ねた。

佑輔・フェイト「……………はい…？（汗）」

リン？「リンは知りませんよ？」

佑輔「……………じゃ…じゃあ…なんで脱いだわけ…？（汗）」

リン？「単に佑輔を悩殺できるかと思っただけですよ？佑輔は女の子の裸が好きじゃないですか。」

フェイト「……………リン…もしかして…その先…知らない？」

リン？「その先？先なんかあるですか？」

佑輔とフェイトは顔を見合わせ……………

フェイト「ほ…ホントに…知らないみたいだね…（汗）」

佑輔「じゃあ！…あの受け止めるってなんだったのわけですよ！？」

リン？「それは……………佑輔からの…私への想い……………きゃああなに言わせるですかあ」

佑輔「……………（汗）」

ガクウ……………

佑輔はうなだれた……………

フェイト「は…ハハハ…（汗）」

フェイトは苦笑しかできなかった……

佑輔「なあ…フェイト…俺初めて…自分の選択がマジで正しいって…思えたよ…」

フェイト「うん…偉いよ…佑輔…（汗）」

二人は疲れてしまった…色々と…

リン？「あのお…」

佑輔「なんだよ…」

リン？「その先って…結局なんなんですか？」

佑輔「え…（汗）」

リン？「教えてくださいです！」

佑輔「はい！？」

フェイト「リン…それはちょっと…（汗）」

リン？「だめ…なんですかあ」（泣）」

リンは泣きながら言った…そして…

佑輔「……………フェイト…後任せた……………（汗）」

ドタタタタタ！

佑輔は逃げ出した！！！！

フェイト「え！？ちょっと！！（汗）そこで私に振るの！？」

リン？「フェイトさん！！」

フェイト「……………え…と…その…ね……………（汗）」

リン？はじいっとフェイトを見つめて聞いていた…そしてフェイトはタジタジになっていた（笑）

フェイト「だから…その……………あ…ほら…そういうのは恋人にならないとダメって事で…ね？（汗）」

フェイトは上手い事言った……………だが！！！！

リン？「でもフェイトさんは恋人じゃないけど知ってるですよね？」

フェイト「ギクウ！？」

リン？は甘くなかった！！！！

そして追い討ちをかけるかのように…

エリオ「あ、フェイトさん。丁度よかった。」

フェイト「エリオにキャラ？どうしたの？」

キャラ「あの…この前の質問の件なんですけど…」

フェイト「……………へ…？（汗）」

フェイトは嫌な予感がした…

キャラ「どうして佑輔さんは八神部隊長のお礼を聞くのにベッドの上じゃないとダメなんですか？」

フェイト「ええ！？あ…あの…その…／／／／／」

フェイトは最早混乱していた…（笑）

子供たち「じいいいい…」

フェイト「あ…あの！だから…その…あ…赤ちゃんは…コウノトリが運んでくるわけで…／／／／／」

フェイトはもう目がグルグル状態でなに言ってるかわからなかった…

エリオ「赤ちゃん？」

リン？「なんで赤ちゃんが出てくるですか？」

子供たちの疑問は更に増した…

フェイト「にゃ…にゃから…めしべと…おしべが…／／／／／」

キャロ「???」

フェイト「うきや~~~~!!もう許してええええ!!」(泣)

タタタタタ……

フェイトは泣きながら逃げ出した…(笑)

そして残された三人は……

リン?「……………なんだったんですか…?(汗)」

エリオ「さ…さあ…(汗)」

キャロ「赤ちゃんと…植物って……………なにか関係があるのかな?」

リン?「さあ…?」

子供たちとユニゾンデバイスの謎は深まるばかりだったとさ……………

次回に続く!!!!

ちよこつと番外編というか、オマケ集…なのは決戦からはやての告白まで！！！！

.....ガク.....（死亡）

佑輔「死んだか.....南〜無〜...」

超豪華番外編！！『Small Gentle Love』BY アルフォン

今回はアルフォンス様に頂きました、リイン編です！！！それでは
ご覧ください！！

「貴方が……好きです……」

「!？」

ラインの告白に、驚きを隠せなかった。
最初は冗談かと思ったけど、目を見れば分かる。

ラインは……本気だ。

「ライン……お前……」

「……………」

「私は……私は佐輔を悲しませたりはしません!! すっと傍にいます!! だから!!」

「だから……私の……私の……^{ナイト}騎士になって……欲しいです」

ラインは涙をボロボロ流しながら、だけど、それでも何とか勇気を振り絞って、自分の思いを必死に伝えてくる。

* * *

「……どうして……そこまで俺のことを……好きになってくれたんだ」

「……最初は、面白い人だなとは思っていませんでした。でも、ずっと佑輔と一緒に行動して、馬鹿やったりして……そして……」

「昨日……佑輔が倒れたとき……ぐす……胸が……張り裂けそうな気持ちになって……ぐす……」

「本当ははやてちゃんが、ちゃんと佑輔に告白するのでしたら、あきらめるつもりでした……でも、はやてちゃんは……はやてちゃん……は……」

はやてちゃんは部隊長だから、こんな時だから、恋愛は出来ない。確かにお仕事は大切です。

でも、それじゃ佑輔があんまりにも可哀想です……！
佑輔が、あんなにも泣いていたのに……

「佑輔がはやてちゃんのことを好きなのは知っています。でも、こ

れじゃ……佑輔が……あんまりですよ！！佑輔はずっと心が泣いていたってのに！！」

「な、何言ってるんだよ……俺は……別に……」

「嘘です！！誤魔化さないでください！！そうやって、また人知れずに心の奥底にしまい込んで！！」

佑輔はいつもそうです。

普段はエッチなことばかり言っていて、おちゃらけているけど、本当に悲しいときは隠そうとしてしまう。

そして、それを誰にも気づかせようとしない……

「佑輔……私じゃ駄目ですか……佑輔の悲しみを……苦しみを……一緒に分かち合えませんか」

「リイン……」

* * *

俺はリインがここまで思ってくれてるなんて思わなかった。正直、リインの場合、恋に恋する少女の恋だと思っていた。

だけど、それは違っていた。

リインは本当に俺のことを見ていてくれていたんだ。

俺の……

心の悲しみを……

「俺は……お前に……甘えて良いのか」

「当たり前ですよ。だって……私は、佑輔の全てを好きになっただけですよ。だから……」

そう言ってリインはそっと、その小さな両手のひらで、俺の頬に触れ……

「私には……佑輔の情けないところも……かっこいいところも……そして……心の悲しみも……全てはき出して欲しいです」

「リイン……俺は……俺は……」

「ここには誰もいませんよ。だから思いっきり泣いてください……」

「佑輔？」

「リイン……本当にありがとうな。お前がいてくれて、本当に良かった……」

「……私は、佑輔が……大好きな人が泣いているのを見たくなかっただけです」

自分の大好きな人が、泣いているのなんて誰だって見たくなんかありません。
私で佑輔の悲しみが少しでも癒せるのなら、どんなことだってします！！

「そのリインの優しさで俺は救われたよ……だから……」

「だから……今後も、俺をその優しさで包んでくれないか………できれば……ずっと……」

「……私の答えは、決まっていますよ。ずっと……一緒にいます……」

「リイン……」

「佑輔……これ付けてもらえませんか」

「これは……？」

私を取り出したのは、二つの指輪。

これはずつと昔にマリーに作ってもらった魔力変換の指輪。

これを付けると、付けた術者から魔力が供給され、付けた相手と短時間だけユニゾンが出来るようになる。

そして、もう一つの使い方は……

「これをつけますと、相手から魔力が供給されて、半日だけですが大人の姿になれるんです……但し、相手にもかなりの負担をかけてしまうんですけどね」

「それこそ今更だろ。苦しみを分かち合うのがパートナーだろ」

そう言っつて佐輔は、私から指輪を受け取り、自分の左薬指に付けてくれた。

「……その指に付ける意味……分かってますよね」

「そう言っ意味で……取ってくれよ……」

「ありがとっ……佐輔」

次の瞬間、私の身体は光に包まれ、姿も大きくなることができた。
佑輔が持っていた鏡を見ると、髪も腰まであり、胸もなのはさんと
まで行かないが、少なくともはやてちゃんよりは……間違いなくあ
る！！

「……すっげえ……可愛い……マジで」

「ありがとうございます。ねえ……佑輔」

「……キス……して欲しいです……」

私は瞳を閉じ、佑輔がキスをしてくれるのを待つ。

そして……

佑輔が私の頬に触れ……

自分の方へ抱き寄せ……

私と佑輔は……

月明かりが照らす空の下で……

キスをした……

*

*

*

「リインと佑輔……恋人同士になっちゃったね」

「せやな……」

「はやてちゃん……」

「ええんや……これは私が佑輔にちゃんと言わなかったせいや。誰のせいでもない」

私はどうしても佑輔のことが気になって、二人の様子を木陰からそっと見ていた。

だけど、後一步の勇気が無くて、ここで立ち止まっていた。

そして、リインは勇気を出して、佑輔に告白した……

あの時リインにちゃんと佑輔のことが好きだって言っていたら、もしかしたら変わっていたのかもしれない。
でも、現実には優しくはない。

二人は恋人同士になってしまったのだから……

「はやて……今日は付き合っよ」

「わたしも付き合っよ……今日は思いっきり飲もう。振られた者同士3人で!!」

「ありがとうな……なのはちゃん、フエイトちゃん。ああっ!!
今日は思いっきり飲むで!!」

佑輔……

私がもう少し勇気を出していたら、もしかしたら私達はつきあって

いたのかもしれないね。

リン……

私の分まで、佑輔のこと幸せにしたってや……

*

*

*

「なんか……恥ずかしいですね……」

「まあな……」

あれから私達は、少し星を見た後、佑輔の部屋に来て、ベッドに座って二人で寄り添っていた。

こうして佑輔の体温を感じていると、本当に温かい。

恋人同士になって、気持ちが通じ合って、こんなに心が温かいん

ですね……

「佑輔……」

「リイン……」

今の私と佑輔に余計な言葉はいらないです。
お互いにどちらからともなくキスをし、そのまま何度も大人のキスを繰り返し、息継ぎをする度に銀色の糸がお互いの唇の間にできあがっている。

「お前……こういうこと知っていたんだな」

「知識だけ……ですけどね。でも……佑輔が初めてなんですからね」

「リイン……」

「佑輔……私を……抱いてください……」

「ああ……リインの全てをもらうからな……」

そう言って佑輔は私の上着を脱がし、ブラの上から優しく胸を揉み

し抱く。

「あっ……んん……はぁ……」

「可愛い声だな……もっと……感じてほしいな」

さらにブラも取って、直に胸に触れ、私の身体に電気が走った感覚が襲う。
その後も全身を求め……

「佑輔……これ以上は切ないです……きて……欲しいです……」

「ああ……いくぞ」

私と佑輔は……

月明かりが照らし部屋の中で……

初めて結ばれた……

*

*

*

「えへへ 佑輔」

「どうしたんだ、そんなに甘えてきて？」

俺たちが結ばれ、少し休んだ後、起きてからリインはこうやって甘えてくる。

「だって、後1時間で指輪の効果が切れてしまうんですよ。また使うには6時間チャージが必要ですよ……」

指輪をまた使うには、6時間のチャージが必要になる。

これは連続で使わないようにセーフティのためだ。

これは相手に通常の倍以上の負担がかかるから、あんまり連続では使えない。

今も少し倦怠感があるしな……

「ごめんなさい……これは……佑輔に負担がすごくかかってしまっ
んです」

「いってことさ……その分、リインのそのグラマラスなボディを、
たあぷり堪能するからよ」

「ばか……スケベ……でも、良いですよ。私だけを見てくれれば……
…良いんです」

「リイン……」

そう言ってリインは頬にキスをしてくれた。

「えへへ……佑輔、大好きですよ」

なんか……すっげえ……照れる。
でも、それ以上に心が温かくなる。

リイン……絶対大切にするからな……

*

*

*

3年後

「佑輔、ほら、早く起きてください!!」

「……うーん……もう少し……寝かせろよ……」

「駄目です!! 遅刻しちゃいますよ!!」

「そんなこと言っただって……昨日はお前が寝かせてくれなかっただろっが……あんなに何度も求められたんだからよ……」

「ば、ばか!! 何言ってるんですか!!」

機動六課が解散してから、3年が経った。
俺とリインは正式に付き合うようになり、今はクラナガンのマンションで同棲している。

デバイスだから、結婚とかは出来ないけど、それでも俺たちは幸せだった。

でも、ここまで来るのには色々苦難があった。

はやてに正式に話を付け、それが認められても、ヴィータやシグナムから決闘を申し込まれ、その決闘で、何とか一撃を入れることが

出来、ようやくヴォルケンリッターの連中から認められたのだ。

ちなみにザッフィーとシャマルは最初から好意的だったから、そんなに問題はなかった。

「もう……本当に遅刻してしまいますよ。この姿でいられるのは、後30分だけなんですよ……！」

「だったら……いつものしてくれよ」

「えっ……いつもの……ですか……もう……今日だけですからね」

顔を真っ赤にしながらも、リインはほっぺにキスをしてくれた。

「サンキュー、やっぱりこれがないや朝が始まらないよな……！」

「……ばか」

「帰ったら、いっぱいしような……！」

「このスケベ大将……さっさと行くです……！」

「ははは……！ それじゃ行ってくらあ……！」

人とデバイスの大分変わった恋……

だけど、俺とリインは本当にお互いを必要とし合い、大切な存在と
なっている。

リインの優しさのおかげで、俺は心の闇を消え去ることが出来た。

だから、今日も俺は俺でいられる……

大好きなリインがいる限り……

俺たちの未来は、きっと優しいものだから……

超豪華番外編!!!『Small Gentle Love』BY アルフォン

いやゝ感激ですね…まさかここまでして頂けるとは…

佑輔「お前も見習え!」

……………努力します……………(汗)

またまた番外編！！今日はゲストのフィル・グリード君……………カァアモン！！

うつ……………頑張っ て書いたのに……………なんか…もう無茶苦茶です……………（泣）

またまた番外編！！今日はゲストのフィル・グリード君……………カアアモン！！

とある地区の…とある荒野…

毎度おなじみの笑う角には福来やがれの主人公、佑輔はスバルとエリオとヴィータでこの地区に現れたガジェットを殲滅しに来ていた。

ドツカアアン！！

佑輔「はい！終了。」

佑輔の放ったビームライフルで最後の一機を貫いた。

スバル「いやぁ今回は楽しかったね。」

エリオ「ですね。でもなんだってこんな所に現れたんでしょうね？」

ヴィータ「それを調べに来たんだろ？ほらとっと探すぞ。」

スバル・エリオ「はい！」

こうして三人は辺りを探しだしたが佑輔はなにか気にかかった。

佑輔「……………なんだ…この感覚……………あっちか？」

まるで何かに呼ばれたかのようにその場所に向かった……………そして…
不思議な岩を見つけた…

佑輔「なんじゃこりや……………にしても…違和感…が…まさか動きや
しないよな…」

試しに押してみた……………

ゴゴゴ…

ホントに動いた…（汗）そしてそこには……………

佑輔「宝箱おおおお！？」

佑輔は叫んだ…これまたよくゲームにありそうな宝箱だったからだ…

スバル「なにになに？宝箱？」

三人も集まってきた…

エリオ「なんですこれ？」

ヴィータ「とりあえず下手に触ったりすると危ないからはやてに連絡して…」

佑輔「なつかみはなんでしょね」

ガチャ…

ヴィータが言い終わる前に佑輔が開けた…

ヴィータ「お前なにしてんのおおお!？」

佑輔「え?だって宝箱だぞ?中身が気になるJAN?」

さもあつけらかな佑輔、きっと彼は宝があれば一目散に飛び付くタイプなのかな?

ヴィータ「バカ!!!爆発したらどうすんだ!?罨かも知れねえだろ!!!」

ヴィータのお怒りもごつとも。しかし……

佑輔「ああ、大丈夫。その時はみんなでアフロだから。」

あくまでギャグ思考な佑輔だった…

そこでふとスバルは想像した…アフロになった自分たちを……

スバル「……………ぶっ……」

エリオ「す…スバルさん…?(汗)」

スバル「あはははははは!!!!!!なんか面白そう……!特に佑輔とヴィータ副隊長が!!!あははは!!!!」

スバルは大笑いした……どうやらツボに入ったようだ…

エリオ「……………（汗）」

ヴィータ「だったら…おめえがまずアフロになるか…？（怒）」

ヴィータはグラーファイゼンを構えて怒気を放っていた…

スバル「ご…ごめんなさい…（汗）」

スバルとヴィータがミニコントしている最中…佑輔は宝箱の中に入っていた物体を調べていた…

佑輔「さてさて…スバルが極度のバカって事が証明されたところで…」

スバル「ひどい！（泣）」

佑輔「ふゝむ……………こりゃまた……………よくわからんもんがでたなあ…しかも二つ…」

そう宝箱には二つ入っていたのだ…一つはリモコンっぽい時計…もうひとつは赤い結晶体…

エリオ「こっちの赤いのは…なんか綺麗ですね…」

ヴィータ「そうだな…なあ佑輔。これもある一種のクリスタルじゃないのか？」

そう、赤い結晶体は大きさは違えど佑輔が首から下げてる小さなクリスタルに似ていた…

佑輔「うん。けどこの胸のクリスタルにも俺の体の中のクリスタルにも反応はねえなあ。」

確かにクリスタルっぽい形ではあるが、なんの反応もないところを見ると別物だと判断した…そしてもう一つのほう……

エリオ「なんていうか……怪しさ大爆発ですよね……（汗）」

スバル「そうだね…なんだろうね…（汗）」

ヴィータ「とりあえず下手に触らずに持ち帰って調べるしか…」

とヴィータがまた言い終わる前に……

「ん？これかな？ポチツとな。」

ポチッ
…

ヴィータ「だからにしてんのお前はああああああ！！！！！！！！！！」

ヴィータまたもやツツコミ。

佑輔「え？だってスイッチがあつたから。」

「ヴィータ、だからなんで勝手に押すんだよ！！なにが起こるかかわからないだろうがああああ！！！！ちよつとは考えろよ！！！！」

そんな時だった…佑輔が触ったりリモコンから色々な画面が空中に出

た。

エリオ「うわ！なんか表示されて…ていうか…立ち上がってますよ！？」

ブウンブウンブン…

佑輔「なんだこの文字……………」

その画面に表示された文字はわからないものだった…

ヴィータ「古代ベルカ文字…でもないな…なんだこりゃ…」

スバル「ヴィータ副隊長でも読めない文字って……………なんか危険な気が…（汗）」

エリオ「ですよね……………あ…」

エリオは一つの画面に気付いた……

エリオ「佑輔さん、これ…なにか選択しろって…ことですかね…？」

佑輔「ん〜？……………まあ…おぼろげだが…O…K？or…cancell…かな？」

そつ…その画面は選択を求めていた…そしてヴィータは佑輔を睨みながら言った…

ヴィータ「佑輔……………わかってるよな…」

佑輔「わ…わかってるって…さすがにこれはやばそうだから…無
論キャンセルだろうな…」

佑輔もわかっていた…そしてキャンセルしようと手を伸ばした瞬間…

佑輔「へくし！」

ポチッ！

エリオ「……え……？」（汗）

スバル「……や……やつちやつた……」(汗)

「佑輔へ？」

佑輔が画面を見ると……自分の指は……cancelではなくOKを押していた……

ヴィータ「お〜〜ま〜〜え〜〜な〜〜！！！！！なにお約束してくれてんの！？」

ヴィータの我慢も最早限界だった。（笑）

佑輔「いや！……まて！……今のは事故だ！……不幸な事故ってやつだって！……」

ヴィータ「やかましい！！この天然モツコリバカがああああ！！」

エリオ「ちょー！今そんな事してる場合じゃー！」

一方………

とある異次元空間… フィルは過去へ跳ぶため… アルテミスの力を借りるはずだったが…

アルテミス「……………」

フィル「どうかしたのか？」

アルテミスはなにか違和感を感じていた…

アルテミス「……………」何者かがこの空間に干渉しています…」

フィル「な…！？まさか……………」クアットロか！でもこんな空間に…まさか…」

アルテミス「いえ…悪意は感じません……………」むしろ……………」

フィル「むしろ…？」

アルテミスは佑輔の存在を微かながら感じた…

はたまた荒野では…

あ、セイヤ！あ、セイヤ！あ、セイヤ！あ、セイヤ！

ドンドコ！ドンドコ！ドンドコ！ドンドコ！ドンドコ！ドンドコ！

佑輔「とまってええ！！！！頼むからとまれええええ！！」

佑輔は必死に装置を止めるため悪戦苦闘していた……そして後ろではヴィータ達はオロオロ中……何故か筋肉マツチヨ隊は踊っていた……（笑）

佑輔「もう浮気はしません！！ナンパもしません！！はやて一筋になります！！！！女装も辞さない覚悟であります！！！！だからとまりやりれええええ！！？」（泣）」

機動六課隊舎……………

今日は平和な機動六課……………隊長陣たちは午後のティータイムに入っていた……………この後起こる事件を予想せずに……………

はやて「今日も平和やな」……………

なのは「はやてちゃん……………だらけすぎだよ（汗）」

フェイト「そうだよ……………ヴィータ達が任務に行ってるのに……………」

二人ははやてに注意した……………そりや当然だ……………まるでもう少ししたらスライムヨロシクなくらいのだらけ方だからだ……………（汗）

はやて「いやゝごめんごめん……………でも今回は楽な任務やで？そんな強力なガジェットはおらへんし。ガジェットを撃退してなにが原因かを調べるだけやで？」

フェイト「でもさ…」

フェイトは真面目な顔をして……………

なのは「でも…?」

フェイト「あのナチュラルボーン・トラブルメーカーと一緒になんだよ?（汗）」

みなさんお分かりでしょうか?そう…佑輔の事でございます。

なのは「…フェイトちゃん……………（汗）」

はやて（よつぽど…振られたのを根にもっとるんかな…（汗））

二人はフェイトの発言に苦笑するしかなかった…そんな時…リイン?から通信が入った…

リイン?『はやてちゃん、エリオ君から通信が入ってますよ。』

はやて「ん?もう終わったんかいな?」

予定よりもちょっと早い気がしていた…しかし…

リイン?『はあ…（汗）それがなにやらかなり慌ててまして…（汗）』

はやて「なんや?トラブルでも……………
…まさか…（汗）」

なのは「……………私…イヤな予感してきたの…（汗）」

二人はなにかに気付いたようだ…そして…

フェイト「……………ナチュラルボーン・トラブルメーカーが
……………（汗）」

容赦ない一言です…（汗）

はやて「とにかく繋いでくれへん？」

リイン？『了解です！』

リイン？が返事をした後…すぐさま別ウィンドウが開かれた……………
エリオ『フェイトさあ…ん！！！！救援をおおおおお！！！！！！！！！！』

なのは「うわ！？」

フェイト「え…エリオ！？」

エリオがドアップで助けを求めている…

はやて「と…とりあえず状況を教えてえな！（汗）」

スバル『そ…それが……………佑輔さんが…ちょっと…（汗）』

スバルは言いにくそうだったが…変わりに……………

ヴィータ『簡単に言うと……………ハマしやがった……………いや……………してる最

中だ……」

ヴィータの表情を見て三人はなんとなく予想がついた……

はやて「もしかして………なんか見つけて………いじった……？（汗）」

画面の向こうの三人は一斉に頷いた………そして画面の端っこの方………なにか光ってる………

なのは「ねえ………もしかして………あそこで光ってるの………佑輔？」

なのはが気付いた場所をズームアップすると………未だへんな文字の画面に囲まれながら悪戦苦闘する佑輔………と何故か踊りに激しさが増した筋肉マツチヨ隊………

あ、セイヤセイヤセイヤセイヤ！セイヤセイヤセイヤセイヤ！

佑輔「ぬがあああああ………これか………これか………これか………それともあれか
あああああ………！！！！！！」

ガチガチガチガチガチガチ………！！

無造作にボタンを押しまくってるせい………余計悪化してるようにも

見えた…（汗）

フェイト「佑輔！…落ち着いて！…とにかく落ち着いて対処して！
」

佑輔『は…そうだ…落ち着いて…考えて…』

フェイトの助言で頭を冷やそうとした……

佑輔の脳内……

佑輔A（あれこれ押してもダメなんじゃね？）

佑輔B（つか、元々俺って…機械に弱くね？）

佑子（じゃあどうしましょう？）

佑輔C
「…はな…」

佑輔（議長）（破壊しかありません！）

佑輔、s（オー！）

佑輔^{ところで}
A

佑輔B（お前誰？）

佑子（あらあら）
（

チーン！

佑輔脳内会議終了！

佑輔『ぶち壊してくれるわあああああああ！！！！！！』

なのは「えええっ！？そんな結論！？」

押してもダメなら…壊してしまえ！！！！それが佑輔の結論だった

……

ガシャン！！！！

佑輔がビームライフルを構え…撃とうとした瞬間…

リモコン『

』

（訳：データ入力完了…時空間軸固定…アクセス開始…）

ガカツ！？

リモコンが妙な音声を出し…蒼い光が天空を貫いた！

佑輔『な！なんだああ！？』

はやて「アカン！！佑輔！離れて！！！！」

はやては指示を出したが…佑輔は間に合わず光に包まれた…

佑輔『うおおおお！？』

？？な空間…

ピキキ！！

フィルのいる空間にひびが入り…そこから蒼い光が漏れだしていた…

アルテミス「！？」

フィル「な！なんだ！！」

二人が驚いた瞬間…

パリン！！！！

蒼い光が空間を突き破り、フィルを包み…そしてそのまま割れた空間に引きずり込もうとした…

フィル「うわー！なんだこれ！！！！」

アルテミス「フィル！？」

アルテミスが手を伸ばしたが…その手は届かず、フィルは空間に飲まれた…

フィル「うわあああああああああ！？」

はたまた荒野…

キュウウン……………

リモコン『〃 < > 』

（訳：アクセス完了…時空転移…完了…エネルギー不足のため…機能停止…）

光が消え…………その場には…佑輔と機能が停止したりリモコンだけだった…

佑輔「う…く……………」

佑輔はゆつくりと眼を開いた……

佑輔「……な……なんだ……なにも起こってねえ……？」

はやて『佑輔！！無事なんか！？』

はやてが通信で佑輔に呼びかけた……どうやら変わりはないらしい……

佑輔「あ……ああ……どうやら、無事らしいな……」

佑輔が安堵した瞬間……

ヴィータ「この……アホンダラアア！！！」

バキィ！！

佑輔「グラベラ！？」

ヴィータが鉄拳をお見舞いした……

ヴィータ「まったく……無事だったからよかったものの！……」

……ん？」

ふとヴィータは空を見た……なにかが……いる？

佑輔「どした？……ん??」

みんな空を見た……

フィル「……………なにが……………って……………空あ!？」

空間に飲まれたフィルは何故か空にいた…そしてまっさかさまに落ちていった……

ようこそフィル君…このギャグとエロの無茶苦茶世界に…

フィル「なんだそれは!!?うわああああ!!」

佑輔「……………なんか近づいて…っていつか……………こっちに落ちてる???なあ…スバル……………あれ…?」

佑輔が回りを見ると誰もいなかった…

佑輔「あれ？みんな？どこだ？………ん…？」

遠くの岩場に見るとみんないた…そこでヴィータがなにか手旗信号をしてる…

佑輔「なにに？スバルが確認した所？お前に向かって…落ちてるので…我々は退避します…ちなみに…人が落ちて来てるから……しっかり…助け…なさい…更に言つと…後三秒……うおい！！そりゃあんまり…………」

佑輔が非難を叫ぶ間もなく…

チュドーン！！！！！！！！！！

エリオ「佑輔さああああん！？」

スバル「あゝあ…可哀想に…」

ヴィータ「ま…あいつなら生きてるだろ…」

なんとも冷たい面々……………そして佑輔に近づいた……………そこには……………

佑輔「……………（死亡（笑））」

フィル「いったたた……………あ…あれ…生きてる……………」

佑輔が下敷きになったお陰でフィルは無事だった……………
ていうか…無事なんだ……………あの高さから……………（汗）……………

ヴィータ「おい、無事か？」

フィル「え…？」

懐かしい声に呼ばれ…俺はふと声のしたほうを向いた……………

フィル「ヴ…ヴィータ…副…隊長……………」

夢じゃない……………確かに…ヴィータ副隊長だ…そして…その後ろには……………

フィル「スバル…エリオ…」

俺は涙が出そうだった……だが…この三人がいるということは、
ここは過去だ…予定の時間とは少し違うみたいだが……なら…それ
らしく振る舞わなくては……と…思った矢先……

ヴィータ「……誰だ…？」

フィル「え…？」

俺は耳を疑った……今なんと言った…？誰だ？……俺の事…
知らない…？なんで？

フィル「え！？えつと……」

プリム『マスター…マスター…』

フィル（プリム？）

プリム『少し思う所があります…ここは話しを合わせてください…』

フィル（……………わかった…）

俺は誤魔化す事にした……

フィル「す…すみません…貴方がたの事は…局では有名ですから、アハハ…（汗）」

ヴィータ「ふ…ん……………」（ま、良くない噂なんだろうな…）

スバル「所でさ…え…と…どいてあげてくれない？（汗）」

フィル「は…？」

俺はふと下を見ると……………

佑輔「now deth 中……………」（泣）」

訳のわからない寝言を言ってる男性を踏んでいた…

フィル「うわわわ！？すみません！！！」

そんなこんなでフィルはスバル達と一緒に機動六課に保護という名目でついていった……

機動六課……………

はやで「で……………このヘンテコなりモコンが光を発した後で…この男の子が落ちてきた…」

スバル「まあ…そういう事です…（汗）」

はやてやなのは達、フォワードメンバーも一緒に報告を聞いていた

……

はやて「はあ……………とうとう人様にまで迷惑をかけおってからに…
……ごめんなあ…え…と…」

フィル「あ、フィルです…フィル・グリードです。」

フィルが自己紹介をし、みんなも改めて自己紹介した……………

フィル（なんか…妙な感覚だな……………みんな俺の事知らないなんて…
…）

シャーリー「解析の結果ができましたよ」

あ、シャーリー…懐かしいな……………と懐かしいんでいたが…次の一言で硬直する事になる…

シャーリー「フィル君…あなた…

未来人ね？」

フィル「……………え…？（汗）」

い……………一発でバレたあああああ！！…なんでだ！？

フェイト「ど…ど…どういう事！？シャーリー！？」

シャーリー「実は……………」

シャーリーが言うにはこうだ……………

このリモコン……………どうやら時空間にアクセスして…跳んだりする装

置らしい……俺が未来から来たって事がわかったのはデータからって事……………だけど……………

フィル（ただ…過去に行くってのはわかるが……………けど…なんで…こんなわからない世界に……………ていうか…違いすぎる…）

プリム（……………どうやら…私の予想が…当たるかも知れせんね……………けど……………まだ決定打にはならない……………今はまだ…マスターにも伏せときましよう…）

はやて「で…フィルは…帰れるんか…？（汗）」

シャーリー「それは大丈夫です。ただ単にエネルギーがなくなってるだけですから…ただ…」

なのは「ただ？」

シャーリー「エネルギーチャージには…一週間ほど…」

はやて「そうか……………はあ……………ごめんなあフィル……………」

八神部隊長は申し訳なさそうに言うてくれた…そして…

はやて「それで…もしよかったら…一週間、この機動六課で過ごさへんかな？」

フィル「え…？よろしいんですか！？」

はやて「無論や まあ…原因は…あのアホのせいやしな……………（怒）」

一方……部屋の片隅では……

佑輔「チーン……………」

まだ気絶していた……

フィル「あの…あそこにいる人……………医務室に連れていったほうが
…（汗）」

フィルの疑問はもっともだった……

なのは「大丈夫だよ。だって佑輔だし。」

佑輔「？……………この人……………機動六課の人なのか……？」

はやて「ほら佑輔！早く起きい！！！」

ペン！！

フィル（叩いた！？怪我人を叩いたあ！？）

だがその男性はむくりと起き上がり……………

佑輔「……………もう朝か？」

ティアナ「とつくに夕方よ……………（汗）」

キャロ「相変わらず……………目覚め悪いですね……………（汗）」

やっぱりいなかったよな……………こんな人……………俺がいた時代には…

佑輔「ん……………おや？？隊舎？？」

あ……………ようやく目が覚めたみたい……………

はやて「さて……………佑輔……………アンタのせいで一人迷惑被った人間がいるんやで……………（怒）」

な……………なんか八神部隊長……………顔が怖いんですけど……………

フィル「あ、あの無事だったんで……………なにもそこまで……………（汗）」

あれ……………なんで俺……………この人の弁護してるんだろ……………（汗）

佑輔「へ？……………落ちてきたのって……………こいつ？」

佑輔と言われた人は俺を指さして尋ねた……………てか……………指ささないで……………

はやて「そ・う・や！（怒）」

ああ八神部隊長……………その顔はホントに怖いです……………キャロがなんか泣きそうですよ……………（汗）

佑輔「……そんな馬鹿なああああ
あああああ！？」

「はやてうひゃ!？」

「フィル、うわ!？」

いきなり大絶叫しましたよ！？この人！？

佑輔「な……なんで……こんな……事に……くう！」

なんか……膝について……シヨック……受けてるんですけど……（汗）

「フェイト、な……なんか……珍しく……反省してる……のかな……？」

はやて「ま……まあ……そこまで反省……しとるんなら……」

佑輔「ちっげええええええええええ！！！！！！！！！！」

はやて「はわ！？じゃ…じゃあ…なんやねん…」

佑輔「俺が……言いたいの……」

「フィル、言いたい…の…？（汗）」

佑輔「……………く……………なんで男なんだあああああああ
あああああ！？！？！？！？！？！？」

みんな「へ？（汗）」

漢の叫びここにあり……………ていうか…意味わかりません…（汗）
みんな目を丸くしてます…

ヴィータ「お前…なにを…（汗）」

ヴィータ副隊長が佑輔さんに尋ねた瞬間…怒涛の如く…

佑輔「だつてよ！！こういう場合普通落ちてくるのは可愛い女の子
でしょ！！その女の子はメイドで巨乳ポインちゃんで魔法使い！
そんでもってネコミミ & amp; ネコ尻尾付き希望！！そして俺
が犠牲になって助ける！！そこから始まる恋！！そしてええええ
！！！！LOOVE（かなりイイ顔（笑））…
…んで！！！！めくるめくのモツコリタイムが始まる壮大な！
恋物がた……………

チュドーン！

ぶるたぎあー？」

なのは「まあだ目が覚めてないのかなあ？」

フェイト「佑輔」 もう一回地獄へ行く？」

はやて「なんなら天国でもかまへんでえ」

こ…怖い…隊長陣が…魔王化してる…

フィル「……………はっ！」

俺は全てを理解するのに時間がかかった……

フィル「ちょー！！今のはいくらなんでも死にますよー！」

俺は佑輔さんに駆け寄り……

フィル「大丈夫ですかー！」

佑輔「……………やっぱり男なんだああ……………しくしくしくしく……………（泣）」

フィル「……………トドメ……………」

ピコン！

俺は何故か持っていたピコピコハンマーでトドメをさした…

そんな時だった……………

??『データ入力完了……対象を変換します……』

フィル「ん……？」

佑輔「………今……お前喋った……？」

フィル「いや……俺じゃ………な……！？」

フィルは一点を凝視した………そこには……赤いクリスタルが浮いていたのだ……

キュイイイン……

クリスタルは光を段々吸収してるように見える……

佑輔「な……なんか……やばそうだな………（汗）」

佑輔さんがそう言った瞬間………

ズビビビビビ！………

クリスタルが急に光を乱射しだした！これには当然みんな驚き……パニックになった……

なのは「うわわわわわ！？」

ティアナ「な………なんなのよ………！？」

はやて「とりあえず総員退避………！？」

みんな部屋から退避しだした……が……！！

キャロ「きゃ！？」

ドタ……！！

キャロがコケてしまった！やばい！！クリスタルがキャロを狙ってる……！！

フィル「キャロ……！！」

俺はキャロを守ろうと前に出た……だが……

佑輔「さあせるかあああああ……！！！！」

更に俺の前に佑輔さんが出てきて……

ズガアアアアン……！！

佑輔「うおおお……！？」

光に撃たれ……壁に吹っ飛ばされた……そして……

クリスタル『変換……完了……』

キュイイイン………

どうやらクリスタルは機能を停止したようだ………だがそんな事よ
り………

フィル「佑輔さん……!!」

キャロ「大丈夫で……え……（汗）」

フィル「な……（汗）」

煙が晴れ……そこにいたのは……

??「まったく……酷い目に……あれ……なんか……俺の声……高くなってる……」

バン!

メイド服!!

ババン!!

巨乳ボイン!!

バババン!!

ネコミミ&ネコ尻尾!!

バババババン!!

オマケ!! ツインテール!!

ジャッジャーン!!

真・東雲佑子!! 爆誕!!

フィル・キャロ「佑輔さあああん!?!」

佑子「.....なんじゃこりゃああああ
ああああ!?!」

インターミッション!!!!

シャーリー「ええ…要するに…あの赤いクリスタルは…変身魔法を使う一種の装置だったわけで…効力は1日…って…みなさん聞いてます…？（汗）」

みんなシャーリーの言葉は聞こえておらず…みんな佑子……もとい…女と化した佑輔さんを見ていた…

リン？「可愛いです」

ある者は賛辞し…

ティアナ「ぷ…くくく…」

またある者は笑いを堪え…

ヴァイス「ぶわあはっはっはっ！…」

ある者は大笑いした…

佑子「……………お前ら……………笑うなあああ！！！」

なんとも哀れとしか言いようがない…（汗）

フィル「すみません…佑輔さん…その俺をかばったせいで…」

そうだ…この人はキャラをかばおうとした俺を守ろうとして…こんな目にあっただ…だから俺は笑う事はしなかった……………

……………うん…頑張って我慢しました…（汗）

佑子「ああ…いや気にすんな 俺が勝手にやった事だからよ」

フィル「は…はあ…」

佑子「ところで……」

フィル「はい？」

佑子「名前…なんだっけ…（汗）」

ズコ…!!

みんな一斉にコケた…

フィル「…アハハ…自己紹介しなかったですね…（汗）フィル・グリードで…じゅ…17歳です。」

佑子「…なんかえらい間がなかったか…？（汗）」

フィル「気のせいです。」

佑子「そうか…（汗）んじゃこっちも…東雲佑輔だ 歳は25年でヨロシク」

フィル「…え…25…ですか？（汗）」

佑子「そ…そうだけど…」

フィル「…見えないです…（汗）」

スバル「だよね…（汗）」

佑子「……………（汗）」

自己紹介も終え…お互い握手を交した……………そんな時…………

はやて「ここら 東雲佑輔じゃなくて東雲『佑子』ちゃんやろ？」

佑子「お前…またそれか…（汗）」

はやて「だって 今回はホンマの女の子なんやから」

ん…今…今回と言ったような…（汗）」

フィル「あの…八神部隊長…今回って…？」

すると八神部隊長は狸顔で…

はやて「実はな…佑輔は一回女装した事があるんや」

フィル「……………マジですか…？（汗）」

俺はこの人を見る目が変わりそうだった…………

佑子「誤解を招く言い方はやめろ…（汗）お前が無理矢理やらせたんだろうが！」

あ…無理矢理だったんだ…ちょっと安心した…と思ったら…フェイトさんがなにかコソコソしてる…………バルディッシュにチェーン…？

フィル「あの…フェイトさん？なにをしてるんですか？」

フェイト「ギク…な…なんでもないよ？（汗）」

なにやら動揺してますが…目を反らしてますよ…（汗）

佑子「……………フェイト……………それはさすがに怒るぞ…………（怒）」

フェイト「アハハ…駄目？（汗）」

佑子「当たり前だ！……………！」

一体なにをしようとしたんですか…（汗）ていうか……………なんか…フェイトさん…人格変わってませんか…？（汗）

スバル「所でさ…佑輔って…下はどうなってんの？」

佑子「む……………？」

バツ！！

フィル「なっ！？……………」

エリオ「うわ！？……………」

ヴァイス「うおお！？……………」

いきなりスカートを巻くし上げましたよ！この人！？

フエイト・キャロ・シャーリー『見ちゃダメエエ!!!!!!!!!!』

グサツ!!!!!!

フィル・エリオ・ヴァイス『ぎゃあああああああああ!?!』
サミング(目潰し)を思いっきり食らってしまった俺達は、地べたをゴロゴロと転がり悶絶した…

ティアナ「アンタいきなりなにしてんの!?!」

と、ティアナが一喝したが……………

佑子「……………無くなってる……………俺の……………バーニング
モツコリがああ……………(汗)」

なんですか…バーニングモツコリって…(汗)ちなみに……………下着
も女物だったそうです…(汗)

インターミッション!!

佑子「だあああ!!!!もう解散だ!!!!」

この一言でとりあえずお開きとなり…俺は一週間…この機動六課で
お世話になる事にした……………ちなみに……………解散したあ
と佑子さんが八神部隊長に胸を揉まれた事は言うまでもなかった…

……………

佑子「やめれええ！？／／／（泣）」

はやて「うわ！これは…フェイトちゃんやなのはちゃん並や……（汗）」

なのは「え！？ホント！？」

フェイト「佑子って…スタイルいいんだ…」

佑子「お前らも混ざるなああああ！？／／／／／」

インターミッション！！！！…なんか多いな…

俺は一室をもらい、そこで体を休めていた……

フィル「………やっぱり…この過去は…違う過去…だよな……」

プリム「……なにかわかるか？」

プリム「……いえ……まだなんとも……ただ……原因としては……あの東雲佑輔という女……じゃなかった……男が使ったリモコンが……」

フィル「だな……ふう……悪い人じゃないけど……何者なんだろ……」

プリム「……限りなく近く……限りなく遠い世界……」

フィル「???プリム？」

今なにか……プリムがボソツと言ったような……

プリム「いえ……なんでもありません……」

フィル「そうか……」

プリム（けど……あの男…………なにか危険な感じが……杞憂なら……いいんですけど……）

フィル「とりあえず……風呂に入ろう……」

俺は汗を流そうと部屋を出た……

エリオ「あ…フィルさん。」

フィル「エリオ。お前も風呂に？」

エリオ「あ…はい。」

フィル「じゃあ一緒に行こうか。」

俺達と一緒に風呂に入る事にした……………

一方……………

女風呂……………

スバル「それにしても色々あった1日だったね〜」

ティアナ「主に佑輔のせいだけだね……………（汗）」

キャロ「アハハ…（汗）」

フォワード陣も入浴中だった……………

ティアナ「……………はぁ……………」

ティアナは自分の胸を見てため息をついた……………そう…佑輔の胸を見てシヨックを受けていたのだ……………

スバル「ティア？どしたの？」

ティアナ「うん……………なんか…ね…佑輔でさえ…胸……………大きいんだなって……………」

スバル「そういえばスタイルよかったね」

キャロ「それに美人でした。」

ティアナ「なんかもう…色んな意味で…敗北した感じね」

スバル「そうだね…佑輔って…料理もできるし…」

キャロ「気配りもできますよね…」

ティアナ「……………なんか…神様って…時折残酷だと思うわ……………」

佑子「そんな事ないぞ？お前たちまだ若いんだから　まだまだ成長

フィル「……………」

エリオ「……………」

佑子「……………よ…よお……………」

ブシュウウウウー！！！！

二人は盛大に鼻血を出して湯船を血の海に変えた……………

佑子「きゃあああああああ！？フィル！エリオ！しっかりしろお
おお！？」

スバル「いや…きゃあああ！はないよ…（汗）」

薄れゆく意識の中…俺は思った……………こんな人がいて…一週間…
無事にすむのかと……………

チーン…合掌…

ちなみに……

なのは「はやてちゃん……………（汗）」

はやて「なんや？ゴクゴク……」

フェイト「そんなに牛乳飲んだら…お腹痛くなるよ？（汗）」

はやて「だってウチより大きかったんや！悔しいんやもん！！（泣）」

なのは「……………（汗）」

佑輔の胸に嫉妬した人がもう一人いた…

後編へ続く!!!

またまた番外編！！今日はゲストのフィル・グリード君……カアアモン！！

すみませんでしたああああ！！！！！！（泣）なんつかもう！すみませんでしたああああ！！！！

更に番外編！！中編！！漢は格あるべし！！（前書き）

もっ…なにがなにやら…（汗）いや…ホントすみません…（泣）
「修正しました」

更に番外編！！中編！！漢は格あるべし！！

よお、みんな。佑輔だ。ん？佑子じゃないのかつて？あれは効力一日だ。というか、ファイルが来てもう三日たってるんだよ。なぜかって？

.....察してくれ.....大人の事情だ.....

んでだ、三日も経てば大体そいつの性格がわかるってもんだ...そうさな...一言で言つと...

「真面目過ぎだあああああああああ！！！！！」

「いきなり何叫んでますか…（汗）」

ちっこいのがなんかツツコミをいれたが、まあ今は放っておこう…

「ひどいですうゝゝゝ！！！！告白までした…サブヒロインなのに…
（泣）」

実は昨夜のことだ…

「……もう放置ですか…」

もう夜中の二時を指すころ…俺は腹が減ったので食堂へ（無断で）
笑）（食へに行く途中、何故かデータ室に光が灯っていた…

「ふう…後は…」

「こんな遅くまでお仕事か？」

「あ、佑輔さん…」

どうやらデータをまとめてるようだ…この分じゃ時間もわかって
ねえな……

「お前な…別にここの職員でもあるまいし…いわば客人だぜ？そこ
までする必要はないんじゃないか？」

「はあ…まあ…」

「ん…？」

なんだ…今…悲しそうな表情になったような…

「まあ…後これだけやったら寝るんで…佑輔さんは先に休んでてく
ださい…」

………はあ…こりゃダメだ…言っても聞かんな…

「わ…かったよ。んじやお前もほどほどにな。」

「はい。」

そう言って俺は今回引き下がる事にした…

と…まあそんなことがあったわけよ。だが今日もこの調子なら…あの手を使うしかないな……

「長い回想お疲れ様。(汗)でも佑輔…今模擬戦の最中なんだからちゃんと見なさい。」

「ういゝっす…」

フェイトに言われ…再び模擬戦に目を向けた…目の前で模擬戦をしているのはフィルとなのはだ……だがこの三日間でわかったのはフィルの性格だけじゃない…そう…フィルの戦い方だ……

(……………やっぱり…フィルが押されてはいるが……なのはどの戦い……………だけじゃない…フェイトも…いや…全員と言っべきか……………慣れているな……………)

そう…俺はこの事に疑問を持っていた……………いくらなのは達が有名だからって…あそこまで相手の手の内が読めるはずがない…誤魔化し誤魔化したが…俺にはわかる…まるで何度もやってきた動きだ……………同じ相手と……………

「なあ…フェイト…」

「なに？」

「フィルの奴…未来ではどこの所属だったんだ？」

「え？…確か…本局って…それがどうかしたの？」

「…いや…別に…」

「……………」（あの表情……………なにか気になってる……………佑輔って…そういう時は真面目な顔になるんだよね…）

フェイトは佑輔の表情を見てなにか考えてるというのがわかった……………

（フィルの所属……………そして…今の模擬戦…なんの繋がりが……………）

フェイトの疑問は晴れぬまま…なのはとフィルの模擬戦が終わった……………

「じゃあフィルは少し休憩ね。」

「はい！」

俺は返事をして座り込んだ…次はティアナとスバルの番だ……………と思ったら、佑輔さんが隣に座って来た。

「よう　なかなかのもんだったな。」

「あ…いえ…俺なんかまだまだ…」

「いやいや謙遜するなって さすが本局の人間だな。まるで何度もなのは達とやりあったような動きだったぜ？」

「！？」

『！？』

佑輔さんにそう言われた時、激しく心臓の鼓動が大きく跳ねたような気がした…

（この人……まさか…気付いて……）

プリムは佑輔を警戒しだした……それは俺にもわかった……プリムに言われ…なるべく誤魔化しやっていたが…この人…動きだけで見抜いたのか…？

「……あまり語りたくはないか…まあいいさ。そっちも確証には至っていないみたいだしな。」

『貴方…私たちの事…なにかわかるんですか？』

「さあてな。俺もまだ確証は得てないからなんとも言えんさ。」

ずっとぼけた顔でシラをきった……だが俺には佑輔さんとプリムが何について話しているのかさっぱりだった。

「プリム……お前…何を知ってるんだ……」

『まだ…お答えできません…すみません…マスター…』

「おいおい、フィル。プリムを責めるんじゃないっての。プリムだってまだ何もわからねえんだからよ。はい！このお話おしまい！！」

そう言っつて佑輔さんはこの話を切り上げてしまった。

「佑輔〜！フィル〜！次は二人で模擬戦やってみようか〜！」

向こうからなのはさんが呼んでいる。どうやら俺と佑輔さんで模擬戦をやらせようとしているみたいだ。

「オツケーー！！」

「はい！！」

「よっしゃ…頼むぜ ガンダム…」

俺は ガンダムを装着してフィルを見据えた……………

（さて………この模擬戦で…少しは真実がわかるかな…）

『マスター…くれぐれも気をつけてください……彼の戦闘技術は未知数…というか………ぶっちゃけわかりません。』

「ぶっちゃけすぎだ！…！」

俺はついツツコんでしまった。

「じゃあ行つくよー！始め！…！」

ダウン！…！！

なのはの開始合図と共に佑輔は突っ込んで行った。

「！いきなりクロスレンジか！…！ならその前に……え！？」

「残念！…！読み違えた！…！」

ドガガガガガガ！…！！

佑輔は近づきながらライフルを乱射してきた！…！！

「うわ!?!」

『マスター!?!』

そのまま佑輔は通り過ぎたが……

「……………あれ…当たって…ない?」

『へ…?』

フィルは空にいる佑輔を見た……………佑輔は顔を押さえながら…

「……………失敗した…(汗)」

ズコ!…!…!

みんなズッコケた!!佑輔は全弾外してしまったのだ…

「あつはっは!土壇場の不意打ちってなかなか上手くいかなあ。」

『…なんなんですか……………あの人……………(汗)』

みんな呆れてる中……………フィルとなのはとフェイトは神妙な顔をしていた…

(みんな呆れてるけど……………この人は……………)

(佑輔……………段々とガンダムを性能を活かしてきてる…今回は失敗したけど……………)

（もしまたつてたら……相手に致命的なダメージを与えていた……）

（ますます油断できない……只の射撃型の戦い方じゃない……むしろ……クロスレンジの練達者……）

そう今の攻撃で佑輔の行動がますます読めなくなったのだ……そして佑輔の方は……

（うーん……おつかしいな……なのは達の攻撃は見切れたのに今は見切れなかったのか……うーん……こりゃあ……俺の考えていたより……よっぽど複雑だな……）

どうやら佑輔が考えていたのに結論が出来たようだ……

（とにかく……今は模擬戦に集中だ……）

「プリム…こうなったら読めない以上…こっちから攻めるしかないぞ。」

『了解です！…マスター！…』

俺は戦法を決め…魔法陣を展開した…

「む？くるか……」

「クロスファイアー！！シュート！！！」

ドドドドド…！！…！！

フィルは誘導弾を撃ち、自分も飛び出した。

「誘導弾か…！！…！！ならば、フィンファンネル…！！！」

ピシュン！ピシュンピシュンピシュン！！

佑輔も負けじとファンネルを撃ち出した…！！

ピシュンピシュン！

ドドドドド…！！…！！

二人は誘導弾を操りながらお互い撃ち合っていた…

「ぬ！く！そこか！！」

ドギョーン！！！！

フィルの動きを追い、ライフルを撃ったが…

「ラウンドシールドリフレクター！！」

ガキーン！！！！

フィルの鏡面化したラウンドシールドにライフルの弾は弾かれた！

「嘘！？……………はっ！！」

一瞬の驚きが命取りになった……………後ろからクロスファイアーの二つが迫り…

ズガン！！

「ぬお！？ブースターが！！！！」

佑輔は地面に落ちてしまった……………そしてフィルはその隙を逃さないよう……………

「プリム！！！！」

『はい！！！！』

砲撃魔法を唱え……………佑輔に撃とつと銃口を向けたが…

「ブラスト……………」

ギラッ！！！！！

「なっ！？」

「……………」

佑輔に睨まれ…恐怖した…いや…恐怖したのは…睨まれたせいじゃない…感じたことのないパワーに…そして…誰かに似ていた目にだ…誰かに…その時…一人の女の顔が…頭の中をよぎった…そつ…忌まわしき…あの…女の顔が…

（今のあの反応は！？まさか！！）

「あ…く…」

（……………！？しまった……………やっちゃった……………）

佑輔はつい剣士としての闘気を出してしまったのだ……………そして……………

「すう…はあ……………」

佑輔は深呼吸をし…闘気を消した……………そしてフィルを見上げた……………だが…なにか様子がおかしい……………

「ん…フィル…？」

「……………ット口……………」

「へ……？」

なにかつばやいたようだ……よく聞き取れなかったが……

「うおおああああああ……！！貴様はああああああ……！！」

ダウン……！！

フィルは佑輔に突っ込んで行った……

「……！！フィル……！！」

「佑輔……！！避けて……！！」

なのはとフェイトが二人を呼ぶも……

「……………ガンダム解除……」

ピシュン……！！

フィル「うおおお……！！」

フィルはプリムをセイバーモードにして来たが……

スカ……！！

「んな……！！」

佑輔はいとも簡単に避け……

「目を……覚ましやがれえええ！！！」

バキィ！！！！

フィルの顔面をすれ違い様に殴った。

「うわっ！！！」

ドタ！！

フィルはそのまま地面に転がってしまった……

「う……あ……お……俺は……？」

「どうやら正気に戻ったみたいだな。大丈夫か？」

ふと見上げると佑輔さんが手を差しのべてくれていた……

「え……あ……すいません……」

俺は佑輔さんの手を握りなんとか立ち上がった……

「二人とも！大丈夫！？」

みんな駆け寄ってきた……

「俺はなんとかな フィル……お前は？」

「俺も……大丈夫です……」

「よかったあ…びっくりしたよ。それから…佑輔。」

「ん？」

フェイトは佑輔の耳元で…

（駄目じゃない。剣士モードになったら！また無茶したらどうするの！！）

（アハハ…すまん…つい（汗））

「剣士モード…？」

なんだ…？剣士モードって…もしかして…あれが佑輔さんの…本気の状態…となると…俺は…

（手加減…されていた…？）

俺がそんな事を考えていると……

『佑輔さん…貴方…何者なんですか？』

「へ…（汗）何者って言われたら…人間としか…（汗）」

『じゃあ…別の聞き方をします…貴方は…私たちの敵なんですか…？』

「なっ！？プリム！！」

いきなりプリムがわけのわからない事を言い出した…佑輔さんが敵…？でも…あの時…確かにアイツと同じ…気配がしたけど…だけど…俺は…

「はいい！？なんでそうなの！？」

「ちょ！ちよつとプリムどうしちゃったの！？佑輔が敵な訳ないでしょー！」

スバルもいきなりのプリムの一言に驚き…プリムに怒鳴った…

「プリム…いくらなんでも言いすぎだ…」

プリム『……すみません…言葉が過ぎました…

……非礼を……お詫びします……」

「え……あ……いや……どうも……（汗）」

佑輔はただキョトンとするだけだった……

すると……

「佑輔さん……」

不意にフィルに呼ばれた……

「なんだ？」

「これだけ聞かせてください……俺との模擬戦……手加減しましたか……？」

「……してないぞ。」

佑輔さんは少し間を置いて答えた。だが……

「嘘だ……！剣士モードが貴方の本気なんですよ……！……何故それでやってくれないんですか……！？」

「フィル……それは……！」

「待てフェイト……」

「佑輔……」

「……………」

佑輔さんは黙ったまま答えてくれなかった……………」

「お願いします！！本気で戦ってください！！俺は……………佑輔さんを
超えて強くなりたいんです！！！」

俺は必死でお願いした……………この人の正体がなにかわからない……………だけど
……………この人を超えないと……………アイツに勝てないとわかるからだ……………だが……………」

「俺は本気でお前と戦った……………そして……………あの勝負は……………俺の負けだ。」

「！？……………くっ……………！」

タッタッタ……………」

「フィル！！！」

フェイトさんの制止を振りきり……………俺はその場を走り去った……………」

「……………ま……………アイツの気持ちは……………わからんでもないが……………いや……………むしろ
……………わかるの方が正しいな……………」

「……………どういう事……………？」

ティアナが俺に尋ねてきた……………」

「……………アイツもいっぱしの……………男だっ……………てことさ……………そして……………アイツは……………」

フィルは…俺と同じ…いや…それ以上の悲しみを背負っている…
…」

「…悲しみ…？」

「……………」

佑輔はそれ以上語らず…………その場の全員は…なにも言えなかった…

夕日が沈みかけた頃…俺は屋上で景色を見ながらぼーっとしていた
…………

「…なあ…プリム……………」

『……………なんでしょう……………』

「俺は……………やっぱり…弱いんだろうか……………」

『……………』

プリムは答えてくれなかった……………そんな時…扉が開いた……………

キィ…

「フィル、ここにいたんだ……」

「フェイトさん……」

フェイトさんは隣に来て俺と同じ景色を見ていた……二人の間に少し沈黙が流れた……

「……私もね…フィルの気持ちはわかるんだ…私も…佑輔との本当の決着…つけられなかったから……」

「え……？」

フェイトさんと…佑輔さんの…決着？なんの事だ……？

「私ね…子供の頃…なのはと初めて会った時に…佑輔とも出会ったんだ…そして佑輔と戦った……」

「え！？」

そんな話…初めて聞いた……なのはさんと出会ったって……確か…P・T事件……もう10年前の話…

「フィルはさ…木刀って知ってる？」

「え？ボクトウ……？」

「やっぱり知らないかな？木で作った剣なんだ…昔いた世界でいうなら…刀だね。佑輔は…私と戦った時…ガンダムじゃなくて…そ

の木刀一本だけだったの……」

『ええ！？そんな……木で作った……剣で……フェイトさん相手に！？ありえませんか！！』

「ふふ……驚いた？プリム。だけど……私は……勝てなかったんだ……信じられる？バルディッシュに木刀でヒビを入れられたんだよ？」

「な！？」

俺とプリムは信じられなかった……いくら子供の頃のフェイトさんだからと言っても……そこらへんの魔導士よりは……よっぽど強かったはずだ……なのに……勝てなかったなんて……

「でも……佑輔は……自分の敗けだって言ったの……私が佑輔の足に傷を負わせたから……けど……私は……勝てたとは到底思えなかった……その時の私には……佑輔に言われた通り……迷いが生じてたから……」

「……………」

「そして……10年の時を経て……私たちは再開した……ティアナの事でのとは佑輔がぶつかり合うまでその木刀の人だって気付かなかったけど……」

フェイトさんはちょっと照れながら言った……

「でも……佑輔だってわかった時……嬉しかった……私にとっては……うつん……私やなのはにとっては……心の師匠だったから……」

「心の……師匠……？」

「そう…師匠なんだ…なのはには不屈の心を…私には…迷いなき太刀を…教えてくれたから…」

「不屈の心…迷いなき…太刀…」

「そして…決着を…つけたかった…東雲流剣術の使い手…東雲佑輔と…けど…それは叶わなかった…佑輔は…もう…東雲流剣術を…使えなくなってた…」

「え…！？どういう事ですか…！！」

「それは…」

俺はフェイトさんから佑輔さんの過去を聞いた…家族の事…そして体の傷…心の傷を…そして…使えなくなったかわりに…ガンダムを使っている事…ニュータイプ的事…クリスタルの事…紅き瞳…闇の炎の事も…

「………そんな過去が………」

（………私たちと…似たような過去が………）

「だから…佑輔は決して…フィルが弱いなんて思っていないし…ガンダムでは…本気だったんだ…だから…」

「………わかってます………俺………佑輔さんに………謝………」

「謝らなくたっていいぜ？別にお前は悪かねえんだから。」

「「佑輔^{さん}！？」」

いきなり背後に現れてびつくりした……まるで気配を感じなかったからだ…

「やれやれ…暗い過去は俺のキャラじゃないんだがな…」

「佑輔さん…俺…」

「だから謝るなって。そんなかわり俺の過去を知ったんだ、だからこつちも聞かせてくれないか？」

「え？なにをですか？」

「……………これは俺の憶測なんだがよ…フィル…お前の過去は…ここと違うんじゃないか？」

「!？」

「え…どういう事？佑輔。」

佑輔さんの言葉に俺は驚いた…フェイトさんに至ってはよくわかってないらしい…そして……………

『佑輔さん…貴方…やはり気付いていたんですね…』

「プリム？」

「やはりプリムも俺と同じ結論に達していたか…」

プリムも…同じ結論？

「プリム!!お前…なにを知ってるんだ!!」

『マスター……………それは…』

プリムが言おうとした瞬間…佑輔さんが遮った…

「俺から説明してやるよ。フィル…お前さんは平行世界の未来からここに来たんだ。」

「「ヘイコウ…セカイ？」」

フェイトとフィルはよく解らないような顔をしていた…

「まあ…簡単に言えば、『限りなく近く…限りなく遠い世界…』それが平行世界だ…」

「ゆ…佑輔、余計にわからないんだけど…（汗）」

「どうやらフェイトは余計に混乱したようだ…俺…説明下手だなあ…（汗）」

「う…ん…じゃあ、二つ質問だ。まずはフィル、お前のいた世界では…お前さんは機動六課にいたんじゃないか？」

「！？」

『はい…そうです…』

驚いたフィルの代わりにプリムが答えた…

「え！？機動六課に！！で…でも…フィルは…本来いないはず…え…？え？」

「やはりな……わかったかフェイト？これが平行世界ってやつだ…俺達の世界には、フィル・グリードという人物はいない…だが…ここに居るフィルは…間違いなく、機動六課に居た世界の未来からここに来たんだ…」

「そんな…ことが…」

「どうやらフェイトには想像のつかない事態だったようだ…」

「そして…フィルのいた世界では…俺は…」

『はい…貴方は…存在していません…』

「そうか…」

わかっていた事ではあったが…やはり…そういう世界もあるって事に…少しショックだった……

「でも佑輔さん…どうして俺が平行世界から来たって…」

「模擬戦だよ…お前の戦い方が教えてくれた…」

「戦い方…?」

「東雲流剣術の事は聞いたな? 東雲流剣術の極意は、先の先…つまりは攻撃の先読み…そして更に先手を打つ事にある…だから…お前の戦い方を讀んだのさ。」

「極意……」

フィルとフェイトはジッと聞いていた…

「お前の戦い方は、なのは達とは慣れてはいたんだが…俺との戦いには一切慣れてはいなかった…だから…お前のいた世界では俺はおらず…そしてなのは達との戦いで機動六課にいたんじゃないかと讀んだんだ…」

『たったあれだけの動きで…凄い…』

「誤魔化すつもりだったんだろうが…俺の目は欺けなかったな」

「う……」

あ…ちょっと今フィル悔しそうな顔した……案外負けず嫌いなのか……？

「でも…そんな世界がホントに…」

フェイトはまだ半信半疑だった…

「ここにフィル・グリードがいる…それがなによりの証拠だ…」

「……………プリム……」

『すみません…マスター…無用な混乱は避けるために……黙っていました……』

「いや…ありがとう…プリム……」

二人のやりとりを見ていた佑輔は口を開いた…

「……………んで…お二人さん……」

「はい？」

神妙な顔をして二人に尋ねた……

「俺は誰と似ていたんだ……？」

『「!？」』

「佑輔？」

いきなりの言葉にフェイトはわからず……フィルとプリムは言葉にできなかった……

「……………それは……………」

「……………もう一つ気にはなっていた……………フィルが俺以外のメンバーを懐かしみ……………そして悲しみの目をしていた……………憶測ではあるんだが……………お前の世界の機動六課でなにかが起こった……………そして……………その原因が……………存在していないはずの俺となにか関わりがあった……………違うか？」

「……………わかりました……………お話します……………俺達の世界は……………」

フィルは語りだした……………自分の世界の出来事を……………

「そんな!？」

「……………」

フェイトは驚愕し… 佑輔はなにも語らなかった……

「全て… 真実です…」

「そうか…………… みんなが… な… だが… やはり俺は… 存在していな
いようだが…」

「はい… 確かに存在していません…………… けど… あの時… ヤツの気配と
… 同じだったんです…」

フィルは険しい顔をしながら言った…

「… 話に出た… クアットロとかいう女か……………」

佑輔は考えた……………

俺と関わりがある…………… 東雲流剣術…………… いや… この世界にはなんの
関わりもない…………… とすれば… クリスタル…………… 黒い炎… 紅い瞳……………
…………… ダメだ…………… わからん……………

佑輔は考えるのをやめた…

「…………… ねえ…………… 佑輔……………」

「ん……………？」

「私たち……………」

「あのな、平行世界なんだぞ？こつちの世界までそうなってたまるか……」

「でも……」

フェイトは真っ青になりながら……泣きそうになった……

「あの……フェイトさん……佑輔さんの言う事が正しいなら……この世界でそんな事が起きるとは限りませんよ……次元事態が違っんですから……」

フィルもフェイトを励ました……

「もし……そんな事になったら……俺が気合いを入れてやるさ……」

「……佑輔さん……」

「守ってくれるんじゃないんだ……」

フェイトは残念そうに言った……

「すまん……俺は守ってやるとか……そんな恰好い事も言えんし……できると思えん……だが……戦う事はできる……みんなと一緒に……」

「………そっか……でも……一番守りたい人は……やっぱり……」

「………さあな……」

佑輔は笑顔ですつとぼけた。

(わかってるよ…佑輔…貴方が一番守りたい人は……………)

はやてなんでしょ…？)

「さあて、話しはここまでにしようや」

「佑輔さん…あの…」

フィルは言いにくそうにしていたが…

「なんだ？謝るつもりならもういいぞ？」

「いえ…そうではなく…」

「ん…なんだ？」

そうすると…フィル、フェイト、プリムが口を揃えて…

「『ただのモツコリバカじゃなかったんですね（だね）？』」

ズンガラガッシャン！！

盛大にコケた…

「…つくく……………お・ま・え・らあああ……………！（怒）」

ゴチン！ゴチンゴチン！！

兄貴の鉄拳！

「お…おおお…」

『じ…地味に痛い…』

「酷いよ… 佑輔… ていうか… デバイスを… 殴っちゃダメだよ… とうか… デバイスに痛みを与えられるんだ…」

全員非難するが…

「やかましいわ…!! 俺だって頭は使うわい!!」

だが内心は……

(どこぞのアニメみたいな展開のような気がしたからなあ……………)

……………まさか当たりとは…………… うん……………

黙っておこう…)

やっぱり半ば当てずっぽうだった…

「さて… フィル！ 付き合ってもらおうぞ！」

「へ…?」

佑輔のいきなりの提案にみんなついていけなかった。

「え！佑輔何処に行くの!？」

「ちよっくら男同士の親睦を深めにな！はやてには事後承諾で三口シク!!」

「え!!ちよ！佑輔さん!!うわああ!!」

「ちよ!?!佑輔!?!……………行っちゃった…(汗)」

仕方ないため息をつきながらはやてに通信を入れた……………

『男の親睦?……………なんやそれ…?(汗)』

「さあ…(汗)多分…飲みに行ったんじゃないかな…」

二人は頭を抱えながら考えていた……………

『……………まさか……………』

「はやく?」

なにか思い当たったのだろうか…はやくはすぐさま指令を出した…

『フェイトちゃん…フォワード陣となのはちゃん…シャーリーも出撃や…今回はウチもでる…』

「え!?!レリック絡みの!?!」

はやては険しい……………というか…冷たい眼差しで敵の名前を行った……………

『今回の敵は……………』

佑輔や……………(怒)『

後編に続く! ! ! ! !

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3761m/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS 紅き瞳の暗黒の力...されど心は希望の光...

2010年12月18日15時02分発行